

せんとの書を得たり。成王嘆じて曰く叔父功德ある是の如くなるに反つて二叔の讒に遇うて外國に在ること三年、今天變朕が知る事無きを警なり。乃信は是の事を言ふ。悉民は衆民、僻は邪僻、衆民多く自ら邪僻を立つるを言ふ。會は重會なり、羌は嘆息の聲。可與言己、僻の多き人に向て己が志を言ふも孰か之と共鳴せんや。故に私に湛愛して思ひが縉紛、即ち混亂して整理する能はずとなり。及と立と合と韻、眞と信と身と韻、己と理と韻なり。

願<sub>二</sub>竭<sub>一</sub>力以守義兮 雖貧窮而不改 執<sub>二</sub>雕虎<sub>一</sub>而試象兮 跼<sub>二</sub>焦原<sub>一</sub>而跟止 庶<sub>二</sub>斯奉<sub>一</sub>以周旋兮 要<sub>二</sub>既死<sub>一</sub>而後已 俗遷渝而事化兮 泯<sub>二</sub>規矩<sub>一</sub>之圓方 珍<sub>二</sub>蕭艾<sub>一</sub>於重筥兮 謂<sub>二</sub>蕙芷<sub>一</sub>之不香 斥<sub>二</sub>西施<sub>一</sub>而弗御兮 羈<sub>二</sub>要裊<sub>一</sub>以服箱 行<sub>二</sub>跛僻<sub>一</sub>而獲志兮 循<sub>二</sub>法度<sub>一</sub>而離殃 惟<sub>二</sub>天地<sub>一</sub>之無窮兮 何<sub>二</sub>遭遇<sub>一</sub>之無常

願くは力を竭して以て義を守らん、貧窮すと雖も而かも改めず、雕虎を執て象を試る、焦原に跼んで跟止ららん、庶くは斯に奉じて以て周旋せん、既に死して而して後已を要す、俗遷り渝て事化する、規矩の圓方を泯せり、蕭艾を重筥に珍とし、蕙芷を香からずと謂ふ、西施を斥けて御せず、要裊を羈して以て箱に服け、跛僻を行つて志を獲たり、法度に循て而かも殃に離ふ、惟天地の窮無き、何ぞ遭遇の常無き。

【句解】 執<sub>二</sub>雕虎<sub>一</sub>而試象 章懷太子曰く雕虎は文あるなり、尸子曰く中黃伯曰く我左に太行の獲を執り、右に雕虎を執る、唯象は未だ試す。吾焉に惑ふ。力ある者則ち又牛と爲り象と闘はんを願ふ。自ら謂ふ天下の義人なりと、悪んか之を試ん、大貧窮は太行の獲也。疏賤は義の雕虎也。吾日に之を試む。章懷曰く衡言ふ躬仁義

不<sub>二</sub>抑操<sub>一</sub>而苟容兮 譬<sub>二</sub>臨河<sub>一</sub>而無航 欲<sub>二</sub>巧笑<sub>一</sub>以于媚兮 非<sub>二</sub>余心<sub>一</sub>之所嘗 襲<sub>二</sub>溫恭<sub>一</sub>之黻衣兮 披<sub>二</sub>禮義<sub>一</sub>之繡裳 辨<sub>二</sub>貞亮<sub>一</sub>以爲擊兮 雜<sub>二</sub>技藝<sub>一</sub>以爲珩 昭<sub>二</sub>綵藻<sub>一</sub>與雕琢兮 瑣<sub>二</sub>聲遠<sub>一</sub>而彌長 淹<sub>二</sub>棲遲<sub>一</sub>以恣欲兮 燿<sub>二</sub>靈忽<sub>一</sub>其西藏 恃<sub>二</sub>己知<sub>一</sub>而華予兮 鷓鳩鳴而不芳 冀<sub>二</sub>一年<sub>一</sub>之三秀兮 適<sub>二</sub>白露<sub>一</sub>之爲霜 時<sub>二</sub>壘壘<sub>一</sub>而代序兮 疇<sub>二</sub>可與乎<sub>一</sub>比侘

操を抑て苟も容られず、河に臨んで航無きに譬ふ、巧笑以て媚を干んと欲するは、余が心の嘗ふ所にあらず、

を履み、險難を避けず、亦以て一代の人を服するに足る。跼は臨なり、跼危と成語して險處を臨むに用ふる字なり。焦原は莒國に在る原野の名、廣尋長五十歩、百仞の谿に臨む、莒國敢て近づく莫し、勇を以て莒子に見ゆる者あり、獨り却行齊踵す、張衡も亦以て其の志の堅固なるを言ふ。跟は跟踵クビスなり、險處に墮ちずして踏み止るを言ふ。俗は風俗、化は變化。泯は泯亡。規矩之圓方 規矩は法則なり、是の規矩が泯亡するときは圓も方も作る能はざるなり。蕭艾は臭草、蕙芷は香草、香草を捨て、臭草を珍品として重筥に之を祝藏する。西施も醜婦と稱して擯斥する。羈要裊は坊間流行本に要裏に作る、誤なり。『呂氏春秋』に曰く要裏は古の駿馬なり、駿馬は箱を用ふべきものにあらず。然るに是に羈を施して箱に服せしむるは世が顛倒したればなり。箱は荷車なり。行は習行、跛は不正、僻は僻邪、悪人共が志を獲たるは皆惡事より來るなり。而して法度に循從する者は反て殃過に離ふ。無窮は其の久を言ひ、無常は其の變を言ふ。改と己と韻、方と香と箱と殃と常と韻なり。



温恭の蔽衣を襲て、禮義の繡裳を披きたり。貞亮を辯で以て聲と爲し、技藝を雜て以て珩と爲し、綵藻と雕琢とを昭にす、璜聲遠くして彌長し、淹く棲遲して以て欲ことを恣にし、耀靈忽として其れ西に藏る、己を知て予を華にするを恃む、鵝鳩鳴て芳からず、一年の三秀を冀ふ、白露の霜と爲るに適れり、時晷晷として代序す、疇か與に比伉すべけん。

【句解】 苟容 自分の節操を屈抑して以て小人に容れられんことは斷じて求めず。臨河無航 進退維れ谷まを言ふ。容らるれば乃ち財祿を受く、容らるるを求めざれば乃ち財祿に離る、河は世路なり、航即ち舟航は以て財祿に譬ふ。巧笑は面白からざるに笑ふこと、而かも小人は可笑するもの、余心は此の可笑を嘗行する能はずとなり。君子の態度は温恭なり、大人の守る所は禮儀なり。襲は重なり、『周禮』に黒と青とを蔽と言ふ、五色之を繡と言ふ。辯は「説文」に交織なり、辨髪を見て以て其の義を知るべし。聲は大帶なり。『禮記』に男は鞶革、女は鞶絲とあり。珩は佩玉を言ふ。綵藻 雕琢 共に衡自身が道徳の盛ん、文藻の美なるに喩ふ。璜は半璧「カタワレダマ」なり、佩下の飾と爲す玉なり、淹は久なり。棲遲は游息なり。耀靈は太陽の異名なり、我は前敘する如く人格の高尙なる者なり。然るに何ぞや用ひられずして日將に暮んとす。恃は依頼なり。己知は知己の人を言ふ。華予 予即ち張衡を採用する者は其れ天下に無きや。鵝鳩は「增句」に一名子規とあり、或は曰ふ鵝即ち「モズ」なりと。『廣雅』に曰ふ鵝鳩は布穀即ち「フドリ」なりと。此の如く異説多きも子規が春晚に鳴くを以て百花芳を失するを以て切なりと考ふ。三秀は靈芝の異名、靈芝は一年に三度實を結んで秀を呈すと曰ふ。適は迫なり、鵝鳩も霜も共に讒者に喩ふ、楚辭の筆法は皆然り。晷晷は進む貌を言ふ。晷晷に作る本

あり、晷は信なり厚なり、今の意にあらず。四時變進して代序するを言ふ。疇は誰と同じ。伉は伉偶、私の伴と爲すべき人は誰かあるや。航と管と裳と珩と長と藏と芳と霜と伉と韻なり。

咨妬嫫之難竝兮 想依韓以流亡 恐漸冉而無成兮 留則蔽而不章 心猶與而狐疑兮 即岐趾而據情 文君爲我端著兮 利飛遁以保名 歷衆山以周流兮 翼迅風以揚聲 二女感於崇岳兮 或冰折而不營 天蓋高而爲澤兮 誰云路之不平 勗自強而不息兮 踏玉階之曉暉 懼筮氏之長短兮 鑽東龜以觀禎 遇九臯之介鳥兮 怨素意之不逞 遊塵外而警天兮 據冥翳而哀鳴 鵬鷲競於貪婪兮 我修絜以益榮 子有故於玄鳥兮 歸母氏而後寧 占既吉而無悔兮 簡元辰而假裝 且余沐於清原兮 晞余髮於朝陽 漱飛泉之瀝液兮 咀石菌之流英 翽鳥舉而魚躍兮 將往走乎八荒 過少皞之窮野兮 問三丘乎句芒

咨妬嫫の竝び難き、韓に依て以て流亡せんと想ふ、恐くは漸冉として成ること無けん、留る則は蔽れて章れず、心猶與して狐疑す、岐趾に即て情を據ぶ、文君我が爲めに著を端す、飛遁して以て名を保に利あり、衆山を歴て以て周流し、迅風に翼して以て聲を揚ぐ、二女崇岳に感じ、或は氷折して營まず、天蓋し高れども澤と爲る、誰か云ふ路の平ならずと、勗として自ら強めて息まず、玉階の曉暉たるを踏む、筮氏の長短あらんことを懼る、東龜を鑽て以て禎に觀ふ、九臯の介鳥に遇ふ、素意の逞せざることを怨む、塵外に遊んで天を瞥、冥翳に據て哀鳴す、鵬鷲貪婪を競ふ、我絜を修めて以て榮を益す、子女鳥に故あり、母氏に歸して後寧からん、占既に吉にして



悔無し、元辰を簡んで俶て装ふ、且に余清原に沐し、余が髪を朝陽に晒す、飛泉の瀝液に漱ぎ、石菌の流英を咀ふ、翺として鳥のごとく舉り魚のごとく躍る、將に往て八荒に走らんとす、少皞の窮野を過ぎ、三丘を句芒に問ふ。

【句解】 吝は嘆息なり。妬は嫉妬、嬖は嬖と同じ、好貌なり。『後漢書注』に嫉妬は美人を憎惡す、故に與に竝び難きなり。和本妬に作る疑ふべし。韓は齊仙人韓終を言ふ、王が爲めに藥を採る、王肯と服せず、終自ら之を服し、遂に仙を得。『楚辭』の韓衆即ち是なり。流亡は遁逃を言ふ。無成 仙人を希望するも不可能なりと斷念す。不章 然りと雖も留るも亦其の身は出世する能はずとなり。心以下七字は『楚辭』の語なり。岐陟は周の文王の居し所、セメテ文王にでも遇うて我が所志を談ぜんもがな。文君は文王を指す。我は張衡、文王が自ら占を端正にして我に示さるるなり。利飛遁以保名 占うて得たる卦は何ぞ即ち遯の卦が出づ、天山遯にして艮下乾上なり、艮は山と爲す、故に歴衆山なり。二より四に至るを巽の卦とす、巽は風なり、故に翼迅風と言ふ。遯の上九變じて咸と爲る、咸は感なり、咸の卦は艮下兌上なり、二より四に至るを巽と爲す。兌は二女なり、少陰の卦が二つ出づ。崇岳は艮なり、三より五に至るを乾と爲す、易の説卦に曰ふ乾は氷爲り、兌は毀折爲り、陽、陰を求めず、故に氷折して營すと言ふ。乾變じて兌と爲る、乾は天と爲し、兌は澤と爲す。兌は乾の變ずる所なるを以て乃ち其の儘が天なり。是の故に兌爲澤と曰はずして、天爲澤と曰ふなり。其の天の高きも尙ほ澤と爲る。路之不亨と言ふは、誰が云ふ所なるを知らず、不平何ぞ言ふに足らん、行く可きなり。勸は勉強する貌、勉強して不息なり。玉階は天子の踏む所、今此の玉階の嶢嶢 即ち其の高處を踏んで文王に謁せ

るなり。嶢嶢は高峻を言ふ。懼筮氏之長短 『左傳』に曰ふ晉の卜人曰ふ筮は短し、龜は長し、長に従ふに如かず、筮の未だ盡きず、復龜を以て卜するを言ふなり。文王の占で可なりと信すれども、尙ほ細心に細心を重ねるなり。東龜 『周禮』に龜人は六龜の屬を掌とる、東龜は東に屬し其の色青なり、龜の名物は東より出づとの説は臆斷ならん。觀禎は祥禎に觀ふなり、即ち吉兆に遇ふなり。遇九臯之介鳥 臯は澤なり、介鳥は鶴なり、東龜の卜より出でたるなり、九は『詩經注』に外より數へて九に至る、深遠に喻るなり。介は耿介、怨素意之不逞 吉兆の卜は出でたれども、而かも我が平素の心意は尙ほ存分ならざるを怨むなり。塵外は世間の外なり、世間へ出て遊ばうと注する者は誤る。瞥は視と同じ。冥翳はボンヤリ是を以て高遠なりと注す。哀鳴は衡自身が事なり。鵬鵬は鷲鳥なり、以て讒者に喩ふ。貪婪は「ムサボル」なり。修絜は正道を修すとなり。子は衡自身有故は因縁ありと言ふがごとし。玄鳥は燕子に用ふるが今は鶴を指す、卜して鶴兆を得たるは因縁あればなり。『易』に曰く鳴鶴陰に在り、其の子之に和す、我に好爵あり、吾汝と之に糜ぐ、子は母氏に歸して而して後寧なり、猶ほ臣は賢君に遇うて方に爵祿を享るがごとし、衡に聖君を求め以て之に仕へよと勸むるなり。無悔は無惡なり、占は吉なりしなり。簡は簡別。元辰は吉辰なり、吉辰を簡んで俶装 即ち旅装を整へるなり。沐は髪を洗ふなり。晞は乾すなり、沐して濕ひたる髪を朝陽に乾すを言ふ。瀝液は微流なり。咀は嚼なり。石菌は石上に生ずる靈芝。英は華、其の美華なるを言ふ。翺は飛なり。鳥舉魚躍は其の活潑潑地なるを言ふ。八荒は八方荒遠の地を言ふ。三丘は蓬萊と方丈と瀛洲となり。句芒は木性、東方の神なり、之に三丘は何處邊ぞと問ふ。亡より芒に至る皆一韻なり。



何道眞之淳粹兮 去穢累而票輕 登蓬萊而容與兮 鼇雖抃而不傾 留瀛洲  
而採芝兮 聊且樂乎長生 憑歸雲而遐逝兮 夕余宿乎扶桑 噲青岑之玉醴  
兮 餐沆瀣以爲糧 發昔夢於木禾兮 穀崑崙之高岡 朝吾行於陽谷兮 從  
伯禹於稽山 集羣臣之執玉兮 疾防風之食言 指長沙以邪徑兮 存重華乎  
南鄰 哀二妃之未從兮 翩儂處彼湘瀨 流目頰夫衡阿兮 睹有黎之圯墳  
痛火正之無懷兮 託山陂以孤魂 愁蔚蔚以慕遠兮 越邛州而愉敖 躋日中  
于崑吾兮 憩炎天之所陶 揚芒燦而絳天兮 水泫泫而涌濤 溫風翕其增熱  
兮 怒鬱邑其難聊 頽羈旅而無友兮 余安能乎留茲

何ぞ道眞の淳粹なる、穢累を去て票輕なり、蓬萊に登りて容與す、鼇抃と雖も傾かず、瀛洲に留りて芝を採る、  
聊且長生を樂ふ、歸雲に憑て遐に逝く、夕に余扶桑に宿す、青岑の玉醴を噲ひ、沆瀣を餐うて以て糧と爲す、昔  
夢を木禾に發す、崑崙の高岡に穀す、朝に吾陽谷に行て、伯禹に稽山に從ふ、羣臣の玉を執れるを集めて、防風  
の言を食むを疾む、長沙を指して以て邪に徑し、重華を南鄰に存ふ、二妃の未だ從はざるを哀む、翩儂として彼  
の湘瀨に處れり、流目して夫の衡阿を頰る、有黎の圯墳を睹る、火正の懷こと無きを痛む、山陂に託するに孤  
魂を以てす、愁蔚蔚として以て遠を慕ふ、邛州を越て愉敖す、日中に崑吾に躋り、炎天の陶する所に憩ふ、芒燦  
を揚げて天を絳す、水泫泫として濤を涌す、溫風翕として其れ熱を増す、怒として鬱邑とし其れ聊み難し、頽と  
して羈旅にして友無し、余安ぞ能く茲に留らん。

【句解】

道眞は道德の眞、仙道の眞、一切の煩惱を棄てて以て仙道の淳粹に歸するなり。穢累は汚穢煩累、男

女財寶の欲皆是れなり。票輕は飄輕、飄飄乎として一身輕きなり。容與は「ユックリ」なり。鼇は大龜を言ふ、  
海中の三神山は此の巨鼇が下にて之を擎け、雙手を以て抃拊すと雖も、山は決して傾倒せずとなり。此の三  
神山中靈芝は多く瀛洲に生ずる者なり。此の山に玉石膏あり泉を出す酒の如し、之を名けて玉酒と爲す、之を  
飲めば人をして長生せしむ。憑歸雲は歸雲に憑乗すと見て可なり。歸雲に乗て遐に逝くかと思へば、夕暮には  
早や已に扶桑に投宿するを得たり。岑は山の小にして高きもの。沆瀣は夜半の氣を言ふ。木禾は崑崙に生ずる  
米の木なり。昔夢は字の如く昔年の夢にはあらず、扶桑に宿して此の夜の夢に此の如く崑崙の高岡にて木禾を  
食ふと見しなり。『後漢書』の注に曰く近代の注解皆云ふ、昔日夢に木禾に到る、今現に往て焉を見る。是を發  
昔夢と、臣賢案するに衡が此の賦將に往て八荒に走り以後即ち西より東方に往き、次に南方に往き、乃ち西方  
に適く、此の時正に陽谷扶桑の地に在り、崑崙乃ち西方の山、安んぞ已に崑崙に往き木禾を見るを得んや、良に  
尋究精ならざるに由て斯の謬を致すのみ。朝 乃ち又出立して行く。行く所は何ぞ、陽谷 即ち日出る所なり。  
行て從ふ人は崇伯侯たる禹王なり。禹王は會稽山に在なり。羣神執玉 『左傳』に禹諸侯を塗山に合す、玉帛を  
執る者萬國、『國語』に仲尼曰く昔禹羣神を會稽の山に致す。防風氏後て至る、禹殺して之を戮す。客曰く敢て  
問ふ誰か神たる。仲尼曰く山川の守、以て天下に紀綱たるに足る者、其の守神と爲る。食言は妄語を言ふ、「ウ  
ソ」を防風氏が言うたるに依て之を疾むなり。長沙は稽山より西南、故に邪徑と云ふ。存は存問、重華は舜帝  
南鄰 舜の崩地は蒼梧とす、蒼梧は長沙の南に當る、舜を問うて又以て當時二妃が之を追うて遇はず、水に投  
じて死したる蹤を哀むなり。翩は連翩、儂は儂導即ち「ミチビク」が本義、又反對に儂弁即ち「シリゾク」の義あ



り、今は二妃が相擁して湘瀨に投じたるが故に、憤棄の意に用ふ、此の事を哀むとなり。翻償は「ヒラリヒラリと翻へる」と或る本にあり謬なり。流目は遙に目を放つなり。類は視と同じ、人の衆來を類と曰ひ、人の寡來を聘と曰ふが一樣の解釋なり。衡阿は衡山の阿を曰ふ。曙は靚と同じ。有黎は顓頊の子、祝融氏はなり、死して衡山に葬る。圮は毀なり、覆なり。年處久しく風雨の爲め破毀せられたる墳墓なり。或は謂ふ楚靈王の時、山崩れて其の墳を毀つと。火正は即ち有黎なり、有黎は火の神なればなり。無懷、葬る所の墳に於ては、其の神も安懷する所無きなり。孤魂は空しく山陵に託す。蔚蔚は愁の智に積集する貌。慕遠、此の地は此の如く愁を生ず、愁無き遠地を慕ふの念起るなり。卬州は理想國の名、南方に在ると曰ふ。愉は愉樂、敖は敖遊、昆吾も理想國の一なり。「淮南子」に日昆吾に至る、是を正中と謂ふ。陶は猶炎熾の如し、南方は熱氣強し、而かも此の處に於て憩となり。芒は火光の揚る貌、標は飛火、絳は赤色なり、火光炎炎と揚り以て天に映するを言ふ。泣汙は水の流るる貌、水流も亦爲めに湯の如きなり。溫風は炎風、「淮南子」に南方の極、北戸の外より南委火に至る、炎風の野、二萬二千里。怒は「爾雅」に思なり。鬱邑は憂思の解けざること。顓は短頭の義なり、今は獨の義を取る、羈は羈を以て正字とす、獨行にして伴友なし、茲に留るも安んぞ樂あらん、要に他方に行んとなり。輕と傾と生と桑と糧と鬲と韻、山と言と鄰と瀨と墳と魂と韻、敖と陶と濤と聊と韻、茲は次句へ移る。

願金天而歎息兮 吾欲往乎西嬉 前祝融使舉塵兮 纏朱鳥以承旗 躔建木於廣都兮 撫若華而躊躇 超軒轅於西海兮 跨汪氏之龍魚 聞此國之千歲兮 曾焉足以娛余 思九土之殊風兮 從蓐收而遂徂 歛神化而蟬蛻兮 朋

精粹而爲徒 蹶白門而東馳兮 云台行乎中野 亂弱水之潺湲兮 逗華陰之過渚 號馮夷俾清津兮 擢龍舟以濟予 會帝軒之未歸兮 悵倘佯而延佇 泗河林之蓁蓁兮 偉關雎之戒女 黃靈詹而訪命兮 樛天道其焉如

金天を願て歎息し、吾西嬉に往んと欲す、祝融を前にし塵を舉しめ、朱鳥を纏ねて以て旗を承しむ、建木に廣都に躔ひ、若華を撫て躊躇す、軒轅を西海に超ぎ、汪氏が龍魚に跨る、此の國の千歳なるを聞く、曾て焉んぞ以て余を娛に足らん、九土の風を殊するを思ひ、蓐收に従つて遂に徂く、歛として神のごとく化し蟬のごとく蛻す、精粹を朋として徒と爲す、白門を蹶で東に馳せ、云に台中野を行く、弱水の潺湲たるを亂り、華陰の過渚に逗る、馮夷を號で津を清めしめ、龍舟に權して以て予を濟す、帝軒の未だ歸らざるに會ひ、悵として倘佯として延佇す、河林の蓁蓁たるに泗ひ、關雎の女を戒むことを偉なりとす、黃靈詹りて命を訪ふ、天道を樛めて其れ焉か如かん。

【句解】 金天は秋天、秋の氣は金なればなり。昆吾の熱氣を厭ふが故に今次は冷處に向はんと欲す。西嬉は西方の嬉處との意、乃ち祝融氏を前驅とし、之に毛を以て製せし塵を舉げしめ、要に朱鳥の羽を纏たる旗即ち「ノボリ」を承けしめ、而して廣都と稱する都に行て建木と稱する大樹の下に躔次し、而して若華 即ち若木の枝を拊折して暫く此に徘徊 即ち躊躇せんとなり。而して後八百歳も壽を保つ軒轅氏の西海を超過し、汪氏が國の龍魚に跨乗せんと欲す、然かも哀い哉、余は八百歳も千歳も壽を保つ人にあらず、此の如き國も又何ぞ余を心底から娛樂せしむるに足らんや。是に於てか思ふ。九土は風俗を殊異にす、余に適すべくもあらず、遂に又其の却回を思ふに至る。蓐收 即ち西方の神に従て中土に還らんと欲す、因て自分が自分を思へば、歛然とし



て神化し蟬蛻し、凡俗の人にあらざるかの感が生ず、其の朋も普通の朋にあらず、精粹 即ち中和の氣なり。徒は即ち徒黨、我と歩趨を同じくする者皆是を徒と曰ふ、上下の區別無し。白門は『淮南子』曰ふ編駒の山は西南方なり門を白門と曰ふ。門は蹶むべきものにあらず、而かも蹶と曰ふ。『禮記』に蹶は行遠の貌とあり。云は助語、意義無し。台は我と同じ、中野は野中と同じ、野原の中を行くとなり。亂は章懷太子曰く正しく流を絶つを亂と曰ふ、乃ち「ワタル」と訓する所以。弱水は『山海經』の注に其の水鳥毛に勝たずとあり、鳥毛すら流す能はざる水勢が弱きなり。潺湲は流るる貌、非常なる激聲にも潺湲の語を用ひ、此の如き弱流にも用ふ、潺湲は單に水音を形容するものと心得べし、大小激弱を問はざるなり。返は返止。華陰は華山の北、河に臨むが故に湍渚と云ふ。馮夷は河伯の名、『後漢書』の注に馮夷は弘農華陰幢鄉隄首里の人、八石を服して水仙を得、河伯と爲る。權龍舟以濟予 馮夷をして我が渡らんとする津を先づ清淨ならしめ、而して後正しく龍舟を楫して以て之を濟るとなり。會は會遇、帝軒は軒轅氏黃帝を稱す。漢文の上に於て字を省略して用ふること往往此の如きことを見る、古人が自由自在に此の省略を行ふこと見るべきなり。黃帝が鼎を鑄し處は即ち湖城縣、河華と相近し、故に此に謁見せんと欲して來るも、黃帝は未だ歸らず、遂に會遇を得ず。悵然たらざるを得ず、乃ち以て倘佯して延佇 或は歩し或は止り、聊か情を遣るのみ。咽は字音「キ」訓「イキ」息なり、側に作る本あり誤る。河林の秦秦として茂盛なる處に於て暫く息ふなり。是に於て詩の國風を懷ふ、關關たる雉鳩、河の洲に在り、窈窕たる淑女、君子の好仇と、今此の河林の地の美偉なるを見て此の事を思ひ出すなり。之を思つて延佇する間に黃帝の靈は忽然として前に偕る、乃ち以て我が運命の如何を訪ふ、我が訪ふ意味は何ぞ。天道を探

めて其焉如 畢竟如何にするものぞ。前章の茲と嬉と旗と韻、蹠と魚と余と徂と徒と野と渚と予と佇と女と如と韻なり。

曰近信而遠疑兮 六籍闕而不書 神達昧其難覆兮 疇克謨而從諸 牛哀病而成虎兮 雖逢昆其必噬 鼈令殪而尸亡兮 取蜀禪而引世 死生錯而不齊兮 雖司命其不晰 寶號行於代路兮 後膺祚而繁庶 王肆侈於漢廷兮 卒銜恤而絕緒 尉尅蒼而郎潛兮 逮三葉而遘武 董弱冠而司袞兮 設王隧而弗處 夫吉凶之相仍兮 恆反側而靡所 穆屈天以悅牛兮 豎亂叔而幽主 文斷祛而忌伯兮 闕謁賊而寧后 通人闡於好惡兮 豈昏惑之能剖 嬴擿讖而戒胡兮 備諸外而發內

思 曰く近きを信じて遠きを疑ふ、六籍闕て書さず、神達昧して其れ覆かにし難し、疇か克く謨にして諸に從はん、牛哀病んで虎と成る、昆に逢ふと雖も其れ必ず噬ん、鼈令殪れて尸亡し、蜀の禪を取て世を引ぶ、死生錯つて齊しからず、司命と雖も其れ晰にせず、寶號で代路に行く、後祚に膺て繁庶なり、王侈を漢廷に肆にし、卒に恤を銜んで緒を絶つ、尉尅蒼にして郎に潛る、三葉に逮んで武に遘ふ、董弱冠にして袞を司どる、王隧を設けて處す、夫れ吉凶の相仍る、恆に反側して所靡し、穆天に屈て以て牛を悦ぶ、豎叔を亂て主を幽す、文祛を斷て伯を忌む、闕謁を謁て后を寧んず、通人も好惡に闇し、豈昏惑の能く剖たんや、嬴讖を擿て胡を戒しむ、諸を外に備へて内に發す。

賦 玄 思 〔句解〕 曰は誰が曰くするぞ黃帝なり。近を信じ、遠を疑ふは人の常情、六籍 即ち詩、書、禮、樂、易、



春秋の六經と雖も、闕きて書せざることもあり。神道は神道。味は妄味にあらす冥味なり。覆は審なり。神の道は冥昧にして審明なり難きなり。嗜は誰と同じ、確に此の如くちやと手に物を取て人に示して見せることは何人も出来まじとなり。『淮南子』に魯に公牛哀なる者あり、病んで七日虎と成る、偶また其の昆兄之を覘ふ。虎搏て之を殺す、其の昆兄たるを知らざればなり。『蜀王本紀』に荆の人鼈令登る、其の死骸、流亡して江水に隨ひ、成都に至る、而して蜀王杜宇に見ゆ、杜宇立て以て相と爲す。杜宇、望帝と號す。自ら德龍令に如ざるを以て其の國を以て之に禪る。開明帝と號す。下五代に至り、開明尙あり始めて帝號を去て復王と稱す。引世は五代も世が延引したるを言ふ。人は或は死し或は生れ、錯雜して齊しからず、其の錯雜したる事は、司命、即ち人の運命を司配する神と雖も、其の死生を晰明する事は到底能はずとなり。竇は漢の孝文帝の皇后なり、呂太后の時、宮人を出して以て諸王に賜ふ、竇姫の家清河に在り、趙に如き家に近からんことを願ふ。主遣宦者史に請ふ、必ず我を趙の伍中に置け。宦者之を忘れ、誤て代の伍中に置く、姫涕泣往くを欲せず、相強ふ、乃ち行て代に至る。代王獨り竇姫を幸して景帝を生む、後立てて皇后と爲す。而して文帝は在位二十三年、景帝は十六年なり。繁廡、即ち茂盛のこと、始め厭ひたりしが後に此の幸福なるを言ふ。王は後漢の王莽が女、平帝の皇后と爲りし人、侈は驕侈、平帝之を聘するに黄金二萬斤を以てし、劉歆を遣り、乘輿を奉じ、法駕后を第に迎ふ。王莽帝を毒殺し、漢の位を篡ふに及んで、后疾と稱して朝會せず、莽、后を誅せんとす。后自ら火中に投じて死す。銜恤は即ち皇后が此の如く親子の間に憂を生じたるを言ふ。絶緒、前者は緒子頗る多きに反し、後者は全く緒が絶ゆ。始めは吉にして、終りは凶なりしなり。尉彬蒼而郎潛、逮三葉遭武、尉は漢の武帝

の時、都尉顔駟を誦ふ、彬は蒼の色が蒼雜なるを言ふ、遭は遇なり、武は武帝なり。『漢武故事』に上(武帝)郎署に至り、一老郎を見る、鬢蒼皓白なり、問ふ何れの時郎と爲る、何ぞ其れ老たるや、對て曰く臣姓は顔、名は駟、文帝の時を以て郎と爲る。文帝文を好む、臣は武を好む、景帝老を好む、臣は尙少し、陛下少を好む、而して臣は已に老ゆ、是を以て三葉不遇なり。上其の言に感じ、擢て會稽の都尉と爲す。董は董賢字は聖卿なり。漢の哀帝の時大司馬と爲る。弱冠、即ち年二十二にして、司袞、即ち宰相と爲る、哀帝頗る尊を加ふ、帝崩後、王莽の爲め獄中に殺さる。隧は墳墓を掘る時、地道への通路を言ふ。董賢は此の王にあらすんば作らざる隧道を設けられたるも憫むべし自ら處る能はず、遂に人の爲めに殺さる。相仍は吉極まれば凶、凶も極まれば吉と本別物ならざれば相仍るなり。恆は平常なり。反側は或は吉、或は凶と、孰にも仍ることを言ふ。然らば則ち吉凶は一定する所靡きなり。穆は魯の大夫叔孫豹なり、謚して穆と曰ふ。嘗て齊に奔り、庚宗に宿る、婦人に遇うて私す。夢に天己を厭して勝す、顧て人を見、之に號て曰く牛余を助よと、乃ち之に勝つ、後魯に還るに及んで庚宗の婦人、獻するに雉を以てし曰く余が子長せりと。召して之を見れば則ち夢し所なり、遂に豎即ち下僕と爲さしむ、寵あり。穆子疾に遇ふに及んで、豎牛其の室を亂さんと欲す。曰く夫子疾病、人を見ざるを欲せず。牛食を進めず。遂に餓て死す。子にして親を殺し、僕にして主を殺したるものなり。文は晉の文公重耳なり。父の獻公は毒婦の言を信じて重耳を殺さんと文公が居る所なる蒲城に寺人李披を送る、李披文公を斬らんとする時、文公牆を踰えんとす、身に及ばずして其の袪を斷る。『後漢書』の注に忌は怨なり。伯は伯楚を言ふ。調は告なり。賊は呂甥、冀丙等を謂ふ。寧は安寧なり。后は文公なり。初め晉の獻公、寺人勃鞞をし



て公を蒲城に伐たしむ、公垣を踰の、勃鞞其の袂を斬る、公、國に入るに及んで、呂物冀丙謀つて亂を作す、伯楚之を知り以て公に告ぐ、公、秦伯に王城に會し、呂邲を殺す、伯楚は勃鞞の字なり。是の注説眞ならん。綱齋曰く文公は獻公が死んだ時、垣を踰して逃げようとしたれば伯が追駈けて袖を切り落したと、綱齋が是の説は根據も無き妄説なり。『國語』にも『左傳』にも此の如き記事なし。通人闇於好惡、『後漢書』の注に曰く通人は穆子や文公等を謂ふ、初は豎牛を悦び、後以て餓死せしめ、始は勃鞞を怨み、終に能く賊を告ぐ。此の如き通人も好と惡との道に闇し、況や昏惑を愛寵する者豈能く分んや。剖は分なり、獻公の如きは其の妾に迷うて、其の子を殺さんとする昏惑の極に達せる癡漢と謂つ可きなり。嬴は秦の始皇の姓なり。適は適發なり、藏れたる物を強て引き出すを適發と言ふ。識は豫言なり、秦を亡す者は胡ならんとの豫言を信じて、遂に國民を塗炭の苦に墮し、以て萬里の長城を築く。外に備ふも、内に發して秦は遂に亡びたり。胡人は外なり、胡亥は内なり。書と諸と韻、噬と世と嘶と、庶と緒と武と處と所と主と、后と剖と韻なり。内は次章へ移る。

或輦賄而違車兮 孕行産而爲對 慎竈顯於言天兮 占水火而妄諄 梁叟患夫黎丘兮 丁厥子而劓刃 親所睇而弗識兮 矧幽冥之可信 毋繇攀以滓己兮 思百憂以自疚 彼天監之孔明兮 用棐忱而佑仁 湯蠲體以禱祈兮 蒙龐視以拯人 景三慮以營國兮 熒惑次於他辰 魏穎亮以從理兮 鬼亢回以敵秦 咎繇邁而種德兮 樹德茂乎英六 桑末寄夫根生兮 卉旣彫而已毓 有無言而不讎兮 又何往而不復 蓋遠迹以飛聲兮 孰謂時之可蓄 或は賄を輦にして車を違とも、孕行ゆく産して對を爲す、慎竈天を言ふに顯なれど、水火を占うて妄に諄ぐ、梁

叟は夫の黎丘を患ふ、厥の子に丁て刃を劓り、親く睇る所にして而かも識ず、矧や幽冥の信す可けんや、繇攀として以て己を滓こと母れ、百憂を思つて以て自ら疚む、彼の天監の孔だ明かなる、用て忱を棐て仁を佑く、湯體を蠲して以て禱祈す、龐視を蒙りて以て人を拯へり、景三慮以て國を營む、熒惑他の辰に次る、魏穎亮を以て理に従ふ、鬼回亢て以て秦を敵る、咎繇邁で徳を種う、徳を樹て英六に茂れり、桑末夫の根生を寄す、卉旣彫で己に毓はる、言ふとして驪いざる無きあり、又何ぞ往て復らざらん、蓋そ迹を遠くして以て聲を飛さざる、孰か時の蓄る可しと謂ふ。

【句解】輦賄 行産爲對 輦は運なり、賄は財なり。昔夫婦夜田する者あり、天帝見て之を矜む。司命に問うて曰く此れ富むべきや。司命曰く命は當に貧なり、張車氏の財あり、以て借て之に與ふ可し。期して曰ふ車子生れば急に之を選せ。田者稍富む。期に及んで夫婦其の賄を輦で以て逃る。宿を同じうして婦人あり夜子を生む、名を其の父に問ふ。父曰く車間に生る、故に車子と名くと。其の家此れより後、遂に大に貧敵すと。慎竈顯於言天 占水火妄諄 諄は諄告なり。『左傳』に曰く日食あり。梓慎が曰く將に水あらんとす。叔孫昭子曰く早なり。後果して大に早なり。『左傳』に曰く宋、衛、陳、鄭、將に火あらんとす。鄭の大夫裨竈、璫聲玉環を請うて火を讓んと欲す、子産予へず。竈が曰く吾が言を用ひずんば鄭又將に火あらんとす。子産曰く天道は遠く、人道は邇し、爾が及ぶ所にあらず。遂に與へず。亦復火あらざるなり。共に其の言ふ所、誤れるを言ふなり。梁叟は梁國の老人。患夫黎丘 丁厥子而劓刃 親所睇弗識 矧幽冥可信 『呂氏春秋』曰く梁北に黎丘郷あり、郷に丈人あり、市に往て酔うて歸る。黎丘の奇鬼、其の子の狀に效うて、道にして之を苦む、丈人醒め



て其の子に謂て曰く、吾は而が爲に父たり、我醉ふ女道にして我を苦しむるは何が故ぞ。其の子泣て曰く必ず奇鬼なり。丈人明日市にて醉ふ、其の眞子之を迎ふ、丈人劍を抜て之を刺す。以上の四句之を言ふ。丁は當なり。刺は刺と同じ、隙は隙視なり。毋は無と同じ。縣は牽制と同じ、縣は縣互、攀は拘攀、手足曲り自由ならず、而かも永續的にツナグなり。津己 津は引なり、俗の爲め牽制せられ、百憂を己に引て以て自ら疚むなり。疚の字は本義熱病を言ふ、疹と同義に用ふることあり。疹は元來皮膚病なり。天監孔明は天帝が監視して甚だ明かなるを言ふ。用葉忱佑仁 用は以てなり、葉は葉輔、「タスク」なり。忱は忱誠、「マコト」なり。佑は佑助「タスク」なり。天は人を視ること孔明にして、誠信なる者を輔け、仁徳ある者を助くとなり。「尙書」に本くなり。湯は殷の湯王、錮は潔、體は身體、厖は大、禡は福、拯は救なり。湯の時大旱七年、殷史卜して曰く當に人を以て禱るべし。湯が曰く必ず人を以て禱らば、吾請ふ自ら當るべし。遂に齋戒、髪を剪り、爪を斷り、己を以て牲と爲し、桑林の社に禱る、果して大に雨あり。景は宋の景公。三慮は三善言を謂ふ。景公病あり。司馬子韋曰く、熒惑即ち火星、心を守る、宋の分野なり、君當に之を祭り相に移すべし。公曰く相は股肱なり、心腹の疾を除き、而して之を股肱に實て可ならんや。曰く民に移すべし。公曰く民は國を爲す所以、民無くんば何を以て君たらん。曰く歳に移すべし。公曰く歳は人を養ふ所以、歳登らずんば、何を以て人を畜はんや。子韋曰く君が善言三つ、熒惑必ず三舍を退かん。魏顆は魏武子の子なり。亮は信なり、魏武子嬖妾あり、平常に曰く我が死後は他に嫁せしめよ。死に臨んで曰く殺して以て我に殉せしめよ。武子死するに及んで之を嫁せしむ。曰く病で言ふは則ち亂なり、吾は其の治に従ふと。從理は殺すべからざる道理に従ふとなり。鬼は幽鬼、

今嫁せしめたる所の妾の亡父を言ふ。魏顆は晉人なり、秦の師を輔氏(地名)に敗り、杜回を捕虜とす。回は秦の勇將なり、捕虜と爲るべきものにあらず。輔氏の役、一人の老人あり、草を結んで以て杜回到に亢す。回躍て顧る、以て之を捕虜と爲すことを得。是の夜顆夢む、余は而が嫁せしめし婦の父なり。爾先人の治命を用ふ、余是を以て報ゆるなり。敝秦は破秦と同じ、咎繇は皐陶氏なり。邁は進行なり。英六は地名、咎繇氏は一代徳を人間に布きたるに因て、其の子孫は英六に封ぜられて、長く茂盛すとなり。桑末寄夫根生 弁既彫而已毓 寄生は一名寄屑、一名寓木、一名宛董、他の樹木に寄りて己が生を托するもの、今桑に寄生するもの、百草皆寒に至りて彫落す、唯寄生のみ桑の末に榮ゆ。咎繇が英六に封ぜられ、餘國先づ滅び、英六獨り存するを謂ふ、毓は育と同じ。有無言而不離 無言不離は「詩經」の語。何往而不復 「易」に曰く無往不復と。咎繇が徳を布き、仁を行ひ、慶が後裔に流るるを言ふ。蓋は何不の二字を一字としたるもの、故に「ナンゾセザル」と和讀するなり。遠迹以飛聲 孰謂時之可蓄 何ぞ早く遠遊して以て其の聲名を揚げざるや、光陰は過ぎ易し、何ぞ人を待んや、蓄は猶待と言ふがごとし。天命が來るほどに待てなりと注したる本あり誤なり。前句の内と對と諍と聯と韻、信と疚と仁と人と辰と秦と韻、六と毓と復と蓄と韻なり。

仰矯首以遙望兮 魂儻惘而無疇 偪區中之隘陋兮 將北度而宣游 行積冰之磴磴兮 清泉沍而不流 寒風淒而永至兮 拂穹岫之騷騷 玄武縮於殿中兮 騰蛇蜿而自糾 魚矜鱗而并凌兮 鳥登木而失條 坐太陰之屏室兮 慨含秋而增愁 怨高陽之相寓兮 倬顛頊而宅幽 庸織路於四裔兮 斯與彼其



何寥 望寒門之絕垠兮 縱余縹乎不周 迅飈瀟其騰我兮 驚翩飄而不禁  
越谿壑之洞穴兮 漂通淵之琳琳 經重陰乎寂寞兮 愍墳羊之潛深 追慌忽  
於地底兮 軼無形而上浮 出石蜜之閭野兮 不識蹊之所由 速燭龍令執炬  
兮 過鍾山而中休 瞰瑤谿之赤岸兮 弔祖江之見劉 聘王母於銀臺兮 羞  
玉芝以療饑 戴勝愁其既歡兮 又謂余之行遲 載太華之玉女兮 召洛浦之  
宓妃 咸姣麗以盡媚兮 增嫫眼而娥眉 矜妙婧之纖腰兮 揚雜錯之桂徽  
離朱脣而微笑兮 顏的瀝以遺光 獻環珉與瑱綺兮 申厥好以玄黃 雖色艷  
而賂美兮 志浩蕩而不嘉 雙林悲於不納兮 竝詠詩而清歌 歌曰 天地煙  
燼百卉含蘄 鳴鶴交頸雉鳩相和 處子懷春精魂回移 如何淑明忘我實多  
將答賦而不暇兮 爰整駕而亟行

仰で首を矯て以て遙に望む、魂憫憫として躊躇無し、區中の隘陋なるを憫とし、將に北に度て宣游せんとす、積氷の磴礧たるを行く、清泉汨て流れず、寒風淒として永く至る、穹岫の騷騒たるを拂ふ、玄武殿中に縮り、騰蛇蜿蜒を望んで、余が縹を不周に縱す、迅飈瀟として其れ我を騰る、驚て翩飄として禁せず、谿壑の洞穴を越え、通淵の琳琳たるに漂ふ、重陰を経て寂寞たり、墳羊の深きに潛るるを愍む、慌忽を地底に追ひ、無形を軼て上り浮ぶ、石蜜の閭野を出で、蹊の由る所を識らず、燭龍を速て炬を執らしめ、鍾山に過ぎて中休す、瑤谿の赤岸を瞰、

祖江の劉たるを弔ふ、王母を銀臺に聘し、玉芝を羞めて以て饑を療す、戴勝愁として其れ既に歡ぶ、又余が行の遲きを諒る、太華の玉女を載せて、洛浦の宓妃を召す、咸姣麗にして以て盡媚し、增嫫眼にして娥眉なり、妙婧の纖腰を矜べ、雜錯の桂徽を揚げ、朱脣を離て微笑し、顏的瀝として以て光を遺す、環珉と瑱綺とを獻じ、厥の好を申るに玄黃を以てす、色艷にして賂美なりと雖も、志浩蕩として嘉せず、雙林納ざるを悲しむ、竝に詩を詠じて清歌す、歌に曰く天地煙燼として百卉蘄を含めり、鳴鶴頸を交へ雉鳩相和す、處子春を懷うて精魂回移る、如何ぞ淑明にして我を忘るる實に多き、將に賦に答んとして暇あらず、爰に駕を整へて亟に行かん。

【句解】 憫憫は精神を失ふ貌、驚きて精神を失ふなり。偪は音「ヒョク」訓「セマル」逼るなり。區中に仕切てある中、溢陋は「セマク」「キタナシ」なり。是の故に廣渺たる北極の方へ度りて宣游せんとす。宣は遍なり。磴礧は積氷の白き貌、皚皚と同じ、汨は凍なり、清泉が汨凍して流れざるなり。穹岫は山の岩穴なり。騷騒は未詳、或は曰ふ「マムキ」なりと。玄武は龜蛇を言ふ。北方の神なりとの傳説。殼は龜の甲を言ふ。騰蛇は蛇の屈の貌。糾は纏結なり、共に北方の寒甚しきを言ふなり。矜は疎なり、魚が寒に耐へず鱗を疎かして凌に并即ち聚るなり。失條 鳥も樹木に葉が無きゆゑなり。屏室は隠れた室、太陰は北方の極、高陽は顛頂を言ふ。「山海經」に東北海外、附禺の山、帝顛頂九嬪とを葬ると。相は視なり、怨は北方に葬られしを怨むなり。偪は音「キウ」訓「チヒサシ」小なり、又「サムシ」寒、「カガマル」屈の訓もあり、北方の幽處に靈宅するを惜む意なり。庸は勞なり。織絡は機を織るが本義、今以て南北往來するに喩ふ。四裔は四方なり。斯地と彼地とを往來するは、我ながら其れ庸れぬとなり。寒門は北極の山。不周は西北方に在る山の名。縹は緹と同じ、馬の靦な



り。要するに余が馬を暫く不周の山に繋ぎて以て休憩せんとなり。迅魃は疾風なり。瀟は疾き貌。騰は送なり、疾風が余を吹き送るなり。鶩は鶩馳なり、風が疾く馳せるを言ふ。谿囁は洞穴の口がアイて深き貌、礧礧も亦深幽なる貌。重陰は地中を言ふ。『國語』に曰く魯の季桓子井を穿ちて土缶を獲たり、中に蟲あり羊の如し。仲尼に問はしむ。仲尼が曰く土の怪を墳羊と曰ふ。恍惚は無形の貌、覺束なきこと。地底は追逐して居ると思ふ。たら、嬰に又地上に浮み出づとなり。右は西方を言ふ。密は山の名、西北を密山と曰ふ、黄帝が密山の玉策を取て之を鍾山の陰に投すと。闇は幽隱なり。蹊は蹊路なり。燭龍は炬火を持って歩く龍、即ち北山の神、人面蛇身赤眼なり。曠は上より下を觀るなり。瑤谿は瑤岸なり、鍾山の東を瑤岸と曰ふ。祖江は欽瑛の爲め崑崙の陽に殺さる。劉は殺なり。王母は西王母、銀臺は仙人の住處、羞は羞羞、玉芝を王母に進めるなり。戴勝は頭に天冠を戴なり。戴く者は即ち王母なり。愁は發語の音、或は言ふ笑ふ貌、鳴の別體文字と、何故に此の處へ爾の來る遅きやと王母の爲め諄られたりとなり。載は招の意味に見よ。太華山の玉女を載くなり。洛浦の水神宓妃をも并せて召致するなり。姣麗は好麗と同じ。蠱媚は人を十分に「タラス」こと。燿眼は美目を言ふ。婧は妍婧なり。桂は婦人の上服なり。徽は「爾雅」に曰く婦人の繖之を襜と曰ふ。襜は衣帶なり。的漉は顔色の好く輝くこと。環現は玉佩、圓輪の玉なり。綈は襦と同じ衣帶なり、此の如く天下の寶賂を贈らるると雖も、我が志は何ぞ色艶にあらん、何ぞ寶賂にあらん。志は浩蕩即ち廣大のもの存するあり、豈一婦人、豈一財寶にあらんや。雙林は玉女と宓妃となり。悲於不納、折角贈りし寶賂を我が嘉納せざるを以て雙林即ち二女は別に詩を爲りて以て其の志を詠するなり。煙熅は天地の氣なり。請は音「キ訓」ハナブサ「華英なり。交頸は鶴が雌雄

雙び樂しむ。相和は雌雄互に遊ぶ。處子は即ち處女なり。懷春は男子を慕ふなり。今は玉女と宓妃の二女を言ふ。淑明は二女より衡を指して言ふ。貴耶は立派な人でありながらと言ふの意。忘我實多、婦人の怨言、古今と無く同一なり。是に於てか、衡は此の二女の歌賦に對し解答せんと欲するも其の暇無きなり。何ぞや整駕して亟行せざるべからざればなり。嘯と游と流と驪と糾と條と愁と幽と瘳と周と韻、禁と礧と深と韻、浮と由と休と劉と韻、饑と遲と妃と眉と徽と韻、光と黃と韻、嘉と歌と韻、曉と和と移と韻、多と行と韻なり。瞻崑崙之巍巍兮、臨滎河之洋洋、伏靈龜以負坻兮、互螭龍之飛梁、登闔風之會城兮、構不死而爲牀、屑瑤漿以爲糝兮、斟白水以爲漿、揮巫咸以占夢兮、迺貞吉之元符、滋令德於正中兮、合嘉禾以爲敷、既垂穎而顧本兮、爾要思乎故居、安和靜而隨時兮、姑純懿之所廬、戒庶寮以夙會兮、僉恭職而竝迓、豐隆軼其震霆兮、列缺燁其照夜、雲師讎以交集兮、凍雨沛其灑塗、轡珮輿而樹葩兮、擾應龍以服輅、百神森其備從兮、屯騎羅而星布、振余袂而就車兮、修劍揭以低昂、冠岳岳其映蓋兮、佩綸纒以輝煌、僕夫儼其正策兮、八乘攄而超驥、氛旄浴以天旋兮、蜺旌飄而飛揚、撫幹軼而還晚兮、心灼藥其如湯、羨上都之赫戲兮、何迷故而不忘、左青瑀以捷芝兮、右素威以司鉦、前長離使拂羽兮、委水衡乎玄冥、屬箕伯以函風兮、激洪澗而爲清、曳雲旗之離離兮、鳴玉鸞之譽譽、涉清霄而升遐兮、浮蔑蒙而上征、紛翼翼以徐戾兮、焱回回其揚靈、叫帝閭使闢扉兮、覲天皇于瓊宮、聆廣樂之九奏兮



展洩洩以彤彤 考理亂於律鈞兮 意建始而思終 惟盤逸之無數兮 懼樂往而哀來 素女撫弦而餘音兮 大容吟曰念哉

崑崙の巍巍たるを瞻み、紫河の洋洋たるに臨む、靈龜を伏せて以て坻を負はしむ、蛟龍の飛梁を互す、閭風の會城に登りて、不死を構へて牀と爲せり、瑤臺を屑にして以て糞と爲し、白水を劑で以て漿と爲し、巫咸を揮して以て夢を占はしむ、迺ち貞吉の元符なる、令徳を正中に滋くして、嘉禾を合して以て敷を爲す、既に穎を垂れて本を顧る、爾思を故居に要す、和靜に安じて時に隨ふ、姑く純懿の廬る所なり、庶寮に戒むるに夙會せんことを以てす、僉職を恭しくして竝び遊ふ、豐隆軒として其れ震霆、列缺燿として其れ夜を照す、雲師韞として以て交集す、凍雨沛として其れ塗に灑ぐ、瑊輿を轆て葩を樹て、應龍を擡けて以て輅に服け、百神森として其れ備に從ふ、屯騎羅つて星ごとくに布く、余が袂を振て車に就く、修劍掲として以て低昂す、冠岳岳として其れ蓋を映す、佩琳羅として以て輝煌たり、僕夫儼で其れ策を正す、八乘據て超驤す、氛旄浴て以て天のごとく旋る、蜺旌飄て飛揚す、輪輶を撫て還睨す、心灼藥として其れ湯の如し、上都の赫戲たるを羨ふ、何ぞ故に迷うて忘れざる、青瑠を左にして以て芝を捷つ、素威を右にして以て鉦を司しむ、長離を前にし羽を拂はしむ、水衡を玄冥に委ぬ、箕伯に屬して以て風を函しむ、洪澗を激めて清と爲す、雲旗の離離たるを曳て、玉鸞の習習たるを鳴らす、清霄を涉て升遐す、蔓蒙に浮て上征す、紛として翼翼以て徐に戻る、焱として回回と其れ靈を揚ぐ、帝閭を叫て扉を闢しむ、天皇に瓊宮に觀ゆ、廣樂の九奏を聆き、展に洩洩として以て彤彤たり、理亂を律鈞に考へ、意ふ始に建て終を思ふ、惟れ盤逸の敷こと無き、樂往て哀來らんことを懼る、素女弦を撫して餘音あり、大容吟じて曰く念へよ。

【句解】 紫河は河の名詞にはあらず、紫は「メグル」曲なり。「山海經」に河は崑崙の西北隅より出づと。然れども洋洋の字面より見て、之を黄河とするも可なり。坻は小渚を言ふ。靈龜の橋を駕し、蛟龍の飛梁と爲す、何ぞ曾て實事、文學上美麗として用ふる字面なり。又靈活として用ふる字面のみ。閭風は山の名、崑崙山上に在る山。會城 九重高さ萬一千里、上に不死樹あり、乃ち其の不死樹を以て牀と爲すとすなり。瑤は瓊、瓊樹の榮を屑うて以て糞即ち糧と爲す。而して飲んで劑むものは白水、凡人の飲む能はざる仙漿なり。揮は使なり。巫咸は占者、占者をして上の如きことの夢想を占はしめたるに、迺ち貞吉の元符なりと。符は「シルシ」なり。滋は滋茂、令徳を正中に滋茂しむるなり。合嘉禾を坊間本に合嘉秀に作る。「後漢書」の注に禾嘉は穀なり、二月に至りて生じ、八月に至りて熟す、時の中を得る故に之を禾と謂ふ。山の如く積む、敷と爲す所以。既垂穎顧本 穎は稷なり、本は禾の本を謂ふ、禾既に稷を垂れて本を顧る、人も亦故居を思はざるを得んや。「淮南子」に曰ふ孔子禾の三變、粟に始り、苗に生じ、稷に成るを見て乃ち歎じて曰く我其れ首禾か。高誘曰く禾稷根に向ふ、君子本を忘れざるなり。和靜は君子の人格なり。隨時は君子の自然なり。姑は且なり。純懿は純粹美懿、廬は猶ほ居のごとし。庶寮は多勢の役人、夙會は早く出會せよとなり。僉は皆と同じ、迺は迎と同じ。豐隆は雷なり。軒は雷の轟聲。震霆 霹靂は電を言ふ、燿は電光を言ふ。韞は雲の漸漸と黒陰なる貌。凍雨は暴雨、沛は沛然、雨の貌。輶は「爾雅」に載轡之を輶と謂ふ。郭璞曰く輶は輓上の環なり、轡貫ぬく所なりと。瑊輿は玉飾の車、乃ち以て輶を「ヨソホフ」と訓する所以。樹葩は華葩を車上に樹るなり。應龍は翼ある龍の圖。輅は「オホグルマ」大車なり。森は森列。騎羅星布は森列する百神の美美として衆羣なるを言ふ。修劍は長劍。掲



は劍が車の上下する毎に低昂する形容。崑崙は一に岌岌、一に罍罍に作る、意義大差無し。冠弁が高くして車蓋と相映するなり。緗纈は佩の輝煌する形容、盛美なるを言ふ。策は策鞭なり。八乘は八龍、八龍とは八頭の馬なり。據は猶ほ騰と同じ。超驪は八龍の跳ね踊る勢の形容。氛は天地の好氣、旄は羽の旌、浴は廣大を形容する字、天地を以て自然の旌と爲す。天に旋る所以。蜺も亦我に對する自然の旌なり。軛は車轄にて、軛は車軸の小穿なり、「カリモ」と訓す。車上に在て車轄を撫するは天魔鬼神も能くするを得ず。是を以て先輩は曰く車中にて倚り懸る板なりと。先輩の説是とすべし。還腕は故郷の方をフリ回り視るなり。灼樂は湯の沸騰する形容、以て我が情の熱動するに喩ふ。羨は羨翼、上都は天上を謂ふ。赫戲は天上の盛なるを言ふ。既に四方を歴遊して、方に天上に遊ばんと欲す。是の故に故郷を念ふの情に迷ふも、天上の事は不忘となり。青瑠は青文の龍、素威は虎、青龍と白虎となり。芝は芝蓋、鉦は鉦鑠なり。長離は鳳凰、水衡は水官、玄冥は水神、四方の神類を前後左右に隨從せしむるなり。箕伯は風師。澳忍は垢濁ニゴリたる水なり。風師に依屬して其の水を清しむ。離離は雲旗の飛揚する形容。鸞鸞は玉鸞の和聲を言ふ。霄は霄雲、葦蒙は氣なり。升遐も上征も同じく登天の意。翼翼は飛揚する形容。戻は至と同じ。回回は光ある形容。アチラコチラへ回り行くにはあらず。揚靈は光靈を揚ぐるなり。天帝の門は帝闈なり。天帝の宮は瓊宮なり。聆は聽と同じ。廣樂は鈞天の樂、又九奏の樂と言ふ。天帝の聞て以て樂所の樂なり。洩洩と形形は其の樂聲の或は「ユルク」或は「ノドカ」なるを言ふ。天帝は樂に依て、世上の理亂を考ふと云ふ。太平の音は安、亂世の音は怨、安は樂を知る可し、怨は怒を知る可し。六律と六鈞、以て其の始終を建思するなり。然らば則ち我が本即ち人たるの道を忘れて、遠く末の

天の道へ向はんと欲したるは、其の始終を一貫する道にあらすと一轉化したるなり。盤逸は盤樂縱逸なり。歌は厭なり、若し逸遊して人道に歸らざるときは、一旦樂も、又悲哀の來るあらんとなり。素は素女、素女は五十弦を撫す。其餘音あり。大容 即ち黃帝の樂師は吟じて曰く逸遊の戒しむ可きを念へよ、逸遊の戒しむ可きを念へよ。洋と梁と牀と漿と韻、符と敷と居と盧と韻、迓と夜と塗と輅と布と韻、昂と煌と曠と揚と湯と忘と凝と冥と清と響と征と靈と韻、宮と彤と終と韻、來と哉と韻なり。

既防溢而靜志兮 迨我暇以翺翔 出紫宮之肅肅兮 集太微之閭闔 命王良 掌策駟兮 踰高閣之鏘鏘 建罔車之幕幕兮 獵青林之芒芒 彎威弧之撥刺 兮 射幡冢之封狼 觀壁壘於北落兮 伐河鼓之磅礪 乘天潢之汎汎兮 浮雲漢之湯湯 倚招搖攝提以低回 劉流兮 察二紀五緯之綢繆 遙皇 偃蹇天矯 嬾以連卷兮 雜沓叢嶺颯以方曠 饒汨颯辰沛以罔象兮 爛漫麗靡藐以迭盪 凌驚雷之硃礪兮 弄狂電之淫裔 踰龍瀕於宕冥兮 貫倒景而高厲 廊盪盪其無涯兮 乃今窮乎天外 據開陽而頰盼兮 臨舊鄉之暗藹 悲離居之勞心兮 情悵悵而思歸 魂眷眷而屢顧兮 馬倚輶而徘徊 雖遨遊以媮樂兮 豈愁慕之可懷 出閭闔兮降天塗 乘鸞忽兮馳虛無 雲霏霏兮繞余輪 風眇眇兮震余旗 續聯翩兮紛暗曖 倏眩眩兮反常閭 收疇昔之逸豫兮 卷淫放之遐心 修初服之娑娑兮 長余珮之參參

既に隘を防て志を靜にす、我が暇に迨て以て翺翔す、紫宮の肅肅たるを出で、太微の閭闔たるに集る、王良に



命策駟を掌としむ、高閣の將將たるを踰え、罔車の幕幕たるを建て、青林の芒芒たるを獵る、威弧の撥刺たるを彎て、罽冢の封狼を射る、壁壘を北落に觀、河鼓の磅礴たるを伐つ、天潢の汎汎たるに乗て、雲漢の湯湯たるに浮ぶ、招搖の攝提に倚り以て低回劉流す、一紀五緯の綱繆と適皇とを察にし、偃蹇天矯と媯と以て連卷たり、雜沓叢穎颯として以て方曠す、穢汨颯戾沛として以て罔象たり、爛漫麗靡として藐として以て迷邊たり、驚雷の硤礧たるに凌て、狂電の淫裔を弄す、廊頤を岩冥に踰え、倒景を貫いて高く厲る、廓と盪盪と其れ涯無し、乃ち今天外を窮め、開陽に據りて瀕て盼る、舊鄉の暗謫たるに臨む、離居の心を勞するを悲む、情悁悁として歸を思ふ、魂眷眷として屢ば顧る、馬軻に倚て徘徊す、遨遊して以て愉樂すと雖も、豈愁慕の懐ふ可きならんや、閭闔を出て天塗より降る、魑忽に乗り虚無に馳す、雲罪罪として余が輪を繞る、風眇眇として余が腋を震ふ、續と聯翩として紛と暗暖たり、倏として眩眩として常閭に反る、疇昔の逸豫を收め、淫放の遐心を巻く、初服の娑娑たるを修め、余が珮の參參たるを長うす。

【句解】 防溢は十分に満足するを防ぐなり。翺翔は將に遠く逝んとするなり。紫宮も太微も星宮の名。肅肅は清、閭闔は明大なり。王良も星の名。高閣は閣道星なり。將將は高き貌。罔車も星、即ち畢星なり。幕幕は罔の貌。青林は天苑。芒芒は廣大の貌。弧は星の名。撥刺は弓のはね反りしこと、星を以て弓と爲す。罽冢は山の名。封は大、狼は狼星、壁壘は東壁の壘、羽林天軍西を壁壘と爲す、旁の大星を北落と爲す。牽牛の北を河鼓と爲す。磅礴はバリバリする聲なり。天潢は天漢即ち雲漢なり、天河なり。招搖攝提は星の名。低回は「グルグルメグル」ことなり。劉は剝削「ケヅル」なり。今は回轉の貌と稱す。一紀は日月、五緯は五星、綱繆は相

次の貌。適皇は行く貌。偃蹇も天矯も、自恣の貌と注して、ウチ寛ぎたるなり。媯は産媯と成語して兔の子を曰ふ。今以て兔の子が媯が如く連卷たるとなり。雜沓は重る上に重るなり。叢穎は集合なり。颯は方曠。即ち「ハネアガル」所の勢を形容して言ふ。穢は「アヤカザリ」文章が本義なり。轉じて物の茂盛なるに用ふ。今の穢汨は其の盛なるを曰ふ。颯戾と沛は其の疾を曰ふ。罔象は有無の明白ならず、ボンヤリしたるを曰ふ。爛漫を爛漫に作るは俗本なり。爛漫の字義は頗る廣し、美麗のこと、衆多のこと、物の酣なること皆用ふ。下に麗靡とあれば、美麗の義を取るべし。迷邊は迷は奥迭が本義、邊は「スグル」過、「タフル」倒が本義。今以て其の疾くして急遽なるを言ふならん。先輩曰く物を踏みはだかること。是の說是非を知らず。只種類の星が其の光を争ふを形容するなり。礧は雷聲、轟轟と同じ。狂電は疾電なり。淫裔は電の貌と、尙ほ研究を要す。廊頤は「孝經援神契」に天度濛濛の語ありて廊頤の語はあらず、注に濛濛は未分の象なりと。乃ち知る漠然として廣きを曰ふを。岩冥は過岩冥幽、是れ亦際限無く冥きを曰ふ。倒景は日影が倒れて見える。高厲は高く陵厲するなり。窮を一本窺に作る。天外を窮めるなり。開陽は北斗の第六星を言ふ。悁悁は心憂なり。眷眷は思慕なり。輶は車輶なり。閭闔は天上の門、天上の娛樂も言ふに足らず、再び人間へ歸るなり。乘魑忽は疾風に乘じてなり。馳虚無 空中の虚無を奔馳して天塗より降る。輪は車輪、旒は旒旗なり。暗暖は虚無を馳するが故に明白ならざるなり。眩眩は疾き貌。反は返と同じ。疇昔は今より前の意味、十年も前の事、昨日の事、去年の事、共に通用する文字なり。逸豫も淫放も共に疇昔の一夢なり、今日は其の非を改悔すとなり。娑娑は衣の貌。參は長き貌。初服は極めて清潔なりしなり。天や仙や女を求むる不了簡より、遂に汚濁するに至る。而かも今



日は其の非を改め、之を昔の清繁なるに修治し、正道の正に還らんとす。翔と閔と將と世と狼と硯と湯と皇と驥と韻、遷と裔と厲と韻、外と藹と歸と徊と懷と韻、無と嶺と閭と韻、心と夢と韻なり。

文章煥以繁爛兮 美紛紜以從風 御六藝之珍駕兮 遊道德之平林 結典籍而爲密兮 歐儒墨而爲禽 玩陰陽之變化兮 詠雅頌之徽音 嘉曾氏之歸畊兮 慕歷陵之欽峯 共夙夜而不貳兮 固終始之所服也 夕惕若厲以省讐兮 懼余身之未勅也 苟中情之端直兮 莫吾知而不惡 墨無爲以凝志兮 與仁義乎消搖 不出戶而知天下兮 何必歷遠以劬勞 系曰天長地久歲不留 俟河之清祇懷憂 願得遠度以自娛 上下無常窮六區 超踰騰躍絕世俗 飄飄神舉逞所欲 天不可階仙夫希 柏舟悄悄吝不飛 松喬高時孰能離 結精遠遊使心攜 回志竭來從玄謀 獲我所求夫何思

文章煥として以て繁爛たり、美紛紜として以て風に從ふ、六藝の珍駕に御して、道德の平林に遊ぶ、典籍を結んで密と爲し、儒墨を歐て禽と爲し、陰陽の變化を遊び、雅頌の徽音を詠す、曾氏の歸畊を嘉し、歷陵の欽峯たるを慕うて、夙夜を共に貳にせず、固に終始の服する所、夕に惕たること厲若く以て曾を省る、余が身の未だ勅はざるを懼る、苟に中情の端直ならば、吾を知る莫きも惡す、無爲に墨して以て志を凝し、仁義と與に消搖す、戸を出ずして天下を知る、何ぞ必ずしも遠きを歴て以て劬勞せん、系して曰く天長く地久しうして歲留まらず、河の清むを俟て祇に憂を懷り、願くは遠く度り以て自ら娛を得ん、上下常無く六區を窮めん、超踰騰躍して世俗を絶ち、飄飄として神のごとく舉り所欲を逞せん、天階るべからず仙夫希なり、柏舟悄悄として飛ばざらんことを吝む、松喬高く時り孰か能く離ん、精を結び遠く遊んで心を攜れしめん、志を回らし竭來して玄謀に従ふ、我が求むる所を獲て夫れ何をか思はん。

【句解】煥は煥然、繁爛は文章の光華なり。紛紜は繁爛と意義を同じうす。六藝を以て車と爲し、之に駕し、道德を以て林と爲し、之に遊ぶ。典籍は即ち諸子百家の書、吾は網なり、吾なれば結と曰ふ。儒墨、子思や孟子や孫卿は儒家なり。墨翟や胡非や尹佚等は墨家なり。歐は音「ク」撃なり「カル」驅なり。『後漢書』に歐に作るは誤る。陰陽變化は『易』を玩味するなり。雅頌徽音は『詩』を諷詠するなり。嘉は讚美するなり。曾氏歸畊『琴操』に曰く歸畊は曾子を作する所、曾子孔子に事ふること十餘年、晨に覺て眷然として念ふ、二親年衰へ、之を養ふこと備はらず。是に於て琴を鼓して曰く往て反らざる者は年なり、以て再事すべからざる者は親なり。歐歎して歸畊す。歷陵は歷山、欽峯は山の貌。舜が父の爲め畊作せし所。共は恭の古字なり。夙夜は『後漢書』に夙昔に作る。夜を以て義を成す、夙夜を共に貳心を抱かざるなり。終始すべきは君子の服する所。夕惕若厲以省讐、『易』に示す所、以て之を行ふ。勅は整なり、夙夜に惕れ省るも猶正整ならざるかと懼るるなり。端直は端正、誠直、莫吾知、天下に吾を知る者一人も無しと雖も、我に於て何の惡か之れ有らん。墨は黙爲を貴しとす。而して仁義と與に消搖す、仁義を無視せず。不出戶知天下、『道德經』の語なり、天下の正道は居ながら之を知る、何ぞ必ず遠方を歴遊して以て劬勞するに及ばんや。疇昔天上に星光を追ふの癡夢を是に於て自ら之を笑ふなり。系は繫なり、後の文句に繫るなり。天長地久は『老子』に出づ。俟河之清は『左傳』に出づ。

日ハ其ノ非ヲ改メ、之ヲ昔ノ清繁ナルニ修治シ、正道ノ正ニ還ラントス。翔ト閔ト將ト世ト狼ト硯ト湯ト皇ト驥ト韻、遷ト裔ト厲ト韻、外ト藹ト歸ト徊ト懷ト韻、無ト嶺ト閭ト韻、心ト夢ト韻ナリ。



百年河清を俟たんより、一日も早く憂を除くが宜しとなり。遠度の度は「ハカル」にあらず、渡の意ならん。窮六區 四方上下を六區と曰ふ。是れ唯希望なり。遠く度りて以て四方を窮めんと希望はあり。然る所以は世俗は紛紛として憂を生ずること多ければなり。然りと雖も天は階段の上る可き無し、仙たらんと欲するも亦能はず。仙夫の夫は人と同じ。柏舟は『毛詩』に出づ、流浪の末、憑る所無きに譬ふ。悄悄も『毛詩』に出づ、憂ふる貌なり。吝は惜なり。不飛は人間として雄飛する能はざるを憂ふるなり。松は赤松子、喬は王子喬、高躋は此の二仙人は高く躋り、如何ぞ凡人の之を追ふを得んや。離は『後漢書』の注に附なりとあり。「ハナル」と全く反對の意味。結精 仙人と爲るには精氣を凝結するが第一の要件なり。遠遊使心攝 『後漢書』の注に攝は離なりとあり。是れも全く反對の意味に用ふ、人間としての心を攝れしめて仙人となるも、遂には何の證かあらん。回志は素志に回すこと。竭來は古人種種に異説あり、然れども去來と解するを可とす。從玄謀 玄謀は深謀を曰ふ、深く謀るなり。深く謀り而して我が求むる所を獲ば其の外亦何をか思はんや。風と林と禽と音と峯と韻、服と勅と惡と韻、搖と勞と韻、留と憂と韻、娛と區と韻、俗と欲と韻、希と飛と離と攝と謀と思と韻なり。

先儒張衡を議して文人言ふに足らずと爲す。余謂ふ史に衡の人と爲りを傳へて曰く、威嚴を治め、法度を整へ、陰に政黨の姓名を知り、一時に收禽す。上下肅然、稱して政理と爲す。又孔子が易說象象殘缺を繼んと欲するも、竟に就る能はず。是に由て之を觀れば、聖道に於て全く其の志無しと言ふべからず。唯其れ其の志を遂ざるのみ。文人言ふに足らずと議するは、頗る酷に失するものなり。

悲憤詩第十六

悲憤詩は漢の中郎蔡邕が女瑛が作る所、瑛字は文姬、博學にして才辯あり、又音律に妙。適め河東の衛仲道に嫁す、夫亡ぶ子無し、家に歸寧す。興平中天下喪亂、文姬胡騎の獲る所と爲る、南匈奴左賢王に没せらる、胡に在る十二年、二子を生む。曹操 邕と善し、其の嗣無きを痛み、乃ち使者を遣り、金璧を以て之を購ふ。而して董祀に重嫁せしむ。祀屯田都尉と爲り法を犯す、當に死すべし。文姬曹操に詣で之を請ふ。時に公卿名士、及び遠方の使者、坐する者滿堂、操客に謂て曰く、蔡伯喈が女、外に在り、今諸君が爲めに之を見しめん。文姬進むに及んで、蓬首叩頭罪を請ふ。音辭清辯、旨甚だ酸哀、衆皆爲めに容を改む。操曰く誠實相矜む、然れども文狀已に去る、如何。文姬曰く明公廡馬萬匹、虎士林を成す、何ぞ疾足一騎、死に垂んとするの命を濟ふを惜むや。操其の言に感じ、乃ち祀罪を追原す。時且寒し、賜ふに巾襪を以てし、且問て曰く聞く夫人の家、先に墳籍多し、猶能く之を憶識するや不や。文姬曰く昔亡父書を賜ふ四千許卷、流離塗炭、存する者有る罔し。今誦憶する所裁かに四百餘篇のみ。操曰く今當に十吏をして夫人に就て之を寫さしめん。文姬曰く妾聞く男女の別、禮親授せず、乞ふ紙筆を給し玉へ、眞草は唯命。是に於て繕書之を送る、文遺誤無し。後亂離に感傷し、悲憤詩二章を作る。以上『後漢書』に傳ふる所なり。晁氏曰く文姬董祀に歸ぐ、瑛自ら節を失ふを傷んで其の二子を忘る能はず、爲めに此の辭を作る。晁氏が言ふ所の據は何れに在るやを知らず。然れども文意を案するに、子を思ふの情惻惻たるものあり。未だ必ずしも晁氏が想像の言とも思へざるなり。讀者宜しく批判すべし。



嗟薄祐兮遭世患 宗族殄兮門戶單 身執畧兮入西關 歷險阻兮之羌蠻 山谷眇兮路曼曼 眷東顧兮但悲嘆 冥當寢兮不能安 饑當食兮不能餐 常流涕兮皆不乾 薄志節兮念死難 雖苟活兮無形顏 惟彼方兮遠陽精 陰氣凝兮雪夏零 沙漠壅兮塵冥冥 有草木兮春不榮 人似禽兮食臭腥 言兜離兮狀竊停 歲聿暮兮時邁征 夜悠長兮禁門扃 不能寐兮起屏營 登朝殿兮臨廣庭 玄雲合兮翳月星 北風厲兮肅冷冷 胡笳動兮邊馬鳴 孤雁歸兮聲嚶嚶 樂人興兮彈琴箏 音相和兮悲且清 心吐思兮胸憤盈 欲舒氣兮恐彼驚 含哀咽兮涕沾頤 家既迎兮當歸寧 臨長路兮捐所生 兒呼母兮嗚失聲 我掩耳兮不忍聽 追持我兮走犛犛 頓復起兮毀顏形 還顧之兮破人情 心恒絕兮死復生

嗟薄祐なり世の患に遭ふ、宗族殄て門戸單なり、身執畧せられ西關に入る、險阻を歴て羌蠻に之く、山谷眇として路曼曼たり、眷として東顧し但悲歎す、冥當に寢ぬべきも安する能はず、饑て當に食ふべきも餐する能はず、常に涕を流して皆乾かず、志節を薄うして死難を念ふ、苟も活と雖も形顏無し、惟彼の方陽精に遠かる、陰氣凝て雪夏零つ、沙漠壅て塵冥冥たり、草木あれども春榮ず、人は禽に似て臭腥を食ふ、言兜離にして狀竊停なり、歲聿に暮ぬ時邁征す、夜悠長にして禁門扃す、寐る能はず起て屏營す、朝殿に登りて廣庭に臨む、玄雲合して月星を翳す、北風厲にして肅として冷冷たり、胡笳動て邊馬鳴く、孤雁歸て聲嚶嚶たり、樂人興て琴箏を彈す、音相和して悲て且清し、心思を吐て胸憤盈たり、氣を舒んと欲すれども彼を驚かすを恐る、哀咽を含んで涕頤を沾

す、家既に迎て當に歸寧すべし、長路に臨んで所生を捐つ、兒母を呼で嗚で聲を失す、我耳を掩て聽に忍びず、追て我を持し走て犛犛たり、頓て復起顏形を毀ふ、還り顧て人情を破る、心恒絶して死して復生く。

【句解】薄祐は不幸、不運と言ふがごとし。殄は殄絶、盡るなり滅ぶなり。門戸は即ち宗族、單は單身、自分一人となる。執畧は胡騎の爲め掠められたるを言ふ。西關は西域の關門。眇は杳眇に見える貌。曼曼は其の遠きを言ふ。眷は眷顧、又眷戀。東顧、故郷の都門を言ふ。乃ち寢ると雖安眠する能はず、空腹を感じて食物を求むるも又餐する能はず。薄志節念死難、志節を厚うするときは我が躬は當に死すべきなり。然るに妾は志節薄うして、煩悶を懷きながら猶死に赴かず。死すべき道理を知て猶生を貪るは、良に胼甲斐なき者と自ら思念するなり。而かも煩悶を繼續して僅に生を持つのみなるが故に形顏は殆んど憔悴せりとなり。遠陽精、南匈奴の地たる、陰氣充滿して、都門の如く陽氣ならず。沙漠、千里の沙原、紅塵は冥冥。草木は枝葉を生ぜず、春色果して何處の邊にあるや。人は禽鳥と何ぞ擇ばん、獸を屠り以て之を食ふ。其の言語は兜離即ち「イブル」なり、兜搭と同じ。竊停の語は頗る奇なり、先輩曰く竊は窪いこと、停は一處に集體、貌の「ノツシリ」とせぬ推し屈んだ體なり。其の典據を知らざるが、『詩經』に窈窕淑女の語あり、漢の王肅曰く善心を窈と曰ひ、善容を窕と曰ふ。明の楊用脩が曰く王説は誤に似たり、淵明の「歸去來辭」に窈窕以て壑を尋ね、孫興公が「天台山賦」に幽邃窈窕と、晉の曹據が詩に窈窕として山道深しと、晉の謝靈運が詩に窈窕として天人を究むと、唐の李頤が詩に窈窕として鸞崎を尋ねと、唐の杜牧が詩に煙生じて窈窕東第に深しと、皆地と居處とを言ふ。豈女徳の謂ひならんや。今案するに窈窕の字たる、一義のみならず、善心善容も通じ、又山谷の深邃にも通ずる



なり。關雎の義に據れば必ず王肅が言の如くならざるべからず。又以上擧ぐる所の詩に依れば山谷の深遠ならざるべからず。王肅を誤と言ふ楊用脩は學に博からざるが故なり。『爾雅』に窈窕は閑なりと。『注』曰く閑は閑隙なりと。是れ亦一義とす。『孔叢子』に宰予目に目の麗靡窈窕の淫を觀る、吾が夫子之を過ぎ之を視ず、之を過ぎ之を聽かず。揚子が『方言』に或曰く女に色あり、書亦色あるか。曰く女に華丹の窈窕を亂すを惡むあり、書は淫亂の法度を屈するを惡む。即ち善容善淑を言ふものならずや。之に反し輕窕の語は肆なりと注す、輕浮の淫婦を指すこと知るべし。乃ち知る窈窕は窈窕と同じく、但是れ狀貌の異なるを言ふならん。停は「テイ」又は「チャウ」と音讀する場合あり。窕の仄字を停の平字と改めたるのみ、先輩の解の如く一字は一字としての義を説くは今取らず。禁門 匈奴と雖も王は王たり、是を以て禁門と曰ふ。屏營は彷徨と意義同じ、寢る能はざるを以て何の目的も無く彷徨するなり。玄雲は黒雲なり。雲は月星を隱翳し、夜は爲めに暗し、之に北風は吹厲なり。肅氣の冷冷たらざるは無し。而して胡人笳を吹く、其の聲悲壯。邊馬鳴嘶す、其の聲哀淒。而して天外を望めば、孤雁歸る。其の聲は嚶嚶。獨り此の孤雁の歸るを羨まざるを得んや。朝旦に到れば樂人興きて琴箏を彈す。是の琴箏は元來中國の鳴器、胡笳とは異なる。之を聞けば愈よ懷郷の念切なり。而して其の和調は悲清なり。心胷 共に痛み、五體破裂の思ひあり、乃ち以て舒氣 嘆息を漏す爲め大聲を發せんと欲するも亦彼 即ち小兒を驚かさんことを恐る。是を以て咽び泣き、涕淚の頸を沾すに至る。家既迎は中國より金壁を匈奴王に賂りて以て自分は國へ歸れるを曰ふ。歸寧は女子外より歸りて父母の安否を問ふことを曰ふ。父母の一を缺くも亦此の文字を用ふるなり。捐は捐棄、所生は匈奴王と我との間に生れし子を曰ふ。兒呼母失聲 我

掩耳不忍聽 母の子に於ける、子の母に於ける、東西別無く、古今同一なり。但し毛唐は除外例とすべし。追持は小兒が去らんとする母の身を追ふなり。走笳箏 小兒母を追ふの狀を曰ふ。頓は頓足、起は起立、毀顔形右往左往して身體を毀傷するを曰ふ。破人情 小兒が此の如く追慕するを拂て去る、豈之を人情と言はんや、自ら以て破と稱する所以也。別章に曰く「兒前んで我頸を抱き、我に問ふ何くに之かんと欲する、人は言ふ母當に去るべし。豈復還る時あらん。阿母常に仁惻、今何ぞ嬰に慈ならざる。我尙ほ未だ成人せず、奈何ぞ顧思せざる。此を見て五内崩る、恍惚狂癡を生ず、號泣して手撫摩す、當に發せんとして復回疑す。兒が年は幾年と言ふの説は無用なり。母たる者兒に對しての至愛を敘ぶれば足るなり。患と單と關と疊と曼と歎と安と餐と乾と難と顔と韻、零と冥と以下二十四句皆一韻なり。范曄が文姬を贊して曰く端操蹤あり、幽閒容あり。風烈を區明し、我が管形を昭かにす。

胡笳第十七

胡笳は蔡琰が作る所、東漢の文士騷に意あるもの多し、録せずして獨り此の篇を取ること、以爲らく楚語に規規たらすと雖も、其の哀怨中に發して自ら已む能はざるの言、病ずして呻吟する者に賢れるなり。范史乃ち棄てて録せず、獨り其の悲憤詩二首を載す。二詩詞意淺促、此の詞の比にあらず、眉山の蘇公已に其の妄を辯す。蔚宗が文は下れり、固に警せざるあらん。歸來子、屈を祖とし蘇を宗とす、亦未だ此を聞かざるは何ぞや。琰身を胡虜に失して、義に死すること能はず、固に言ふ可き無し。然も猶能く其の恥づ可きを知るときは、揚雄



が「反騷」の意と又開あり。今此の詞を録することは琰を恕するにはあらず。亦以て雄が惡を甚しと爾云ふ(晁氏)。  
死に就て三種あり、曰く上士と中士と下士となり。上士は義の爲めに直ちに死す、下士も亦勇の爲め直ちに死す。獨り中士のみ其の死に就ての是非、非不非を考慮し、容易に決せず。文學に長ずる者に於て特に然り。是を以て死すべき道を知ると雖も、生にして以て死に勝るの方法を思案し、思案して止まず、是を以て煩悶懊惱するに至る。此の煩悶懊惱が文字と成て顯はるに至る。上士と下士は此の煩悶懊惱は曾て知らざる所、是を以て決斷が極めて迅速なり。義の爲めに死せよ、宜し死す、勇の爲めに死せよ、宜し死す、此の間に在て何等の顧慮なし。中士は文字なる憂患あり。故に心思は極めて複雑なり、單純にあらず、情懷纏綿、飽まで泣き、飽まで憂へ、飽まで煩悶、飽まで懊惱。而して後或は死に赴き、或は生に赴く。其の偶また死に赴かずして生に赴く者、即ち此の蔡琰が如き者なり、琰が義に死する能はざるは、時もあらば、歸還を得るかとの意あればなり。而かも女性なり、匈奴が至愛を遂に感ずるに至り、子二人まで生むに至る。而かも煩悶懊惱、義を思ひ、道を念ふときは、五内破裂の悲哀ありしならん。要するに是れ中士の類にして、上下士の類にはあらず、死を以て琰を論ずる者は文學を有する女子の性を知らざるなり。烈婦あり、烈女あり、良婦あり、姦婦あり、才女あり、琰は唯是れ才女たるのみ。

我生之初尙無爲 我生之後漢祚衰 天不仁兮降亂離 地不仁兮使我逢此時  
干戈日尋兮道路危 民卒流亡兮共哀悲 煙塵蔽野兮胡虜盛 志意乖兮義節虧  
對殊俗兮非我宜 遭惡辱兮當告誰 箏一會兮琴一拍 心憤怨兮無人知

我が生の初は尙無爲なり、我が生れし後は漢祚衰ふ、天不仁にして亂離を降し、地不仁にして我をして此の時に逢はしむ、干戈日に尋で道路危し、民卒流亡して共に哀悲す、煙塵野を蔽うて胡虜盛なり、志意乖いて義節虧く、殊俗に對することは我が宜きにあらず、惡辱に遭うて當に誰に告ぐべき、箏一會して琴一拍、心憤怨するも人を知る無し。

【句解】 無爲は天下が治平なりしを曰ふ。琰が生年月は未詳なるも生前とは東漢の靈帝時代を指し、生後は獻帝時代を指す。初平は四年、興平は二年、建安は二十五年、是の間羣雄蜂起し、天下麻の如し、遂に蜀と吳と魏との三國と爲り、三國の争鬪、亦常に絶えず。胡虜は中土の亂離に乗じ、數ば來り冒し、遂に琰も亦奪はるるに至る。琰は魏の領土に居りしゆゑ、蔡邕も史上に漢蔡邕と稱すと雖も、實は漢の爲めに死せずして、曹操と交誼深かりしなり。義節虧は自分のことを言ふならんが、實は父たる邕も亦其の義節を虧く一人たりしなり。志意乖 最初の夫たる衛仲道に乖くを曰ふ。本心にあらざるゆゑ乖と曰ふ。殊俗は南匈奴を指す。惡辱に謝すべきに、然らずして子二人を生む。烈女たる能はずして、但才女たるのみ。胡虜は箏を吹き、琴を弾じ、以て琰を慰めんと欲す。琰が心は憤怨して止まず、而かも此の本心は他人の知らざる所なり。此等の語を批評すれば其の矛盾せることを詰斥せざるを得ざるも暫く恕して置かん、爲より知に至る九字一韻なり。

戎羯逼我兮爲室家 將我行兮向天涯 雲山萬重兮歸路遐 疾風千里兮風揚沙  
人多暴猛兮如虺蛇 控弦被甲兮爲驕奢 兩拍張弦兮弦欲絕 志摧心折



兮自悲嗟

我羯我に逼て室家と爲す、我を將て行き天涯に向ふ、雲山萬重歸路遐なり、疾風千里風沙を揚ぐ、人暴猛多く虺蛇の如し、弦を控き甲を被りて驕奢を爲す、兩ひ張弦を拍て弦絶んと欲す、志摧け心折て自ら悲嗟す。

【句解】 戎羯は中土の人より塞外人を總稱する名、今日の蒙古と言へば其の侮念は薄きも、戎羯と言ふときは侮念極めて大なるが如きの感を爲す。其の人種も鼻夷く、脣出て、齒は疎なりと斷するときは極めて醜形なるも、實際に蒙古人を見るときは、容貌秀麗なるもの往往にあり。揚沙は蓋し事實なり。暴猛の性は彼等の先天的所有なり。馬肉を以て常食と爲すの人、暴猛ならざるを得ず、強悍ならざるを得ず。控弦被甲、禽鳥の類より、他動物を屠る實際やら、日常の遊戯に至るまで此の風習にて驕奢の態度を爲すとなり。志摧心折、此の如き暴猛の徒に身を捧ぐるは本志本心にあらず。而かも其の本志本心共に摧折したるを以て自ら顧みて悲嗟するならん。家以下嗟に至る七字一韵なり。

越漢國兮入胡城、亡家失身兮不如無生、氈裘爲裳兮骨肉震驚、羯羶爲味兮枉遏我情、鞞鼓喧兮從夜達明、胡風浩浩兮暗塞營、傷今感昔兮三拍成、銜

悲畜恨兮何時平  
漢國を越て胡城に入る、家を亡し身を失ふは生無きに如かず、氈裘を裳と爲し骨肉震ひ驚く、羯羶味と爲し我が情を枉遏す、鞞鼓喧しうして夜より明に達す、胡風浩浩として塞營暗し、今を傷み昔を感じて三拍成る、悲を銜み恨を畜て何れの時か平ならん。

【句解】 氈裘は獸皮を以て製せる衣裘。骨肉は始めて著用する自分の身體を曰ふ。風姿の極めて變化せしを自ら震驚するなり。羯羶、羯は元來上黨の地名、胡人之に居るを以て胡戎を羯と稱するに至る。羶は善の俗字とす。三羊相積るときは臭氣あり、即ち「ナマガサシ」と訓す。是の食物を馳走して以て我が懷郷の情を枉遏せんとするとなり。鞞鼓は「フリ鼓」なり、夜中に之を叩く、其の聲喧しくして眠る能はざるなり。浩浩は風聲を曰ふ。塞營は中土と蠻土との中間の營を曰ふ。三拍成は恐らくは三番目の詩が成りしとなり。城以下七字一韵なり。

無日無夜兮不思我郷土、稟氣含生兮莫過我最苦、天災國亂兮人無主、唯我薄命兮沒戎虜、殊俗心異兮身難處、嗜慾不同兮誰可與語、尋思涉歴兮多難阻、四拍成兮益悽楚

日と無く夜として我が郷土を思はざるは無し、氣を稟け生を含もの我が最苦に過ぎたるは莫し、天災し國亂れて人主無し、唯我が薄命なる戎虜に没す、殊俗心異りて身處り難し、嗜慾同じからず誰か與に語る可き、涉歴を尋思すれば難阻多し、四拍成て益す悽楚。

【句解】 人無主は大にして言へば漢に天子無しとの意、小にして言へば婦に夫無きとの意。難は艱と同じ。難阻は道路の艱阻を言ふにあらず、我が身の涉歴の艱阻なりしを悲しむなり。四拍成、是に至り四度目詩成て且つ彈琴を爲す。而して意益す悽楚なり。土以下七字一韵なり。

雁南征兮欲寄邊聲、雁北歸兮爲得漢音、雁飛高兮邈難尋、空斷腸兮思愔愔



攢眉向月兮撫雅琴 五拍冷冷兮意彌深

雁南に征ば邊聲を寄せんと欲す、雁北に歸れば漢音を得んと爲す、雁飛ぶこと高うして逸して尋ね難し、空しく斷腸して思ひ倍倍、眉を攢め月に向うて雅琴を撫す、五拍冷冷として意彌よ深し。

【句解】漢土は南方、匈奴は北方、故に雁が南征するを見れば、我が邊土の信を漢土に寄せんことを思ひ、雁が北歸するを見れば、我が故郷の信を齎らし來るやと思ふ。而かも雁は是れ無情の物、杳邈の蒼空を飛んで、其の音信は尋ぬる能はず。倍倍は和平深靜の貌と注して、喜悅の事に用ふるなり。斷腸して以て喜悅すとは道理通ぜず、乃ち知る思の唯深く靜なるを言ふのみ。唐の李義山の詩に張衡愁浩浩、沈約瘦倍倍の句あり。和平深靜、煩悶して狂奔するの反對と知るべし。全く憂無きにはあらず。冷冷は琴聲の澄むことなり。彼を思ひ、此を思うて意彌よ深きなり。聲は本音「シン」なり、以て音の韻と合す。乃ち聲と音と尋と倍と琴と深と一韻なり。

冰霜凜凜兮身苦寒 飢對肉酪兮不能食 夜聞隴水兮聲嗚咽 朝見長城兮路杳漫 追思往日兮行李難 六拍悲來兮欲罷彈

冰霜凜凜として身寒に苦しむ、飢に肉酪に對するも食ふ能はず、夜に隴水を聞けば聲嗚咽す、朝に長城を見れば路杳漫たり、追思す往日行李の難きを、六拍悲來て彈するを罷んと欲す。

【句解】肉酪は多く牛酪なり。牛血を搾りて以て肉に和して調理するなり。不能食と言へば中土には此の時此の料理法無きものならん。隴水は甘肅と陝西との間を流れて塞外に注ぐ水なり。嗚咽は水の暗處に泣く貌なり。

行李は荷物を持って旅行すること、「カウリ」にあらず、「アンリ」の音に讀む。往日は匈奴に奪はれし當時を指す、己より以前の義にはあらず。寒より彈に至る四字一韻なり。

日暮風悲兮邊聲四起 不知愁心兮說向誰是 原野蕭條兮烽戍萬里 俗賤老弱兮少壯爲美 逐有水草兮安家葺壘 牛羊滿野兮聚如蜂蟻 草盡水竭兮牛馬皆徙 七拍流恨兮惡居於此

【句解】邊聲は邊土の鳴ものの聲、何でも通するなり。水聲も風聲も人聲も泣聲も笑聲も皆之を邊聲と曰ふ。向誰是 心の愁を誰に向つて話して是やとなり。烽は烽燧、狼煙なり。戍は衛戍なり、高き土槽を作り其の上に置く物なり。塞外の蕭條たる凄狀窮無し。老者や弱者は卑められ、少者と壯者とのみ喜ばる、中土の如く老を貴ぶには似ざるなり。所謂遊牧の民、水草を逐うて、東西定めなし、人家も徙れば、牛馬羊も從て徙る。七拍は遂に恨を流して、惡ぞ此の處に永居するを得んやとなり。起以下此に至る七字上聲の一韻なり。

爲天有眼兮何不見我獨漂流 爲神有靈兮何事處我天南海北頭 我不負天兮天何配我殊匹 我不負神兮神何殛我越荒州 製茲八拍兮擬俳優 何知曲成兮心轉愁



天眼ありと爲ば何ぞ我が獨り漂流するを見ざるや、神靈ありと爲ば何事ぞ我を天南海北の頭に處く、我天に負かず天何ぞ我を殊匹に配す、我神に負かず神何ぞ我を殛して荒州を越しむる、茲の八拍を製して俳優に擬す、何ぞ知らん曲成て心轉愁ふ。

【句解】 天は天帝、神は鬼神、共に人間の邪正是非を明白に照鑒するものなり。然るに天も神も我が非常なる罪惡あるにあらすして此の如く、蠻土に勞苦するを救ひ玉はざるやとなり。殛は誅殛、即ち殛なり。我が精神を殛すなり。荒州は遠隔の州國を越ゆるとなり、遂に茲八拍成る、以て俳優は役者と同じ、其れに擬つて見ても、哀哉曲は成るも、中心憂愁の者、何ぞ其の曲を奏するを得んやとなり。流以下愁に至る五字一韻なり。

天無涯兮地無邊 我心愁兮亦復然 人生倏忽兮如白駒之過隙然 不得懽樂  
兮當我之盛年 怨兮欲問天天蒼蒼兮上無緣 舉頭仰望兮空雲煙 九拍懷情

天涯り無く地も邊り無し、我が心の愁も亦復然り、人生倏忽として白駒の隙を過るが如く然り、懽樂を得ず我が盛年に當れり、怨で天に問んと欲すれば天蒼蒼として上るに緣無し、頭を舉て仰ぎ望めば空しく雲煙、九拍情を懷て誰と與に傳へん。

【句解】 天地は涯邊無し、我が憂心も亦同じく涯邊無きなり。而かも人生は出息は入息を圖らず、白駒隙を過ぐ、何ぞ之を引き回すを得んや、懽樂を得ずして盛年を過ぐ、豈天を怨まざるを得んや。邊と然の二字及び年と緣と煙と傳と韻なり。

城頭烽火不曾滅 疆場征戰何時歇 殺氣朝朝衝塞門 胡風夜夜吹邊月 故鄉隔兮音塵絕 哭無聲兮氣將咽 一生辛苦兮緣別離 十拍悲深兮淚成血

城頭の烽火會て滅せず、疆場の征戰何れの時か歇ん、殺氣朝朝塞門を衝き、胡風夜夜邊月を吹く、故郷隔つて音塵絶え、哭して聲無く氣將に咽ばんとす、一生の辛苦別離に緣る、十拍悲深くして涙血と成る。

【句解】 烽火不滅は戰塵の絶えざるを言ふ。疆は疆界なり。場は場畔、又疆場と成語して界を言ふ。殺氣の二句十四字、上下を逆用すれば全く唐人の絶句と爲る。詩としては凄狀を盡くせるものなり。戰時にあらざるも故郷を忘るる能はず、況や此の戰時に遭ふをや。別離の苦境、人生の最苦と爲す所以なり。滅以下血に至る五字一韻なり。

我非貪生而惡死 不能捐身兮心有以 生仍冀得兮歸桑梓 死當埋骨兮長已矣 日居月諸兮在戎壘 胡人寵我兮有二子 鞠之育之兮不羞恥 閔之念之兮生長邊鄙 十有一拍兮因茲起 哀響纏綿兮徹心髓

我生を貪りて死を惡むにあらず、身を捐る能はざるは心以あり、生て仍に桑梓に歸ることを得んと冀ふ、死せば當に骨を埋て長く已ぬべし、日や月や戎壘に在り、胡人我を寵して二子あり、之を鞠ひ之を育うて羞恥せず、之を閔み之を念うて邊鄙に生長す、十有一拍茲に因て起る、哀響纏綿として心髓に徹す。

【句解】 有以は道理ありと言ふが如し。桑梓は父母の墓所を言ふ。自分も死せば父母の邊に骨を埋めんと冀ふなり。日居月諸の四字は「詩經」の語、所謂今日も暮たり、今月も暮たりと嘆息する。而かも戎壘を去る能は



ざるなり。不着恥。子が生れて見れば、人間として一種の愛を引き起す、乃ち以て之を鞠育して羞恥とせざるなり。之を関念するが故に今日も今月も此の邊土に生長したるなり。此の十有一拍は蓋し茲の事を詠するに因て起る。自ら作り自ら誦む。哀響は纏綿として心髓に徹底すとなり。死と以と梓と突と壘と子と恥と鄙と起と髓と一韻なり。

東風應律兮暖氣多 知是漢家天子兮布陽和 羌胡蹈舞兮共謳歌 兩國交歡兮罷兵戈 忽遇漢使兮稱近詔 遣千金兮贖妾身 喜得生還兮逢聖君 嗟別稚子兮會無因 十有二拍哀樂均 去住兩情兮誰具陳

東風律に應じて暖氣多し、知ぬ是れ漢家の天子陽和を布を、羌胡蹈舞して共に謳歌す、兩國歡を交て兵戈を罷む、忽ち漢使の近詔を稱するに遇ふ、千金を遣て妾が身を贖はしむ、生還して聖君に逢ふを得るを喜び、稚子に別れて會に因無きを嗟く、十有二拍哀樂均し、去住兩情誰にか具陳せん。

【句解】 應律 一年を以て十二律に配す。東風は三月を以て南風に代るも邊土は四月猶ほ東風ならん。暖氣多 人の氣分漸く和ならんとす。陽和は自然が布くもの天子の布く所にあらず、然るを漢家の天子が布くと言ふは、今恩命が下ればなり、其の恩命は自分一人の爲めならず、漢胡兩國の幸福なり。兵戈 罷まざるときは兩國の不幸なり、而して自分は思ふ己に生還は望無きものと期し居りたるに何ぞ計らん、生還を得て聖君 即ち漢の天子に逢ふこととなるや、是れは喜悅する所なり。而して嗟する所のは此の二人の子に別れ復再會の期無きことをと。哀と樂と均等と爲る。是を以て去が可きや、住が可きや、又誰と共に此の事を談せんや。

多と和と歌と戈と韻、身と君と因と陳と韻なり。

不謂殘生兮卻得旋歸 撫抱胡兒兮泣下沾衣 漢使迎我兮四牡駢駢 號失聲兮誰得知 與我生死兮逢此時 愁爲子兮日無光輝 焉得羽翼兮將汝歸 一步一遠兮足難移 魂消影絕兮恩愛遺 十有三拍兮絃急調悲 肝腸攪刺兮人莫我知

謂はざりき殘生卻て旋歸するを得んとは、胡兒を撫抱して泣下りて衣を沾す、漢使我を迎へて四牡駢駢たり、號して聲を失へども誰か知るを得ん、我と生死此の時に逢ふ、愁へは子の爲なり日に光輝無し、焉んぞ羽翼を得て汝を將て歸らん、一たび歩し一たび遠し足移し難し、魂消え影絶えて恩愛遺、十有三拍絃急に調悲しむ、肝腸攪刺して人我を知ること莫し。

身歸國兮兒莫知隨 心懸懸兮長如饑 四時萬物兮有盛衰 唯我愁苦兮不暫移 山高地闊兮見汝無期 夏深夜闌兮夢汝來 斯夢中執手兮一喜一悲 覺後痛吾心兮無休歇時 十有四拍兮涕淚交垂 河水東流兮心是思

身國に歸れども兒は隨を知る莫し、心懸懸として長く饑るが如し、四時萬物盛衰あり、唯我が愁苦は暫くも移らず、山高く地闊し汝を見るに期無し、夏深夜闌にして汝が來るを夢む、斯夢中手を執て一たび喜び一たび悲しむ、覺て後我が心を痛しめ休歇の時無し、十有四拍涕淚交垂る、河水東流して心是れ思ふ。

【句解】 駢駢は壯なるを言ふ。攪刺は攪亂刺激なり。懸懸は先輩曰く空に釣り上げてあるやうなこと、悲み



が移りて懼びになりさうなものぢやが、我が悲みばかりは移らぬなり。嬰深 嬰は夜と同じ、漢代嬰を分ちて初嬰、二嬰、三嬰、四嬰、五嬰とす。宋人は六嬰の詩を賦するあるも、古は五嬰に止まる。又是を甲夜、乙夜、丙夜、丁夜、戊夜の五に配す。斗雞の針が變るを以て乃ち夜の代名詞と爲す、深嬰と言へば即ち三嬰なり。関は酣と異る、四嬰より五嬰に及ばんとする刻を言ふ。是の故に嬰深夜関の文字は拘泥して解釋する必要は無し、夜夜汝が來るを夢るの意に解して可なり。歸以下思に至る皆一韻なり。

十五拍兮節調促 氣填胸兮誰識曲 處穹廬兮偶殊俗 願得歸來兮天從欲  
再還漢國兮歡心足 心有懷兮愁轉深 日月無私兮曾不照臨 子母分離兮意難任 同天隔越兮如商參 生死不相知兮何處尋

十五拍節調促る、氣胸に填て誰か曲を識ん、穹廬に處して殊俗に偶す、歸來を得んことを願へば天欲るに従ふ、再び漢國に還りて歡心足る、心懷ひあり愁轉た深し、日月私無きも曾て照臨せず、子母分離して意任へ難し、同天隔越して商參の如し、生死相知らず何の處にか尋ん。

【句解】 節調促 一拍よりして已に十五拍に至る段段調子が促迫し來るなり、促迫は寛緩の反対なれば、氣が胸中に填ちて正曲なるや或は亂曲なるや自ら知るに由し無きなり。穹廬は前に辨せり、偶は配偶、細君と爲りしを言ふ。殊俗 漢人種より彼等匈奴人を見れば全く殊俗なり、日本の女が西洋人に嫁せしめられたるより已上の苦痛を感じせしならん。天は漢の天子を指す、歸來を願求したれば天子は我が欲する所を許容せられたるを言ふ。而して一懼一愁、念頭に往來して止む時無し。日月は胡も漢も同一に照すなれども、母子一處にあ

らざれば照臨せざるも同じ。商星も參星も、同じく天に出る星なりと雖も、商星出るときは參星隠れ、參星出るときは商星隠る、是を以て商星と參星とは相會すること千萬年無し、我が母子は其れ此に似たり。促と曲と俗と欲と足と韻、深と臨と任と參と尋と韻なり。

十六拍兮思茫茫 我與兒兮各一方 日東月西兮徒相望 不得相隨兮空斷腸  
對萱草兮憂不忘 彈鳴琴兮情何傷 今別子兮歸故郷 舊怨平兮新怨長 泣血仰頭兮訴蒼蒼 胡爲生我兮獨懼此殃

十六拍思茫茫たり、我と兒と各の一方なり、日は東月は西徒に相ひ望む、相ひ隨ふを得ずして空く斷腸す、萱草に對して憂へ忘れず、鳴琴を弾じて情何ぞ傷る、今子に別れて故郷に歸る、舊怨は平き新怨は長し、血に泣き頭を仰ぎて蒼蒼に訴ふ、胡爲ぞ我を生で獨り此の殃に懼らしむる。

【句解】 茫茫の文字使用法は頗る富む、海にも、山にも、野にも皆用ふ。要するに際限の無きを意味す、思が際限無きなり。萱草は忘憂、療愁、丹棘、鹿葱、妓女、鹿劍、宜男草の多名を有す。和名「ワスレグサ」葉は四時常翠、花は五月開く、之を背に樹て玩味すれば憂を忘る。又之を製して藥と爲し飲めば人の五臟を安んじ權樂憂を忘れしむるを以て忘憂草の名ある所以と。然るに我は忘憂草に對坐するも曾て憂を忘れずとなり。舊怨は胡國に在る間の怨、新怨は漢土に歸りて後の怨、一は平和に歸したるも一は新たに生ず。蒼蒼は蒼天なり。蒼天に告訴するに何の言辭を以てするや、曰く胡爲ぞ我を人間に生じて此の如くの殃禍に懼らしむるやと。茫より殃に至る一韻なり。



十七拍兮心鼻酸 關山阻修兮行路難 去時懷土兮心無緒 來時別兒兮思漫  
漫 塞上黃蒿兮枝枯葉乾 沙場白骨兮刀痕箭瘢 風霜凜凜兮春夏寒 人馬  
饑餒兮筋力單 豈知重得兮入長安 歎息欲絕兮淚闌干

十七拍心鼻酸す、關山阻り修うして行路難、去る時は土を懷ふ心緒無し、來る時は兒に別れて思ひ漫漫たり、塞上の黃蒿枝枯れ葉乾く、沙場の白骨刀痕箭瘢あり、風霜凜凜として春夏寒し、人馬饑餒して筋力單なり、豈知らんや重て長安に入るを得んとは、歎息して絶んと欲して淚闌干たり。

【句解】鼻酸は後世多く酸鼻と用ふ。關山は幾關門と幾山嶺との意味なり。阻は險阻。修は長修。去時は土を去る時。懷土は漢土を懷うてなり。無緒は心に「イトグチ」無きなり、「イトグチ」無き心は落ち著ざること知るべし。來時は胡を去て漢に來る時を言ふ。漫漫は茫茫と殆んど同義なり。塞上に於ける黄色の蒿は枝も葉も枯れ乾く。而して沙場を見れば纍纍たる白骨が或は刀痕の者、或は箭瘢の者あり。風霜凜凜は漢土なりせば冬日に限る。而して胡土は春夏 共に寒となり。人も馬も饑餒して筋力が單即ち弱なるなり。餓は擊餓、噎餓、轟餓、驚餓と成語して、擊つ音、噎しき音、轟く音、驚く音より來る。饑餓は饑に惱んで苦聲を發するより之を言ふ。先輩が餓は彌が上へ崩れかかりしどけ無うなりた體なりと曰ふは誤りと知るべし。豈知 以下の意味は身胡土に死せんとのみ思ひ居りしに何ぞ計らん長安 即ち漢の都へ歸ることとなるを得んとは。是に於てか悲喜交も來る。悲涙も闌干、喜涙も亦闌干なり、先輩曰く涙が亂れて零る體と、今日く然らず涙の長く落るを云ふ。酸より干に至る一韻なり。

胡笳本出自胡中 緣琴翻出音律同 十八拍兮曲雖終 響有餘兮思無窮 是  
知絲竹微妙兮均造化之功 哀樂各隨人心兮有變則通 胡與漢兮異域殊風

天與地隔兮子西母東 苦我怨氣兮浩於長空 六合雖廣兮受之應不容

胡笳は本胡中より出づ、琴に緣て翻出して音律同じ、十八拍曲終ると雖も、響餘有て思ひ窮無し、是に知る絲竹の微妙造化の功に均きことを、哀樂各の人の心に隨て變あるときは通ず、胡と漢と異域殊風なり、天と地と隔つて子は西母は東なり、我を苦むる怨氣長空に浩たり、六合廣しと雖も之を受るに應に容られざるべし。  
【句解】胡笳を胡笳として聽かず、之を漢土に起りし琴に翻出して見るときは其の音律全く同じとなり、出の字入聲に讀めば「イヅル」なれど、去聲に讀めば「イダス」なり、出は自動詞、出は他動詞なり。故に翻出と讀む、翻出にはあらず。響有餘思無窮の六字は詩に於ける、歌に於ける其の至極は皆此の六字に歸す、此の響がありてこそ詩でも歌でも天地を感じ鬼神を驚かすの力あり、響無きときは犬一匹を驚かすこと能はず、況や天地鬼神をや。響と言へば唯だ是れ金石絲竹の響音なり、瓦釜土甕の響音にあらず、瓦釜の類は初めより響を有せざる器物なればなり。是に於てか知る、絲竹の微妙は天地造化の功と均等なりと、今其の琴聲に因ても知る、人心に悲哀あるときは自から悲哀の響と爲り、娛樂あるときは自から娛樂の響と爲る。變通 共に自由自在なり、然れども今日の琴聲は哀聲なり、我が怨氣は漫漫として際涯あること無し。六合 即ち天地四方廣大なりと雖も、我が怨氣は容ること能はざるべし。中より容に至る一韻なり。



登樓賦第十八

登樓賦は魏の侍中王粲が作る所、字は仲宣、山陽高平の人、幼時蔡邕の稱する所となりて以て名を馳するに至る。歸來子、粲が詩を評して曰く登樓の作、楚詞を去ること遠し、又漢に及ばず、然れども猶ほ魏の曹植、晉の潘岳、陸機が愁詠閑居懷舊の衆作に過ぎたり。蓋し魏の賦此に極まる。

登茲樓以四望兮 聊假日以銷憂 覽斯宇之所處兮 實顯敞而寡仇 挾清漳之通浦兮 倚曲沮之長洲 背墳衍之廣陸兮 臨臯隰之沃流 北彌陶牧西接昭丘 華實蔽野黍稷盈囷 雖信美而非吾土兮 曾何足以少留 遭紛濁而遷逝兮 漫踰紀以迄今 情眷眷而懷歸兮 孰憂思之可任 馮軒檻以遙望兮 向北風而開襟 平原遠而極目兮 蔽荆山之高岑 路透迤以修迥兮 川既漾而濟深

茲の樓に登りて以て四に望み、聊か日を假りて以て憂を銷す、斯の宇の處る所を覽れば、實に顯敞にして仇寡し、清漳の通浦を挾で、曲沮の長洲に倚る、墳衍の廣陸に背て臯隰の沃流に臨めり、北のかた陶牧に彌り西のかた昭丘に接せり、華實野に蔽ひ黍稷盈に盈てり、信に美なりと雖も吾が土にあらず、曾て何ぞ以て少も留るに足んや、紛濁に遭て遷り逝く、漫に紀を踰て以て今に迄る、情眷眷として歸らんことを懷ふ、孰か憂思に任べけんや、軒檻に馮て以て遙に望み、北風に向て襟を開く、平原遠くして目を極むれば、荆山の高岑に蔽る、路透迤として

以て修く迥なり、川既に漾として濟深し。

【句解】 王粲が此の賦を作りし處は荆州に於てなり、亂世漂泊して他郷に在り、感慨の多きは固より其所故郷を思ふの念、豈深からざるを得ん。茲樓とあるも、明白ならず、或は假説せしものなるやも知れず。假日は今日の好日を假りてなり、登樓に好き日即ち晴天に乗じてとなり。宇は樓中の一部分「ヤグラ」なり。顯敞は高顯にして開敞、實に四方を眺望するに此の如きの當のもの他に無し、是を以て寡仇と曰ふ。仇は仇讎又仇匹、今は仇匹の意。挾は兩方より挾むなり。清漳は「山海經」に發鳩の山、漳水出づ、又東北百二十里を少山と曰ふ、清漳水出づと、荆州を通ずる川と知るべし。通浦 甲の浦より乙の浦へ通航するを得る水路を稱して通浦と曰ふなり、而して樓の正しく倚る所は曲沮と稱する水の長洲であるなり、而して樓の背後は墳衍として高き廣大の原陸なり。而して臨む所は臯隰 即ち水澤の沃流 即ち灌沃の流なり。陶牧も昭丘も共に地名。而して原野には華實多く、田疇には黍稷が盈てり。此の如く富饒の地、美なりと雖も、吾が故郷にはあらず、一刻も早く去て、此に留滞すべからず。如何にせん戰塵の紛濁に遭遇して甲地に遷り、乙地に逝くの境界となるを、

是れ漢末の董卓が亂に逢ふことを言ふ。紀は年紀子丑寅卯の十二の干支を十二年回るを以て一紀と稱す、今日は百年を以て一世紀と爲すは西洋人の定むる所なり。迄は至と同じ。眷眷は戀戀と殆んど同じ。憂思之を「憂思ニ」又は「憂思ヲ」と訓ますべし。之は「コレ」にはあらず、「中庸」の天命之謂性の文法なり。馮は倚馮なり。軒檻 軒窗に版を以てするを檻と曰ふ、檻檻「タテ」なり。北風 北方を望む所以は長安は北にあればなり、見る能はざるは明かなり、而かも之を望む、人情然るなり。荆山は荆州の山。高岑は特に高出する岑、而して路



は透迤 右へ回り、左に旋り、以て修遠遙適なり。川も亦漾漾として濟は其れ深しとなり。憂と仇と洲と流と丘と疇と留と韻、今と任と襟と岑と深と韻なり。

悲舊郷之擁隔兮 涕橫墜而弗禁 昔尼父之在陳兮 有歸歎之歎音 鍾儀幽而楚奏兮 莊舄顯而越吟 人情同於懷土兮 豈窮達而異心 惟日月之逾邁兮 俟河清兮其未極 冀王道之一平兮 假高衢而騁力 懼匏瓜之徒懸兮 畏井渫之莫食 步棲遲以徒倚兮 白日忽其將匿 風蕭瑟而竝興兮 天慘慘其無色 獸狂顧以求羣兮 鳥相鳴而舉翼 原野闕其無人兮 征夫行而未息 心悽愴以感發兮 意忉怛而慳惻 循階除而下降兮 氣交憤於胸臆 夜參半而不寐兮 悵盤桓以反側

舊郷の擁隔せるを悲んで、涕横墜して禁ぜず、昔尼父が陳に在せし、歸歎の歎音あり、鍾儀幽せられて楚奏し、莊舄顯れて越吟す、人情土を懷ふに同じ、豈窮達して心を異せんや、惟日月の逾邁なる、河清を俟も其れ未だ極らず、王道の一たび平ならんことを冀がふ、高衢を假て力を騁せん、匏瓜の徒に懸ことを懼れ、井渫の食るること莫ことを畏る、步棲遲して以て徒倚す、白日忽として其れ將に匿んとす、風蕭瑟として竝び興る、天慘慘として其れ色無し、獸狂顧して以て羣を求め、鳥相鳴て翼を舉げ、原野闕として其れ人無く、征夫行て未だ息ず、心悽愴として以て感發し、意忉怛して慳惻す、階除に循て下降す、氣交胸臆に憤る、夜參半にして寐られず、悵として盤桓として以て反側す。

【句解】

擁隔は擁塞隔絶なり。尼父は孔子。「論語」の公冶長第五に子陳に在て曰く歸與歸與と、乃ち魯に歸らんと欲したるなり。鍾儀は楚の成王の臣、晉楚城濮の戦に捕虜となり、文公の面前に於て楚國の樂を奏し、楚の冠弁を棄てざりき。莊舄は越の人、宋に入て猶ほ越を慕ふの吟を爲す。富貴も功名も、故郷を念ふ人の前には半文錢の價値無きなり。窮するもあり、達するもあり、而かも郷土を懷ふの情は皆同じ。日月は電光石火の如く逾邁す、今日の日は昨日の日にあらず。俟河清 聖人が出れば河は清むと聞く、其れを樂として之を俟つも、其の好期は容易に極る様子は無し。王道は戰鬥無し、其の王道の一平ならんことを冀ふ。高衢の意は種種に用ひられるが、高き地位、即ち政を行ふに足る地位を假てと見るべし。騁力高き地位を假らば、其の力を馳騁するは自由自在なればなり。懼匏瓜之徒懸 匏瓜を樹上に懸け置くときは風の吹く毎に輻輳の聲を發する位が能にて他に何等の功能なし。我は懼る匏瓜の如く徒に樹上に懸るが如きを、出て以て天下の爲め用を爲さんとなり。井渫は井水を浚渫すること、井水を浚渫することの本意は人をして清水を飲ましめんが爲めなり、人の飲まず食はざるときは、畢竟井渫の功は徒勞に屬す。我に用ふべき才能あるも、我を用ふる人無きに於ては、清水人の飲まざると同一なり。此の如き想到耽りつつ左方に棲遲し、右方に徙倚す、此の如くにして白日も將に暮なんとす、坐に哀愁を増すものは風聲の蕭瑟たる、天色の慘慘たる、自然界の悽狀に伴うて、獸 即ち犬や狼の類、狂願して以て羣を求めて來る、鳥類は互に林棲を求めて飛び去る、原野は闕寂として人無し、但見る所は征夫 即ち旅行を急ぐ者のみ休息せずして行くを、是に於て我が心は悽愴として種種の感慨が激發す。忉怛 忉は憂切、怛は悲怛、慳惻 慳は慳痛、惻は惻隱、此の如くかなしむ心意を形容するに、此の如く重疊して用ふ、人をして如



何に耐へ難きかを想像せしむるに足る。階除は樓上より下り來るなり。循は階を段段と順序に下り來るを言ふ。臆は満なりと注して氣の満る處を言ふ。自から以て憤懣の氣に満つるなり。參も半も同一義に中夜を言ふ。盤桓は進み難き貌。『酉陽雜俎』に盤桓は髻の名。注に長安の婦人好んで盤桓髻を爲すとあり、今日の束髮に類するなり。反側は傾側なり、カタブキノバダツなり。禁と音と吟と心と韻、極より結句の側に至る一韻なり。

歸去來辭第十九

歸去來辭は晉の處士陶淵明が作る所、名は潛、字は元亮、淵明も又名なり。潯陽柴桑の人、曾祖陶侃は晉の大司馬なり。淵明少うして高志あり、親を養はん爲め出て彭澤令と爲る。督郵縣に至る、吏白す束帶して之を見よと。潛嘆じて曰く我五斗米の爲め腰を折て郷里の小兒に向はんやと、即日印綬を解き去る。乃ち歸去來辭を爲る、元嘉四年卒す、年六十三、世靖節先生と號す。宋の歐陽修曰く兩晉に文章無し、獨り此の篇あるのみ。夫れ屈子は其の志を表すに憤懣激越の音を以てし、陶子は其の誠を發するに泊然冲澹の言を以てす。同一の志願あつて共に遂ること能はず、昔人屈陶并稱して之が爲め流涕太息する者あるは固に其れ然るなり。

歸去來兮田園將蕪胡不歸 既自以心爲形役 奚惆悵而獨悲 悟已往之不諫 知來者之可追 實迷塗其未遠 覺今是而昨非 舟遙遙以輕颺 風飄飄而吹衣 問征夫以前路 恨晨光之熹微

歸去來田園將蕪とす胡ぞ歸らざる、既に自ら心を以て形の役と爲す、奚ぞ惆悵して獨り悲しむ、已往の諫めざるを悟り、來者の追ふべきを知る、實に塗に迷ふ其れ未だ遠からず、今は是にして昨は非なるを覺ゆ、舟遙遙として輕く颺り、風飄飄として衣を吹く、征夫に問ふに前路を以てし、晨光の熹微なることを恨む。

【句解】 歸去來を先輩訓して「カヘリナイザ」と讀む、歸哉、歸歟と用ひずして歸に去來の文字を結合せしむ、余は孟子の浩然の氣、淵明の歸去來、柳子厚の暮色蒼然を稱して之を三發明の語と曰ふ。先輩説くが如く「ヤレ歸ラウツ」と誘ふ詞なり。蕪は荒蕪。胡は何と同じ、歸田の我が志は自ら以て畔耘するに在り、以心爲形役「淮南子」に形神俱役の語あり、形は肉體なり、心は精神なり、是の肉體五尺を保存せんが爲め精神も是に由て使役せらる、其の馬鹿馬鹿しさを思へば惆悵し又悲しむ。潔き精神が肉體を保存せんが爲め動ともすれば濁るればなり。然りと雖も其れは已往に屬す、在官八十餘日の空夢に歸す、諍諫するも益無きを悟る。來者は猶ほ追隨すべし。迷塗は迷塗なり、塗に迷うて百里千里と遠く行く者は容易に還ることを得ざるも、十里二十里ならば何ぞ是を遠しと言はん、早く正道に還るべし。我の昨日まで在官せしは非にして、今日田園に歸るは是なるを覺えしなり。搖搖は舟の水上に輕颺する形容。飄飄は微風の衣を吹く形容。征夫は道を行く人、前路の遠近を問ふ。熹微は熹微なり。晨光の赫赫たらずして、微微たるを言ふ。元の鄭本文が日欲暮と注したるは大に誤る、朝光がボンヤリなるを以て晴か雨かと心配するなり。歸と悲と追と非と衣と微と韻なり。

乃瞻衡宇載欣載奔 童僕歡迎稚子候門 三徑就荒松菊猶存 攜幼入室有酒盈樽 引壺觴以自酌 眄庭柯以怡顏 倚南窗以寄傲 審容膝之易安 園日涉以成趣 門雖設而常關 策扶老以流憩 時矯首而遐觀 雲無心以出岫



鳥倦飛而知還 景翳翳以將入 撫孤松而盤桓

乃ち衡宇を瞻て載ち欣び載ち奔る、童僕歡ひ迎へ稚子門に候つ、三徑荒に就て松菊猶ほ存せり、幼を攜へて室に入り酒あり樽に盈つ、壺觴を引て以て自から酌み、庭柯を眇て以て顔を怡しむ、南窗に倚て以て寄傲し、膝を容るの安じ易ことを審かにす、園日に涉て以て成趣す、門設けたりと雖も常に關せり、策老を扶て以て流憩す、時に首を矯て遐に觀る、雲無心にして以て岫を出で、鳥飛ぶに倦で還ることを知る、景翳翳として以て將に入らんとす、孤松を撫して盤桓す。

【句解】 乃は「スナハチ」と訓す、先儒「イマシ」と訓するは理由なし。衡は「カブキ」木を左右に二本樹て以て門と爲す。宇は屋宇、富豪の家屋とは大に異なるなり、尋常百姓の家是れなり。已にして我が家に到著す、我家を瞻るや直に欣喜して奔り入る、一家眷屬皆歡迎す。三徑は昔蔣詡字は元卿舍中の竹下に三徑を開き、唯求中と羊仲の二人と遊ぶ、淵明が實際に三徑を作りしものか、唯此の古事を借りて言ふなるやは明白ならず。松菊の存するは猶ほ其の貞節の高きを言ふ、桃李存するも何かせん。眇は音「ベン」訓「カヘリミル」なり。先儒「字の正本あるを知らずして曰く吟は誤り盼字なり」と、何孟春曰く吟は音「宛」なり、讀で盼に作るは非と。柯は木枝を言ふ、枝枝相重疊として以て庭中に滿つ、我が幽居の隠趣深く、乃ち怡悦の顔色を爲す所以なり。南窗は其れ暖なれば之に倚る、十一月なれば正に中冬なり。寄傲は我と我と慢なり、小兒輩に叩頭すること無ければなり。審は審明する也。容膝之易安「韓詩外傳」に北郭先生が妻の曰く今駟を結び騎を列とも、安する所は膝を容るに過ぎずと。今此の細君が言ふ所の理、味あるを審明に知るとなり。園日涉以成趣 陶淵曰く趣は趨と

歸去來兮請息交以絕游 世與我而相遺 復駕言兮焉求 悅親戚之情話 樂琴書以消憂 農人告余以春及 將有事乎西疇 或命巾車或棹孤舟 既窈窕以尋壑 亦崎嶇而經丘 木欣欣以向榮 泉涓涓而始流 善萬物之得時 感吾生之行休

同じ、李善注「爾雅」に曰く堂上之を行と謂ふ、堂下之を歩と謂ふ、門外之を趨と謂ふ、中庭之を走と謂ふ。郭璞曰く此皆人の行歩趨走の處、因て以て名く、園中を日涉趨するを謂ふなり。鄭本曰く田園の中、日日游涉して、自ら佳趣を成す。誤謬の説、信ずべからず。關は閉なり。策は策杖なり。扶老 年未だ六十に達らず、而して策に老を扶けらると曰ふ、文章の上の語のみ。淵明豈此の如く衰弱せんや、況や園中の徜徉に於てをや。然れども傳に依れば淵明は脚疾ありと云ふ、策の爲め扶けられ且周流し、且憩息するは或は實際ならん。矯は擧なり。雲無心以出岫 鳥倦飛而知還 鄭本曰く雲は自然の氣、心意無うして山岫の中より出づ。自ら心事を營まず、自ら縱逸を爲すに喩ふ。鳥は晝飛で暮に還る、亦猶ほ人の日出て作き、日入て息るが如し。此明解と言ふ可し、亦千古の名句なり。景は日景。翳翳は漸く暗くならんとする形容。孤松は單に庭中に孤松ありて之を撫し盤桓するなりと解する者あり、又孤松は自況なりと。衆樹は羣小にて孤松は一君子、是の故に其の一君子は己を以て喩ふるなりと。此の二説一方を取る能はず、又一方を舍る能はず、全く舍るときは詩の六義を没却するに至る、全く取るときは詩の自然を害するに至る、此の間の消息は知者と言ふべし、不知者と道ふ可らず。奔と門と存と酌、顔と安と關と觀と還と桓と韻なり。



歸去來請交を息以て遊を絶ん、世と我と相ひ遺る、復駕せよ言焉んぞ求めん、親戚の情話を悦び、琴書を樂んで以て憂を消せん、農人余に告るに春の及ぶを以てす、將に西嚙に事あらんとす、或は巾車に命じ或は孤舟に棹す、既に窮窶として以て壑を尋ね、亦崎嶇として丘を經、木欣欣として榮に向ふ、泉涓涓として始めて流る、萬物の時を得るを善し、吾が生を行休するを感ず。

【句解】 交遊を息絶するを宜しとす、世人と我とは一致する能はず、相遺忘するに如かず。復駕は他人がソナナ事は言はずに復活動し玉へと告る者あるも、我は已に世と遺る、亦焉んぞ求むるものあらんや。情話は一家親族の偽り無き誠話なり。或は一家の會合、即ち家庭團樂の樂み、或は琴書を以て愛即ち國に對する愛を消せん。農人は丁寧にも已に春畊の時來るを忠告せらる。西嚙は南窗の文字に對して言ふならん、一井を嚙と爲す。或命巾車「孔叢子」に曰く孔子歌うて曰く巾車駕を命じ、將に唐都に適んとす。巾は猶ほ衣と同じ、或棹孤舟 交遊の人無し、孤舟を棹す所以。窮窶は深き貌。壑は一本窮に作る、水の窮まる處まで尋となり、是れ舟遊。崎嶇は險阻。丘は丘山、是れ車遊なり。丘には樹木欣欣たり。水には流泉涓涓たり。此の如くにして萬物皆な時を得たり。我が身を願れば何事をも爲さず休息するかと、物に觸れ懷を興す。其の昔は行き今は止むを嘆すと鄭本曰ふ。然らず行は過去を謂ふにあらす、未來を謂ふ語なり、吾が今後は休と曰ふ意なり。世が聖世なりせば、大に活動せんも、如何せん衰世、其の衰世を興すの力も無し。是を以て我は行休せざるべからずと、大に悲痛の意を寓すること知り易し。

已矣乎寓形宇内能復幾時 曷不委心任去留 胡爲遑遑欲何之 富貴非吾願

帝鄉不可期 懷良辰以孤往 或植杖而耘耔 登東臯以舒嘯 臨清流而賦詩

聊乘化以歸盡 樂夫天命復奚疑

已矣乎形を宇内に寓すること能く復幾時ぞ、曷ぞ心を委て去留に任せざる、胡爲ぞ遑遑として何に之んと欲する、富貴は吾が願にあらす、帝郷は期す可らず、良辰を懷うて以て孤往す、或は杖を植て耘耔し、東臯に登りて以て舒嘯し、清流に臨んで詩を賦す、聊か化に乗じて以て盡に歸す、夫の天命を樂んで復奚ぞ疑ん。

【句解】 已矣乎は絶望の詞。寓形宇内復幾時 無限の感慨此の七字に在り。「尸子」に老萊子曰く人の天地の間に生ずるは寄なり。僅僅五十年、六十年と寄寓するに過ぎず、故に我が情を恣にして權樂すべしと爲すあり、又僅かなる生命に過ぎず、一日も早く道を知て之を行ふべしと爲すあり、要は此の二者に歸す。而して凡夫の多くは前者に向ひ、僅かに賢人君子ありて後者に向ふ、淵明は此の後者に向ふの一人なり。曷不委心任去留 委の字は訓義甚だ多し、今の句は安委と見て可なり、心を委じて以て舟の去留に任せて以て遊ばんと成り。享樂の遊にはあらず、君子世を忘るるの遊なり。「琴賦」に性命を委じて去留に任すの句あり。邊邊は俗語の「アワテル」なり、世に何等の求無き者が遑遑とする必要は無きなり。已に富貴は吾が願ふ所にあらず、然りと雖も帝郷も亦期すべからず。鄭本曰く帝郷は京都と。誤謬と謂ふ可し。帝郷は仙人の居を指す。「莊子」に、彼の白雲に乗じて帝郷に至らんと。乃ち仙人と爲ることも吾が希望にはあらず、人は人として道に因て樂まんが淵明の志なり。故に良辰 即ち種種の佳節には或は水に或は山に孤往し。或は杖を植て置きて耘耔 即ち除草し。或は東方の臯丘に登りて舒嘯 即ち氣を發し。或は清流に臨んで詩を賦し。乘化以歸盡 「家語」に曰く化



は陰陽象形に發す之を生と謂ふ。化窮り數盡く之を死と謂ふ。天地の運化と連れ立つて行き、而して化の盡きるときは連れ立て盡きんとなり、生死を眼中に置かざるなり。是を知る即ち是れ天命を知るなり。奚の疑ふ所あらんとなり。王楙曰く『漫錄』に曰く淵明が歸去來辭、臨三清流而賦詩は蓋し嵇康琴賦中の語を用ふ。僕謂ふ淵明曾次、一世に度越し、其の文章率意にして成る。前人の語を規倣せずして、其の意到る處、古人と暗合せざるは無し、意ありて其の語を用ふるにあらず。若し果して『漫錄』言ふ所の如くんば、風飄飄而吹衣は曹孟徳の句なり、泉涓涓而始流は潘安仁が句なり、何ぞ獨り嵇康が語のみならんや。時と留と之と期と籽と詩と疑と韻なり。

鳴臯歌第二十

鳴臯歌は唐の翰林供奉李白が作る所、蜀の人、其の先隋末罪を以て西域に徙る。神龍の初、遁れ還り呂西に客と爲る。賀知章稱して謫仙人と爲す、玄宗の時、翰林に供奉たり。永王璘の事に坐し、夜郎に流さる。代宗の時、左拾遺を以て召す。時に白己に死す、十歳にして詩書を能くす。所謂賦は長ずる所にあらざるも、亦以て其の逸蕩の才を認むるに足る。

若有人兮思鳴臯 阻積雪兮心煩勞 洪河凌兢不可以徑度 氷龍鱗兮難容舠  
邈仙山之峻極兮 聞天籟之嘈嘈 霜崖縞皓以合沓兮 若長風扇海 湧滄溟  
之波濤 玄猿綠猱舔硃峯岌 危無柯振石駭膽慄魄 羣呼而相號

鳴臯を思ふ人あるが若し、積雪を阻てて心煩勞す、洪河凌兢として以て徑に度る可らず、氷龍鱗のごとくにして舠を容れ難し、邈として仙山の峻極なるあり、天籟の嘈嘈たるを聞く、霜崖縞皓として以て合沓たり、長風の海を扇ぐが若く、滄溟の波濤を湧かす、玄猿綠猱硃峯岌を舔舐して、危無柯振石駭かし魄を慄す、羣呼して相號ぶ。

【句解】 若有人「楚辭」山鬼に倣ふ、人は作者自身を指す、鶴の九臯に鳴くは、鶏の短籬に鳴くとは大に異なる、何等かの高き望あるなり。而かも其の九臯は積雪が阻害するを以て容易に之に到る可らず、是を以て心煩勞するなり。洪河 即ち大河。凌兢 氷が張り詰て唯見るばかりにて慄然とする、是の故に徑度する能はず。龍鱗は氷の張り詰てある形容。舠は小舟、小舟すら容るの水も無し。邈は邈然遠方を言ふ。仙山 即ち鳴臯の處を指す。峻極は字の如し。天籟は種種の音が一音に聞ゆる如きを形容する成語。嘈嘈 諸音が一音に合する形容。而して霜崖は眞白にして縞皓。其の縞皓が合沓 即ち集まり層なる。而して長風が海波を扇揚して、波濤が湧出する若くに見ゆ。是れ波濤にあらすして仙山が縞皓として連續するなり。而して玄き猿あり、緑き猱あり。峯も岌も山の高きを曰ふ。硃峯は硃紺と同じ、舌出なりと注す。危無柯の柯は枝なり、枝なりともあれば倚る所と爲すも、柯すら無し。振石も我が膽を駭嘆せしめ、我が魄を戰栗せしむ、玄猿も綠猱も羣呼して以て相號ぶ。臯と勞と號とに至る一韻なり。

峯崢嶸以路絕 挂星辰於巖壑 送君之歸兮動鳴臯之新作 交鼓吹兮彈絲  
觴清冷之池閣 君不行兮何待 若返顧之黃鶴 掃梁園之羣英 振大雅於東



洛 巾征軒兮歷阻折 尋幽居兮越巘嶒 盤白石兮坐素月 琴松風兮寂萬壑  
峯嶒嶒として以て路絶、星辰を巖壑に挂く、君が歸るを送り鳴阜の新作を動かす、鼓吹を交て絲を弾じ、清冷の池閣に觸す、君行ずして何を待つ、返顧するの黄鶴の若し、梁園の羣英を掃て、大雅を東洛に振はん、征軒を巾で阻折を歴、幽居を尋ねて巘嶒を越え、白石を盤にして素月に坐し、松風を琴にして萬壑寂たり。

【句解】 嶒嶒は山の「ケハシキ」なり。巖壑は山の高き貌、山高きが故に星辰は天に挂らすして、此の巖壑に挂るが如く見ゆ。君之歸 假りに送者を設けて君と曰ふ、白自身を言ふ。動は吟動なり。新作は即ち創作此の歌を指す。鼓吹は笙や太鼓の如き物を指す。彈絲は琴を言ふ。觴は送別の酒燕なり。清冷は地名、此の如く送別に歌も作り酒も設く、然るに君は忽忽に行くを欲せずして躊躇するは果して何を待つや、察するに黄鶴に乗て歸る心あればならん。梁園羣英 先儒曰く漢の文帝の時、梁園へ詩人を寄せ詩を作らせたる故事ぞと。文帝が梁園に會せし事は『漢書』に見えず。文帝が子の景帝の時、梁の孝王が來朝したるや、司馬相如、鄒陽、枚乘、莊忌の諸文豪が景帝を去て、悉く孝王の朝に赴く、梁園の羣英とは蓋し是れを言ふ。掃は此等の羣英を一掃しての意なれば頗る抱負の大を見る。大雅は詩經を言ふ。東洛は京都即ち白が居住する處、白は前代の詩賦の柔弱なるを一掃して、詩經の正風を振起せんと志ありしなり。巾は今日用ふる手巾、又幕なり、又衣を以て車を飾るなり。征軒 即ち征車を飾る。歴は經歷。阻折は險阻の路、九十九折是れなり。此の險阻の路を經歷して以て我が幽居を尋ね、巘に巘嶒の山を越ゆ。而して白石を坐する盤とし、素月の下に閑坐す。坐先づ定る。而して後耳に入る者は何ぞ、唯松風の琴聲を作すあるのみ。曾て俗諺有る無し。是を以て萬壑が寂寂寥寥

たるなり、世俗の境界と全く分離し得たるなり。絶と作と閣と鶴と洛と嶒と壑と韻なり。

望不見兮心氣盈 蘿冥冥兮霰紛紛 水橫洞以下 淅波小聲而上聞 虎嘯谷而生風 龍藏谿而吐雲 寡鶴清唳飢鷗嘖呻 塊獨處此幽默兮 愀空山而愁入 鷄聚族以爭食 鳳孤飛而無鄰 蝮蛇嘲龍魚目混珍 嫫母衣錦西施負薪 若使巢由桎梏於軒冕兮 亦奚異乎夔龍 蹙躐於風塵 哭何苦而救楚 笑何誇而却秦 吾誠不能學二子沾名矯節以耀世兮 固將棄天地而遺身 白鷗兮飛來長與君兮相親

望めども見えす心氣盈、蘿冥冥として霰紛紛たり、水洞に横て以て下る、淅波小聲あつて上に聞ゆ、虎谷に嘯いて風を生じ、龍谿に藏れて雲を吐く、寡鶴清唳し飢鷗嘖呻す、塊獨と此の幽默に處り、愀たる空山人を愁へしむ、鷄族を聚めて以て食を争ひ、鳳孤飛して鄰無し、蝮蛇龍を嘲けり魚目珍に混ず、嫫母錦を衣西施薪を負ふ、若し巢由をして軒冕に桎梏せられしめば、亦奚ぞ夔龍が風塵に蹙躐するに異らん、哭すること何ぞ苦しんで楚を救ひし、笑ふこと何ぞ誇て秦を却けし、吾誠に二子の名を沾り節を矯て以て世を耀かすを學ぶこと能はず、固に將に天地を棄てて身を遺れんとす、白鷗飛び來りて長く君と相親まん。

【句解】 望不見は鳴阜を望むも見えず。氣盈は包まれて散せざる貌。蘿は蘿蔓。霰は「アラレ」紛紛は降下する形容。横洞は水が高く懸る、即ち瀑布なり。上聞 水聲を上聞くは、洞の在る處高ければなり。谷は本來の義、山と山との境界の處、水無きものを言ひ、谿は水有るものを言ふ。然れども拘泥するの必要無し、詩



賦には平仄の都合上用ふる場合多し。寡鵠は雌雄の孰れかヤモメなり。清唳は鶴の鳴聲なり。鷗は鷗鼠、ムササビ」と稱す、山中の幽處に在て樹上を自由に飛ぶ、「モグラモチ」にはあらず。嘯呻は鷗の鳴くなり。塊獨は孤獨と同じ。愀は色變るなりと注して、平心を失する貌、平心を失すれば顔色變る。幽默の境遇に堪へざればなり。空山は樹木無き山を言ふにあらず、寂寂寥寥たる山を言ふなり。鷄を出して以て俗界の狀に移る、上の文句は皆仙界なり、羣鷄が同種族を集合して以て互に食を争ふ、是れ世間の羣小輩を言ふ。鳳は同族寡なし。孤飛する所以。無鄰は相伴ふもの無きの謂ひなり。蝦蟇は「イモリ」なり、蝦蟇が龍を嘲笑し、魚目が珍珠と混雜し、嫫母の醜婦が錦衣を著け、西施の美人が薪を負ふ、總ての事世が顛倒せり。巢由は巢父と許由の二人なり、堯帝が天下を譲らんと爲したる時、巢は由を擧げ、由は巢を擧げ、最後に二人共に辭す。然らば二人共に軒冕に桎梏せられざるなり。若し軒冕に桎梏せられたらば、良に平平凡凡の人なり。桎梏せられざるを以て貴しと爲すなり。桎は「アシカセ」木で製したる物、足を動かさざるなり。梏は「テカセ」手を動かさざるなり。軒は軒車、冕は冠冕、以て富貴にして位勢ある事に譬ふ。凡人としては軒冕は貴きものなり。超凡人より之を見れば即ち糞土の如きものなり。夔龍は黃帝の世に出し獸眞龍と異なり、ツマラヌ獸と同一なりしならん也。蹙蹙は旋行の貌と注して、足の不具なる人が行く貌を言ふ。此の人間世界即ち風塵中にチンバの様なる歩行をする。啼哭して以て楚を救ひし者、談笑して以て秦軍を却けし者、前者は申包胥、後者は魯仲連。二子は是の二人なり。功名を沾り、氣節を矯めるは吾の欲せざる所、欲せざるを以て吾は二子の業を學ばずとなり。吾は天地外の天地を求め、天地中の天地を棄て、身外の身を求めて、身中の身を遣れんなり。其れは果して何ぞ白

鷗の如く汎汎として自由の天地に此の白鷗君と共に親しまん。氤と紛と聞と雲と韻、呻と人と鄰と珍と薪と塵と秦と身と親と韻なり。

引極第二十一

引極は唐の容管經略使、元結が作る所、歸來子曰結が性耿介にして道を憂へ俗を闕の意あり、天寶の亂に或は仕へ或は隱る、自ら謂らく世と聲牙すと。故に其の文字に見る者、亦冲澹にして隱約なり。古鐘磬の里耳に諧すして、詞義幽眇なるに譬ふ。之を玩べば翛然として、塵外の趣あるが如し。元結は後魏常山王邃が十五代の孫、字は次山、始め猗玗子と稱す、又浪士と稱し、亦漫郎と呼ぶ、天寶の年、國家に功あり、五十にして卒す。禮部侍郎を贈らる。著はす所「元子」十篇あり。

天曠濔兮杳泱茫 氣浩浩兮色蒼蒼 上何有兮人不測 積清寥兮成元極 彼元極兮靈且異 思一見兮藐難致 思不從兮空自傷 心慳勞兮意惶懷 思假翼兮鸞鳳 乘長風兮上狙 揖元極兮本深實 餐至和兮永終日 天曠濔として杳して泱茫たり、氣浩浩として色蒼蒼たり、上何有る人測らず、清寥を積で元極を成す、彼の元極や靈にして且異なり、一たび見んことを思へども藐かにして致し難し、思へども從はず空しく自ら傷む、心慳勞して意惶懷す、翼を鸞鳳に假て、長風に乗じて上り狙らんことを思ふ、元極を揖して深實に本つき、至和を餐して永く日を終へん。



【句解】 曠濶も汎茫も共に天の廣大にして際限の測る能はざるを言ふ。天寶年は我が邦の元祿に類し、一面には文學が盛にして、一面には風俗頗る頹廢す。是に於て乎結は元極を以て清氣を揚げんとなり。氣は天の氣、浩浩は天の大を言ふ。蒼蒼は天の色を言ふ、而かも天上は如何なるものなるや人智を以て測る能はず、然りと雖も清寥を積んで元極を成すことは容易に知れるなり。而して其の大元無極は靈なるのみならず、亦頗る異常なり。貌は杳藐、此の方へ致すこと能はず、又思ふも従ふこと能はず、是を以て僇勞 即ち煩悶し且惶懼するに至る、恐惶 畏懼は「オソレ」て「ハバカル」なり。是の地上に在て測量するは到底其の眞を知るを得ず、乃ち鸞鳳の翼を假り以て上翺するに如かずと思ふ。孤は飛ぶ聲を言ふ。揖は手を臂に著ること、丁寧を表するなり。元極 即ち天帝を揖して天の天たる深實に本づき、至和を餐して以て日を終へ又年を終へんと冀ふなり。僅僅八十二字の賦、一讀して清氣の溢るるを覺ゆ。茫と蒼と韻、測と極と韻、異と致と韻、傷と懷と孤と韻、實と日と韻なり。

山中人第二十二

山中人は唐の尙書右丞王維が作る所、右丞其の人清高、詩賦及び畫共に皆神品に入る、其の祿山が亂に於て死せざるを議する者あり、其の議する者百千人、一の王維に及ばざるなり、迂腐なる道學者、何ぞ詩人を知らんや。

山寂寂兮無人 又蒼蒼兮多木 彼羣龍兮滿朝 君何爲兮空谷 文寡和兮思深 進難知兮行獨 悅石上兮流泉 與松間兮草屋 入雲中兮養鷄 上山頭

今抱犢 神與棗兮如瓜 虎賣杏兮收穀 媿不才兮妨賢 嫌既老兮貪祿 誓

解印兮相從 何詹尹兮可卜

山寂寂として人無し、又蒼蒼として木多し、彼の羣龍朝に滿つ、君何爲ぞ空谷にある、文和するもの寡うして思深く、進知り難うして行獨り、石上の流泉と、松間の草屋とを悦ぶ、雲中に入て鷄を養ひ、山頭に上りて犢を抱く、神棗を與るに瓜の如し、虎杏を賣て穀を收む、媿らくは不才にして賢を妨ぐることを、既に老て祿を貪ることとを嫌ふ、誓て印を解き相從がはん、何ぞ詹尹に卜ふ可き。

【句解】 山寂寂無人 城中に住する者は多く、山中に住する者は少し、城中は人間としての娛樂多ければなり、山中は世外の幽趣のみなればなり。蒼蒼は樹木の色を言ふ。羣龍は朝廷に滿つる所の賢才を言ふ。然るに君 即ち山中人は何故に出て仕へず、空谷に隱居するや。山中人答て曰く、我が文章は陽春白雪 和する者寡なし、是を以て文思は頗る深し。人に示すも到底解し得る者はあらず。而して進即ち縦令ひ出でたればとて、其の進境は知り難し。行獨 即ち獨行するに及かず。山中には滾滾と流泉の眼を娛しむあり、謾謾と松風の耳を悦ばすあり、乃ち雲中に養鷄し、山頭に犢を牧し、神は山中の神、棗は「ナツメ」仙人は棗を食はず、是を以て惜意なく之を他に與ふること瓜と同様なり。山中の虎は杏「アンズ」を賣て之に代ふるに穀を以てす、山中の生活此の如し。而して自ら媿つ我が才は羣龍の如くならず、縦令ひ出で仕ふるも諸賢の妨害と爲るも、益と爲る能はず、況んや年も既に老ゆ、祿を食ほるの謗あるを嫌ふ。是の故に誓つて解印 即ち官吏たる證據の印綬を朝廷へ返上して、以て山中の人に相從うて遊ばん。是れ我が志なりと決したる以上は詹尹 即ち卜者に其



の吉凶を問ふの要無きなり。木と谷と獨と屋と積と穀と祿と卜と韻なり。

山中人兮欲歸 雲冥冥兮雨霏霏 水驚波兮翠管靡 白鷺忽兮翻飛 君不可兮褰衣 山萬重兮一雲 混天地兮不分 樹陰暖兮氣氳 猿不見兮空聞 忽

山中の人歸らんと欲す、雲冥冥として雨霏霏たり、水驚波ありて翠管靡たり、白鷺忽として翻飛す、君可ずして衣を褰ぐ、山萬重にして一雲なり、天地を混して分たず、樹陰暖として氣氳たり、猿見えすして空しく聞く、忽として山西は夕陽なり、東臯の遠邨を見る、平蕪緑にして千里眇たり、惆悵として君を思ふ。

【句解】

冥冥は窈暗なり。霏霏は細雨なり、「ハラハラ」と降る雨にはあらず。翠管は翠竹なり。靡は靡曼、美なる色なり、水波が驚激して翠竹に打つ景色の美なるを言ふ。其の翠竹の間より唯見る白鷺が忽然として飛ぶ、到底人間の物にあらず、而かも君は人の説を不可として用ひず、衣を褰けて行かんと欲す。而かも山は萬重、其の萬重の山に在て見る所は唯一面の雲あるのみ。天も地も混一にして分判すべからず。陰暖は樹樹籠て暗闇の貌。氣氳は俗語の何とも言の云ふべき無き祥き氣分なるを形容する語、此の氣氳の中より猿聲の漏るを聞くも其の形は見る能はず。而して夕陽は山西に將に入らんとす、而して東臯には一邨落を認む。臯は丘阜、平地よりは高處、而して平蕪、即ち平田は綠青として、千里眇眇たり。此の如く人間と縁の遠き方へ向つて君は赴かんとす、我は惆悵として君を思はざるを得ざるなり。歸と霏と飛と衣と韻、雲と分と氣と聞と陽と邨と君と韻なり。山中人僅僅百六十八字、良に前人の窠臼を脱し、後進の眞諦を示し、一一の文字、雲が太虚に遊び、

一物の障礙するもの無きが如し、一唱三嘆、君子人にあらざれば與に道ふ能はざるなり。

望終南第二十三

晚下兮紫微 悵塵事兮多違 駐駟馬兮雙樹 望西山兮不歸

晩に紫微を下り、塵事の違ふこと多きを悵む、駟馬を雙樹に駐め、青山を望んで歸らず。

【句解】

終南山は陝西の西安府、即ち長安の南に在り、王維が藍田莊より日日之を望む。晩下は晩日に宮禁を退出するなり。紫微は紫微宮、維は尙書右丞の官なれば、朝に上り、晩に下る。悵は惆悵、塵事多違、世間の俗事を塵事と曰ふ、善からうと思ふ事が却て悪しく、悪しと思ふ事が却て善く、此等の事を違多しとなり。駟馬は馬車、退朝の途中にて馬車を雙樹の下に駐めて、以て終南山を望み、我が家に歸を急がずとなり、紫微宮に出仕して居る間は但政務のみ見る、而して退朝に及んで其の塵事の紛紛たるを思はざるを得ず、然るに我が面に當るものは終南山の高秀なるあり、此れを望んで以て我が思を清うすべきのみ。右丞の心事小小の語言に於ても之を見るを得。微と違と歸と一韻なり。

魚山迎送神曲第二十四

坎坎擊鼓魚山之下 吹洞簫望極浦 女巫進紛屢舞 陳瑤席湛清酌 風淒淒兮夜雨 神之來兮不來 使我心兮苦復苦 紛進拜兮堂前 目眷眷兮瓊筵



來不語兮意不傳 作暮雨兮愁空山 悲急管思繁絃 靈之駕兮儼欲旋 倏雲

收兮雨歇 山青青兮水潺湲  
坎坎として鼓を撃つ魚山の下、洞簫を吹て極浦を望む、女巫進み紛として屢舞ふ、瑤席を陳べ清醕を湛ふ、風凄  
凄として夜雨る、神が來るか來らざるか、我が心をして苦で復苦ましむ、紛として進で拜す堂の前、目瓊筵に眷  
眷たり、來れども語らず意傳はらず、暮雨と作て空山を愁ふ、急管を悲み繁絃を思ふ、靈の駕儼として旋んと欲  
す、倏として雲收つて雨歇む、山青青として水潺湲たり。

【句解】 魚山は今日の山東省泰安府に在り、魏の陳思王が梵唄を習得せし山なり。迎送神曲 是の山に於て  
山神を迎送する儀式ありて、維が今其の曲を作る。坎坎は鼓の響音の形容。洞簫は簫の底無きものの説と、未  
詳の説とあり。或は曰ふ玄宗善く之を吹く、長さ二尺五寸、表に四孔ありと。極浦は遠方の浦上を言ふ、神事  
に際し、樂人が種種の樂を奏す。女巫は女にして神を祭る者、紛は其の長き袖が翩翩と舞ふ貌。瑤席は其の祭  
場の莊飾を譬へて言ふ。清醕は美酒なり。凄凄は風の吹き寒き貌。來兮不來 殷勤丁寧に祭る此の如きも、神  
が來臨ありしや、或は來臨せざるや、分明に知る能はず、之を知らんと欲するを以て我が心徒らに辛苦するな  
り。女巫は紛として愈よ進み出て、以て堂前に拜禮す。而して目は他に向はず、一所懸命に瓊筵 卽ち瑤席に  
眷眷たり。是に於てか神の來臨せるは疑ふ所無きも、如何にせん不語なり、不傳なり。口も意も人と人と相  
うて意を叙する如きには及ばず、是の時、目前に見るものは暮雨の來りて空山を鎖すあるのみ、恐らば神は今  
暮雨に乗じて去り給ふならん。其の時起るものは急管と繁絃の聲が激し、管は「フエ」なり筵と同じ、急に吹き

繁く彈す、其の聲や悲、其の思や幽なり。靈駕 神の駕乗。儼然として故宮に旋るならん、其の鳴器の音が止  
めば、倏然として雲も收まり雨も亦歇む、後に残るものは唯山の青青たると水の潺湲たるのみ。下と浦と舞と  
醕と雨と苦と韻、前と筵と傳と山と絃と旋と湲と韻なり。

日晚歌第二十五

日晚歌は唐の著作郎顧況が作る所、蘇州の人、能く歌詩を爲る。性詭譎、王公の貴きと雖も、之と交る者必ず  
之を戲侮す、柳渾と交る、又李泌に遇ふ、李泌己を遇するに樞要を乘らしむべしと期す。既にして著作郎と爲  
る、心樂まず、泌卒するに及んで哭詩を賦せず、嘲笑の詞あり、有司の爲め彈劾せられ、饒州司戸に貶せられ  
て卒す。集二十卷あり。歸來子曰く顧況が楚語は王維と上下す、或は維が及ばざるものありと。歸來子なる者  
王維の人品を論じて、顧況の人品を論せず、奚んぞ維詩と況詩との上下を分つを得んや。

日 宵 宵 兮 欲 歇 老 不 可 兮 更 少 君 胡 爲 兮 輕 別

日宵宵として山を下る、佳人を望めども還らず、花屋上に落ち、草階間に生ず、日日春風あり、芳菲歇んと欲す、  
老は更に少る可らず、君胡爲ぞ別を輕する。

【句解】 宵宵は日將に入らんとして、我が目の暗くなる貌。佳人は意義頗る廣し、達官を望むと解しても、  
相思の人を望むと解しても、知己の人を望むと解しても、又單に希望と解しても妨げ無きなり。日の晩るを見



て以て我が希望の達せしむ、徒らに春を過ぎ、夏と爲り、空しく身の冉冉と老に赴くを慨したるなり。君は日を指して曰ふ。山と還と間と韻、歌と別と韻。

復志賦第二十六

復志賦は唐の韓愈が作る所、愈が一代の文豪、千古の師表たることは言ふの要無し。蓋し其の人多涙多血、國を憂へ、家を憂へ、一賦一詠、虚語に發するもの無し、是の賦、其の自叙に云ふ愈隴西公に從つて汴州を平らぐ、其の明年七月、負薪の疾あり。(家計を整理すること) 退て居に休し、復志賦を作ると、又其の大志を伸る能はざるを慷慨して作るなり。明年は徳宗の貞元十二年なり。

居悒悒之無解兮 獨長思而永歎 豈朝食之不飽兮 寧冬裘之不完 昔余之既有知兮 誠坎軻而艱難 常歲行之未復兮 從伯氏以南遷 凌大江之驚波兮 過洞庭之漫漫 至曲江而乃息兮 逾南紀之連山 嗟日月其幾何兮 攜孤嫠而北旋 值中原之有事兮 將就食於江之南 始專專於講習兮 非詰訓爲無所用其心 窺前靈之逸迹兮 超孤舉而幽尋 既識路又疾驅兮 孰知余之力之不任 考古人之所佩兮 閱時俗之所服 忽忘身之不肖兮 謂青紫其可拾 自知者爲明兮 故吾之所以爲惑 擇吉日余西征兮 亦既造夫京師 君之門不可逕而入兮 遂從試於有司 惟名利之都府兮 羌衆人之所馳 競

乘時而附勢兮 紛變化其難推 全純愚以靖處兮 將與彼而異宜 欲奔走以及事兮 顧初心而自非 朝聘驚乎書林兮 夕翱翔乎藝苑

悒悒たるの解ること無きに居て、獨長へに思つて永歎す、豈朝食の飽かざらんや、寧ろ冬裘の完からざるならんや、昔余が既に知ること有しとき、誠に坎軻にして艱難なり、歲行の未だ復せざるに當て、伯氏に從つて以て南遷す、大江の驚波を凌ぎ、洞庭の漫漫たるを過ぐ、曲江に至りて乃ち息つて、南紀の連山を逾たり、嗟日月其れ幾何ぞ、孤嫠を攜て北旋す、中原の事あるに値て、將に食に江の南に就かんとす、始て講習に專專たり、詰訓にあらざれば爲に其の心を用ゆる所無し、前靈の逸迹を窺つて、超として孤舉して幽尋す、既に路を識て又疾驅す、孰か余が力の任へざるを知らん、古人の佩ぶる所を考て、時俗の服する所を閱る、忽ち身の不肖なるを忘れ、青紫其れ拾ふ可しと謂へり、自ら知る者を明なりと爲す、故に吾が惑を爲す所以なり、吉日を擇んで余西征し、亦既に夫の京師に造る、君が門逕ちに入る可らず、遂に試に有司に從ふ、惟名利の都府にして、羌衆人の馳る所、競つて時に乗じて勢に附く、紛として變化し其れ推し難し、純愚を全うして以て靖處し、將に彼と宜を異す、奔走して以て事に及んと欲すれば、初心を顧みて自ら非なりとす、朝に書林に聘驚し、夕に藝苑に翱翔す。

【句解】 悒悒は不安の貌と注して憂を抱くを言ふ、平安にして樂むの反對。無解 憂心が結んで解げざるなり。然らば汝は衣食の飽完ならざるを以て斯く憂ふるならんと譏る者もあらんが我が本心は決して衣食の爲めに憂ふるにあらず、既有知は年既に歳と麥とを辨知する頃、坎軻は即ち艱難にして、艱難は即ち坎軻なり、不幸にして辛苦したり。歲行は子より亥に至る十二年にして元へ復る、是の十二支が一度回るを復と曰ふ。然らば



未だ十二年を経過せざる内にとなり。伯氏は文公が父の兄、文公よりすればソウリヤウチヂならん。文公は南陽縣鄧州の人、今日の河南省に屬す、固より南方の人、然るに娶に南遷して大江、即ち揚子江を渡り、娶に洞庭湖を越え、曲江に至り、南紀、即ち南方の國の山は悉く逾えたるなり、此の間の事を總て坎軻艱難と云ふなり。日月幾何、坎軻艱難の際に空過せし日月は幾何なるを知らずと残念に思ふなり。孤嫠は寡婦なり、文公の母ならん。先儒之を行李と解したるは何の意たるを知らず、南を去て北に旋る。中原は即ち長安、玄宗、肅宗、代宗と此の間の争亂絶えずして今に至る。而して自ら願ふ所は江南に於て衣食の計を爲さんと。乃ち諸生を集めて講習に専專、曾て他事を交へず、其の講習する主義は、専ら詁訓の學に依る、詁は故言即ち漢代の學者が説く所の義を教へ、以て訓育するなり。訓は教なり誠なり、男に教と曰ひ、女に訓と曰ふが各別の解、人を訓ふるに何ぞ必ず奇説、何ぞ必ず新説、何ぞ必ず新説、奇惟新の説を吐いて人の子を賊せんよりは前靈、即ち先哲の教を以て逸跡と爲し之を以て我が用心と爲す。而かも自身は何ぞ必ず古人の糟粕を甘しとするならん。超として孤舉、他人に關せず。幽尋、研討して學問に努力する。既にして路を識る、之を實行せざるべけんや、疾驅する所以、而して人は我が力の及ばざることを爲すと思ふ者もあらん。考古人之所佩、一番人の目に留る者は服妝なるを以て佩を出して以て榮達に譬ふ。一は古人にも美麗なる佩を帶るあり、一は時俗、即ち今日の常人が服する所を關る、是れ程易たる事はあらずと思ふ。而して此の間に身の賢不賢を省察せざるなり。謂青紫、青佩も紫服も、塵土の如し、在在拾得すべしと謂へり。而かも此の謂たるや暗昧、能く自己の分際を知らざるの致す所、畢竟自ら惑はざるを得ず。是に於てか吉日を選択して娶に西征して、京師、即ち長安に造

る。長安に造ると言へ、逕に宮内の官吏と爲るを得ず。故に有司、即ち試檢官に就て資格を得んと試檢に應じて出づ。而して又謂ふ京師は名利を争ふ者の都府にして眞に道を行ふ都府にあらず。衆人、即ち普通の俗人共は名利の爲め奔馳し、何かの機會に乗じて以て權勢に有り附かんとする輩のみ多し。故に今日は友、明日は敵と千變萬化極り無し。此等の輩の爲す所を目撃すれば、試檢に及第したからとて正道を行ふことは甚だ難し。故に純愚を全うして、以て自己を靖處せんに如かず。彼と我と道を異にすればなり。奔走して要路の門に入て叩頭すれば、我に利益はあるならんが、其れは初心、即ち我が素志と反對するを以て自ら非なりと定む。騁騫も翺翔も意義同じ。書林も藝苑も意義同じ。前事の非なるを知てより、今度は朝夕に唯文章の林苑に力を勞せんとなり。永歎の歎より不任の任に至るまで一韵、服と拾と惑と韵、師と司と馳と推と宜と韵、苑と遠と韵。諒却歩以圖前兮、不浸近而逾遠、哀白日之不與吾謀兮、至今十年其猶初、豈不登名於一科兮、曾不補其遺餘、進既不獲其志願兮、退將遁而窮居、排國門而東出兮、慨余行之舒舒、時憑高以回顧兮、涕泣下而交如、辰洛師而悵望兮、聊浮遊以躊躇、假大龜以視兆兮、求幽貞之所廬、甘潛伏以老死兮、不顯著其名譽、非夫子之洵美兮、吾何爲乎浚之都、小人之懷惠兮、猶知獻其至愚、固余異於牛馬兮、寧止乎飲水而求芻、伏門下之默默兮、竟歲年以康娛、時乘閒以獲進兮、顏垂歡而愉愉、仰盛德以安窮兮、又何忠之能輸、昔余之約吾心兮、詎無施而有獲、嫉貪佞之汚濁兮、曰吾其既勞而後食、懲



此志之不修兮 愛此言之不可忘 情怛悵以自失兮 心無歸之茫茫 苟不內  
得其如斯兮 孰與不食而高翔 抱關之阨陋兮 有肆志之揚揚 伊尹之樂於  
畎畝兮 焉富貴之能當 恐誓言之不固兮 斯自訟以成章 往者不可復兮  
冀來今之可望

諒に歩を却けて以て前んことを圖る、浸近せずして逾よ遠し、白日の吾と謀らざるを哀む、今に至りて十年其れ猶ほ初のごとし、豈名を一科に登げざらんや、曾て其の逋餘を補はず、進で既に其の志願を獲ず、退きて將に遁れて窮居せんとす、國門を排して東に出づ、余が行の舒舒たるを慨す、時と高に憑て以て回顧し、涕泣下て交如たり、洛師に戻て悵望す、聊か浮游して以て躊躇す、大龜を假て以て兆を視、幽貞の慮る所を求む、潛伏して以て老死して、其の名譽を顯著せざるを甘ず、夫子の洵に美なるにあらずんば、吾何ぞ浚の都に爲ん、小人の恵に懷く、猶ほ其の至愚を獻するを知る、固に余が牛馬に異なる、寧ろ水を飲で芻を求むるに止んや、門下に伏して黙黙、歳年を竟へて以て康娛す、時に閒に乗じて以て進むことを獲れば、顔歡を垂れて愉愉たり、盛徳を仰いで以て窮を安す、又何の忠か能く輸ん、昔余が吾が心に約する、詎ぞ施する無うして獲るあらん、食佞の汚濁なるを嫉んで、吾其れ既勞して後食んと曰ひき、此の志の修めざるに懲り、此の言の忘る可らざることを愛す、情怛悵として以て自失す、心歸こと無うして茫茫たり、苟も内に得ざる其れ斯の如くならば、食まずして高く翔るに孰與ぞや、抱關の阨陋なる、志を肆にして揚揚たる有り、伊尹が畎畝に樂むは、焉ぞ富貴も能く當らん、誓言之の固ざるを恐る、斯に自訟して以て章を成す、往者は復すべからず、來今の望む可きを冀ふ。

【句解】却步圖前 世の中と歩を同じうせざるのみならず、反對に自分は却きつつあつて、而かも前進を圖るが如き状態に在り、近からんと欲して而かも遠き所以、而かも白日は吾が爲めに一日も緩うせず、是を以て十年の歲月を経て我猶ほ依然たり。不登一科 文章なり詩賦なりの一科を選んで登第する位は難からず、而かも一科位登第したからとて、今日に至る迄の負債を償却するを得んや。不補は負債償却する足しにならざるを言ふ。逋は人より錢物を借り、償還する能はず、亡け置れて居ることなり。況んや其の登第の志願を果さざるに於てをや。及かず退き去て貧諸生として固の窮居に住せんにはと。排國門は長安の都門を去り而して東方の方に出づ。舒舒は緩緩と同じ、前路目的あるにあらず、是を以て其の行や舒舒たり、其の行路に當り高處に到れば以て回顧する。交如は兩眼より涙が垂れたるを曰ふ。戻は造るなり。洛師は洛陽、陝西の長安より歸るには必ず河南の洛陽を経ざるべからず。悵望は眺望と異る、悵然として望むなり。浮遊躊躇 志を得ざるの人、タチモデルは固より其の所。大龜は占卜なり、卜して兆を視れば、幽貞所慮の卦を得たり、幽人の貞は退くに宜し、出るに宜しからずとなり。潛伏して我が名を顯はさず、以て老い以て死するも甘んずる所。夫子は隴西公董晉を指す。洵美 夫子が如き美徳を備ふる人にあざれば、如何ぞ吾が如き者を其の城都に招かんやとなり。浚は『毛詩』に在浚之下とあり、浚は周代の衛なり、今日の河南省に屬す。隴西は郡涼州今日の甘肅省に屬す。或は曰ふ浚稽山の名、武威の北に在りと。武威郡の北、即ち浚と定むれば隴西なるべし。小人之懷惠 猶知獻其至愚 市井無學の人でも、恩恵を受くれば、愚は愚だけの精一杯を酬ゆるを知る、余が至愚なるも牛馬に異なる、牛馬なりせば唯水を飲み芻を求むるに止るのみ、別段に主人の恩義を受くると思はざるべし、



我唯飲水求芻の恩を思はざるのみならず。門下に寄食して何等の功も成さずして黙黙、一年も二年も只管に康娛なり。時あり間に乘じて進調を獲ん場合にも、夫子の歡顔、我亦亦愉愉たるを禁ぜず。夫子が盛徳を瞻仰して以て我が窮を安ず、此の間に何等の忠も致さず、輸は「オクル」「イタス」なり。約吾心、吾と吾と自ら昔し誓ふ。無施有獲は乞丐の徒のみ、受けたなら、受けただけの事を酬うるが人なりと知る。嫉貪佞之汚濁、貪人や佞人は眞實の力を以てせず、巧言令色を以て生活を計らんとす、其の心事の汚濁を吾は嫉む者なり、故に吾は吾がベストを盡くして而して後衣食せんと志たり、是れ特立獨行の士なればなり。而かも此の志を修養する能はずして、徒らに受恩の身と爲る。而かも此言の忘れざることを自愛し。惛悵は失意の貌と注す、悲恨なり。情は自失、心は茫茫。不内得、我が思ふ所を實行し得ざるを言ふ。思ふ所を實行し得ずして斯の如き我輩と、食まずして高翔する人、即ち死すとも周の粟を食はずと誓ふ人と、孰與が勝れるや。抱關は「孟子」萬章章句下に抱關擊柝の語あり、關守と夜警吏とは位卑く祿薄ものなり。陋陋は貧吏なれば言ふ、蓋し賢者にして此の下役の事を爲すを言ふ、而かも肆志、此の下役に在て恨ず、憤らず、我が志を肆にして以て氣象は揚揚たり、煩悶する如き態はあらず、孔子が委吏の下役に爲るの類はれなり。今孔子を言はじて伊尹を擧ぐ、既に隴西公を以て夫子の名を與ふ。茲に孔子を出すの不倫なるを知る、故に伊尹を出し孔子を出さず、伊尹の賢を以てすら吠吠の卑事を樂しむ。其の樂むや、富貴の人間も當る能はざるの概あり、愈も亦其の誓ふ所は茲に在り。自訟以成章、章は即ち是の「復志賦」なり。往者、過去の事は如何とすべからず、未來の事は其れ希望すべし。遠と苑と韻、科と餘と居と舒と如と蹠と盧と譽と都と韻、愚と芻と娛と愉と輸と韻、獲と食と韻、忘と茫と翔

と揚と當と章と望と韻なり。韓文公は孟子を尊崇したるの人、此等の賦孟子より脱化し來ること明明了了、讀者細心注意すべし。

閔己賦第二十七

閔己賦は韓愈が作る所、晁氏曰く愈汴州を去て寧武の張建封に依て府の推官に辟さる。鯁直を以て稱せらる。後監察御史に遷る、上疏して宮市を極論す、(徳宗が禁中に市を設け女郎をして商法を行はしむ) 徳宗怒て陽山の令に貶す、時貞元十八年なり。憲宗即位、召して國子博士と爲す、職方員外郎に遷る、柳澗が事を論するに坐して復博士と爲る。此の如く數擯斥せられ、頽る自ら傷む、乃ち是の賦あり、讀者亦悲しまざるを得ず。余悲不及古之人兮、伊時勢而則然、獨悶悶其曷已兮、憑文章以自宣、昔顏氏之庶幾兮、在隱約而平寬、固哲人之細事兮、夫子乃嗟嘆其賢、惡飲食乎陋巷兮、亦足以頽神而保年、有至聖而爲之依歸兮、又何苦不自得於艱難、曰余昏昏其無類兮、望夫人其已還、行舟楫而不識四方兮、涉大水之漫漫、勤祖先之所貽兮、勉汲汲於前修之言、雖舉足以蹈道兮、哀與我者爲誰、衆皆捨而已用兮、忽自惑其是非、下土茫茫其廣大兮、余豈不知其可懷、就水草以休息兮、恒未安而既危、久拳拳其何故兮、亦天命之所宜、惟否泰之相極兮、咸一得而一違、君子有失其所兮、小人有得其時、聊固守以靜俟兮



誠不及古之人兮其焉悲

余古之人に及ざるを悲む、伊時勢にして則ち然り、獨悶悶として其れ曷已ん、文章に憑て以て自ら宣ぶ、昔顔氏が幾を庶へる、隱約に在ても平寛たり、固に哲人の細事なれども、夫子乃ち其の賢を嗟嘆す、飲食を陋巷に悪くするも、亦以て神を廟ひ年を保に足れり、至聖ありて之が依歸と爲る、又何ぞ苦んで艱難に自得せざらんや、曰に余昏昏として其れ類無し、夫の人を望むに其れ已に還れり、舟楫を行て而かも四方を識ず、大水の漫漫たるを渉る、祖先の賄す所を勤めて、勉めて前修の言に汲汲たり、足を擧げて以て道を蹈むと雖も、哀らくは我に與する者は誰と爲す、衆皆捨て己用ふ、忽ち自ら其の是非に惑ふ、下土茫茫として其れ廣大なり、余豈其の懐にすべきを知らざらんや、水草に就て以て休息せんとすれば、恒未だ安からずして既に危し、久拳拳すること其れ何が故ぞ、亦天命の宜き所、惟否泰の相極る、咸一は得て一は違ふ、君子其の所を失ふことあれば、小人其の時を得ること有り、聊か固く守て以て靜かに俟ん、誠に古の人に及ばざるも其れ焉んぞ悲まん。

【句解】

悶は傷悶、「イタム」なり。己は自己なり、才不才は古今非常に異なるにあらず、時勢に因て用不用あるのみ。而かも吾は悶悶 己能はず、乃ち文章に憑て志を宣ぶべし。顔氏は顔回、庶幾は希望なり。隱約は隱居し、節約なり。平寛 心が平和にして悠寛。哲人として衣服の敝れ、食物の悪き、住處の陋し、皆是れ瑣細の事に屬す、精神を願養して以て天年を保つに足る、況や顔回は自ら賢なる上に、至聖 即ち孔子の如き依歸すべき人の側に在り。艱難に自得せずして可ならんや。昏昏は明明の反對、闇冥を曰ふ。無類は類る所無きなり。夫人は君を指す、類る所の人を望むも、其の人は已に還る、還る所は舟楫に依て水を渉る、追ふべき

別知賦第二十八

に由無し、乃ち自身は祖先が賄す所の書を勤讀して、前修 即ち前人が修めし言に於て汲汲と其の道を知らんことに勉む。舉足蹈道 一所懸命に正道を踏まんとすと雖も、我と志を與にする者は一人も無し。衆皆斯の道を捨て顧みず、己一人のみ古道を用ふ。而かも其の是非に惑ふことあり。天地は茫茫として廣大なり、以て我が懷中に入れんとするの能はざるを知る。さらばとて水草は休息すべきものにあらず。若し之に休息すれば身は既に危し。拳拳は勤勤と同じ、「ツトムル」なり。多くの人は舍てたるに我獨り用て勤勤たるは果して何の故ぞ。是れ天命の所宜 深く疑ふ所にあらず。否 即ち物の塞がる、泰 即ち運の開く、而して一は得、一は違、君子否なれば小人泰、小人否なれば君子泰、循環の理、固より然るのみ、是の理を悟るときは靜に時を俟を可とす。古人に及ばずと雖も、亦悲しむ所にあらずとなり。宣と寛と賢と年と難と還と漫と言と韻、誰と非と懷と危と宜と違と時と悲と韻なり。

韓愈宮市を論じて陽山に貶せらるるの明年、楊儀之、湖南の支使と爲り、使を以て來る、愈儀之を愛して謂ふ、智は以て謀を造すに足り、才は以て事を立るに足り、忠は以て上に勤むるに足り、惠は以て下を存するに足る。又之を修にするに詩書六藝の學を以てす。宜しく其れをして是の府に従事して、聲實を天朝に流すべしとなり。此を以て宣州の李博崔、羣賓生謂らく己以て邑長と爲し、斯に於て夫の人に媚る者の比に非すと。愈自ら謂ふ儀之を知る、故に其の別に於て此の賦を爲ると。



余取友於天下 將歲行之兩周 下何深之不即 上何高之不求 紛擾擾其既多 咸喜能而好修 寧安顯而獨裕 顧阨窮而共愁 惟知心之難得 斯百一而爲收 歲癸未而遷逐 侶蟲蛇於海陬 遇夫人之來使 關公館而羅羞 索微言於亂志 發孤笑於羣憂 物何深而不考 理何隱而不抽 始參差以異序 卒爛漫而同流 何此權之不可恃 遂駕馬而回轡 山礧礧其相軋 樹蓊蓊其相縈 雨浪浪其不止 雲浩浩其常浮 知來者之不可以數 哀去此以無由 倚郭郭而掩涕 空盡日以遲留

余友を天下に取ること、將に歲行の兩周ならんとす、下何の深としてか即かざらん、上何の高としてか求めざらん、紛として擾擾其れ既に多し、咸能を喜で修を好む、寧ろ安顯にして獨裕ならん、阨窮を顧て愁を共にす、惟心を知るの得難き、斯れ百に一にして收ことを爲す、歲癸未にして遷逐せられ、蟲蛇に海陬に侶なふ、夫人の來使に遇て、公館を關て羞を羅ぬ、微言を亂志に索め、孤笑を羣憂に發す、物何の深してか考へざらん、理何の隠たりとしてか抽けざらん、始めには參差として以て序を異にし、卒には爛漫として流を同うす、何ぞ此の權の恃む可らざるや、遂に馬に駕して轡を回す、山礧礧として其れ相軋り、樹蓊蓊として其れ相縈ふ、雨浪浪として其れ止まず、雲浩浩として其れ常に浮ぶ、來者の以て數すべからざるを知て、此を去らんこと以て由なきを哀しむ、郭郭に倚て涕を掩ふ、空しく盡日にして以て遲留す。

【句解】 友を天下に求めて茲に二年に垂とす。深處に在る者、高處に在る者、皆即き求めざるは無し。援援

として其の人や多し、而かも多くは其の能 其の修を自ら以て得意とし、他の君子と道を談ぜんと思す者は無し。安顯にして獨裕の徒のみ、阨窮に際し、其の愁を共にし、面を知らざるも其の心を知るの者は百人に一人を得るのみ。歲癸未は德宗の貞元十九年。遷逐は左遷放逐、即ち陽山に貶せられしを言ふ。陽山は「唐書」には連州山陽とあり、今日の河南湖北の間なり。侶は伴侶。蟲や蛇の多きは未開の地を證明す。夫人は儀之を指す。夫の人の調し來る、願る我が慰安と爲る所、是の故に公館を關きて以て羞 即ち馳走を作す。索微言於亂志 儀之の曰ふ我が心志は良に不安の状態にあり、是を以て先生の一言を得て其の不安を去るを冀ふとなり。羣憂も儀之が憂ふるなり。羣は多の意味なり。憂の多き中にも先生の教を得て亦孤笑を爲すの樂を求むと。物何深以下は韓が儀之に示す語なり。如何に深妙の道理なりとて考へ得ること無く、如何に幽隱なる文義なりとて抽出し得ざること無し。參差は「チグハグ」なり。異序 順序を不同にするも、卒には爛漫 即ち文章の辭彩が整美して同流す。此權は夫人に遇ふの權、久しうする能はされば不可恃と曰ふ。軋は音「チウ」訓「ナガエ」馬車の轆なり、馬車を馳て山路を行く。礧礧は山路の形容。蓊蓊は樹色の暗き貌。浪浪は雨聲の多きなり。浩浩は雲氣の多きなり。縈は樹木が左右より相縈束するなり。不可以數 生別死別、再會を期すとも、其れ或は能はずとなり。郭郭は「クルワ」「サト」なり、城の總廓の構なり。周以下留に至る一韻なり。文公は三歳にして孤と爲る。而して流離頭沛、刻苦して學を勉め一代の文宗と爲る、豈此の良友を求むるの念無からんや。

訟風伯第二十九



訟風伯は韓愈が作る所、晁氏曰く早は以て時澤の下流せざるに喩ふ。風は以て小人の實に此の厲を爲すに比す、雲は以て君子に惚ふ、施せんと欲して得べからず、夫の此の厲を爲す者の之を聞するを以てなり。此れ楚辭なり。

維茲之早兮其誰之由 我知其端兮風伯是尤 山升雲兮澤上氣 雷鞭車兮電搖幟 雨寢寢兮將落 風伯怒兮雲不得止 陽鳥之仁兮念此下民 闕其光兮不鬪其神 嗟風伯兮其獨謂何 我於爾兮豈有其他 求其時兮修祀事 羊甚肥兮酒甚旨 食足飽兮飲足醉 風伯之怒兮誰使 雲屏屏兮吹使醜之 氣將交兮吹使離之 鑠之使氣不得化 寒之使雲不得施 嗟爾風伯欲逃其罪其又何辭 上天孔明兮有紀有綱 我今上訟兮其罪誰當 天誅加兮不可悔 風伯雖死兮人誰爾傷

維茲の早る其れ誰が由や、我其の端を知れり風伯是れ尤なり、山は雲を升せ澤は氣を上す、雷は車に鞭ち電は幟を搖す、雨寢寢として將に墜んとす、風伯怒て雲止ることを得ず、陽鳥の仁なる此の下民を念ふ、其の光を闕ちて其の神を鬪しめず、嗟風伯其れ獨り何とか謂ふや、我爾に於て豈其の他あらんや、其の時を求めて祀事を修む、羊甚だ肥て酒甚だ旨し、食飽くに足り、飲醉ふに足る、風伯の怒ることは誰が使う、雲屏屏たるは吹て醜しむ、氣將に交らんとし吹て離れしむ、之を鑠て氣をして化することを得ざらしむ、之を寒して雲をして施すことを得ざらしむ、嗟爾風伯其の罪を逃んと欲すとも其れ又何の辭があらん、上天孔明が紀あり綱あり、我今上

訟せば其の罪誰か當らん、天誅加へば悔べからず、風伯死すと雖も人誰か爾を傷ん。

【句解】 早は雨ふらざるなり。誰之由は誰の責任ぞの意。其の責任は我を以て言はしめば、風伯が其の責任者であるなり。山雲澤氣を自由にし、雷車電幟を驅役し、幸にして雨が寢寢として墜ち來れば、風伯が怒るに依て、雲が飛散する、雲が飛散すれば、雨も亦降ることを中止す。陽鳥は「春秋元命苞」に陽の數に一に起り、三に成る故に日中に三足の鳥ありと。彼の陽鳥は元來仁慈にして此の下民を憫念するものなり。是の故に其の主人公なる太陽の光を闕して以て其の神を鬪はしめざるを欲す。其の神が鬪ふに依て早天するなり。其の神鬪はざるときは雨師來る、我は其の雨師を喚んと欲す、然るに風伯は此等の事を微塵も謂はず、妄に自我を主張するは惟しからぬ奴なり、我は平生爾に於て恩を施する所以のものは他意あるにあらず。五日に一風を望めばなり。故に祀事、爾の爲め珍羞佳肴を備て我が意を竭せり。羊肉も善肥、酒味も美旨、乃ち食は十分に飽かしめ、飲も亦十分に取らしむ、然るに爾が怒るは其の意を解するに苦しむ、察するに誰か爾を怒らす者のあるならんと、而かも爾を怒らす者は有るにあらず、爾が自身で怒るなり。雲が屏屏即ち掩ひ重ならんとすれば、乃ち之を吹き飛ばして其の勢を醜からしめ、雲勢を凌鑠するに因て、雲と雨と調和するの事を得ざらしむ。雲をして其の術を施すに由なからしむ。其れ此の如くならしむるの罪は風伯に在るなり。其の早天の責任を爾に問ふも、爾は辭の以て之を辨するあらんや。而かも上天は孔明なり、私心無し、紀あり綱あり、惡を罰し、善を賞するの紀綱は極めて正し、是を以て我其れ爾が罪を上天に訟ふ、上天は必ずや罪を罰し玉ふならん。輕罰なら已なん。或は死罪に處せらるる場合に至るも、誰か爾の爲めに之を憫傷する者あらん。時の小人を以て風伯



の名に托して言ふこと知る可し、由と尤と韻、氣と職と墜と止と韻、民と神と韻、何と他と韻、事と旨と醉と使と韻、醜と離と施と辭と韻、綱と當と傷と韻なり。

弔田横文第三十

晁氏曰く弔田横文は韓愈が作る所、愈大志ありて、世の爲めに知られず、故に行て田横が墓を經、其義高く能く士を得たるを感じ、酒を取て横を祭り、文を爲り以て之を弔す。時を傷み、古を思ひ、慨然として復見る可らざるの意あり。然かも田横は道ふに足らず、故に其の言に曰く今世の希なりとする所にあらず、孰爲ぞ余をして歎歎して禁ふべからざらしむと。夫れ唐の宰相董晉が如き、亦言ふに足らず。而して晉汴州と爲て、纔かに愈を奏して従事せしむ。愈終始遇せらるることを感じて、語に隴西公と稱して姓を以てせず、後裴度に従つて亦自ら謂ふ知己なりと。然れども度亦終に愈を引て天下の事を共にせず、古より文學を以て世名を擅にする者、世之を忌で、率大柄を得ず、世名ありと雖も、世の知らざるを如ん。故に愈躊躇して憤を發し、區區の横に大息して以謂らく夫れ苟くも横が士を好むが如くせば、天下將に五百人より賢る者至るあらんとすと。

事有曠百世而相感者、余不自知其何心、非今世之所希、孰爲使余歎歎而不可禁、余既博觀乎天下、曷有庶幾乎夫子之所爲、死者不復生、嗟余去此其從誰、當秦氏之敗亂、得一士而可王、何五百人之擾擾、而不能脫夫子於劍鉞、抑所寶之非賢、亦天命之有常、昔闕里之多士、孔聖亦云其遑遑、苟余

行之不迷、雖顛沛其何傷、自古死者非一、夫子至今有耿光、踞陳辭而薦酒、魂髣髴而來享

事百世を曠うして相感する者あり、余自ら其の何の心といふを知らず、今世の希とする所にあらず、孰爲ぞ余をして歎歎して禁ふべからざらしむる、余既に博く天下を觀る、曷ぞ夫子が爲す所を庶幾あらん、死者復生せずんば、嗟余此を去て其れ誰に従はんや、秦氏が敗亂せしに當ては、一士を得ても王たる可し、何ぞ五百人の擾擾たる、而かも夫子を劍鉞に脱すること能はざるや、抑も寶とする所の賢にあらざるか、亦天命の常あるか、昔闕里の多士なりしも、孔聖も亦云ふ其れ遑遑たりと、苟も余行ふことの迷さらば、顛沛と雖も其れ何をか傷ん、古より死者一にあらず、夫子今に至りて耿光あり、踞て辭を陳し酒を薦む、魂髣髴として來り享よ。

【句解】

田横は齊の人、其の徒五百人と海島の中に逃る、漢の高祖己を誅せずと聞て、來り謁し、既にして其の生くべからざるを知りて自刎す。高祖曰く夫れ布衣より起つて、兄弟三人、(田儻、田榮、田横)嬰王たり、豈賢ならざらんや。之が爲め流涕す。亦五百人の徒、海島に在り、横が死を聞て皆自殺す。太史公曰く横が高節、賓客義を慕うて横に従つて死す、豈至賢にあらずや。晁氏なる者彼何者ぞ王維を罵り韓愈を議し、横をも道ふに足らずと、朱子亦何人ぞ、此の晁氏が言を是なりとして一一其の説を取る、隨時に狂を發して致す所、深く咎めずと雖も、大人君子が賞嘆する所の者に於て一分でも瘡癢を與へんとす、陋劣と謂ふ可し。曠は間を虚ての意、漢代より唐代に至る間に田横が事に於て相感の甚しきは我なりと暗に横が知己は我一人なりと許すなり。而かも如何なる心を以てなるやは我も亦自ら知らず、然とも今日現在に此の事多く見るに於ては、敢て其



の自劉の事を歎歎ナゲクに足らざるが、實は古も今も多くあらざることなるを以て我は歎歎を禁ぜざるなり。余既に方今の天下を觀る。夫子 卽ち田横が所爲に庶幾ニタル者あらんや、我は獨り君を慕ふ、而かも君は既に死して再生すべからず、我は君に従はんと欲するも能はず。然かも他に去て誰に従んと欲するも、其の從ふべき人物は今世に無しとなり。サテ君が事を思ふに秦の世が已に敗亡に歸し、漢と楚と争ふの間に在て、苟も一士の力ある者を得ば、與に以て天下に霸たるべし。何ぞや君は五百人も援擥と部下を撫養しながら、君が劍鉞の下に自劉するを救ふ能はざる底の愚人共の多きは良に憐べしとなり。五百人の者共は但養れたる故、其の恩義に感じて死せしのみ、犬が主人の恩に感じて主人が死せしとき、己も食はずして死せしと何ぞ擇ばん、死せしとて一概に賢とは言へざる也。若し然らずとせば天命の免るる能はざる所か。闕里は孔子が住處、孔子に隨從する者、十哲の三千人のと多士なりしも、孔子は其れ等の人に馮て安泰たるを得ず。東西南北に違違たるを見れば、五百人の人が君を救ふ能はざりしことも無理ならずとも再思すとなり。一揚一抑、文の妙を極む。余が行履の惑迷ならざるに於ては、顛沛は傾覆と同じ、難儀すること。悉く天命有常に歸す、難儀するとも余が行正かりせば、何の傷む所かあらん。死者非一は生者は必死と同義なり、死者の多くは腐朽して、誰も千年名を説く者無し、唯獨り田横夫子は今に於て耿耿と光明あるは乃ち高節の致す所ならん。蹠は跪と同じ、跪拜すなり。乃ち墓前に酒を薦め之を祭る。魂は無形なり。髣髴は無形にして有形を意味する。心と禁と韻、爲と誰と韻、王と鉞と常と暹と傷と光と享と韻なり。

享羅池第三十一

享羅池は韓愈が作る所、晁氏曰く愈柳宗元と善し、宗元柳州刺史たり。且に死なんとす、其の常に與に遊ぶ所の者に語て曰く、吾此に謫せられ、若等と相好し、明年吾當に死すべし、死して神と爲らん。若等我を祀れと。期の如くにして。歿して羅池の神と爲て、且能く靈響を動す、愈宗元を傷んで銘を爲り以て其の事を實にす。唐の史臣之を非なりとす。夫れ神は知るべからず。孔子酒ち語らず。然りと雖も此れ羅池神に銘する文にあらす、宗元を弔するの文なり。

享

羅

池

荔子丹兮蕉黃 雜肴蔬兮進侯堂 侯之船兮兩旗 度中流兮風泊之 待侯不來兮不知我悲 侯乘駒兮入廟 慰我民兮不嘔以笑 鵝之山兮柳之水 桂樹團團兮白石齒齒 侯朝出遊兮暮來歸 春與猿吟兮秋鶴與飛 北方之人兮爲侯是非 千秋萬歲兮侯無我違 福我兮壽我 驅厲鬼兮山之左 下無苦濕兮高無乾 稭稌充羨兮蛇蛟結蟠 我民報事兮無怠 其始自今兮欽于世

荔子丹して蕉黃なり、肴蔬を雜へて侯堂に進む、侯が船に兩旗あり、中流を度て風之を泊む、侯を待ども來らず我が悲を知らず、侯駒に乗て廟に入る、我が民を慰して嘔せず以て笑しむ、鵝の山柳の水、桂樹團團として白石齒齒たり、侯朝に出て遊び暮に來り歸る、春は猿と與に吟じ秋は鶴と與に飛ぶ、北方の人侯が是非を爲す、千秋萬歲侯我に違ふこと無かれ、我を福し我を壽うせよ、厲鬼を驅れ山の左に、下は濕に苦むこと無からしめ高は



乾くこと無からしめよ、稭稌は充ち養て蛇蛟は結蟠せしめよ、我が民事を報て怠ること無からん、其れ今より始めて世世に欽まん。

【句解】 荔子の丹色、蕉實の黄色、之に肴蔬とを雜て以て柳子を祀る堂に供ふるなり。侯の字を付するは諸侯の扱を爲せばなり。土地を守るの神、侯を以て稱するなり、既にして侯が神靈は船に二本の旗を樹て、中流を度りて泊るもの如し、我は侯を待つや久しきが侯は來らず、是れ我が悲を知らざるもの如し。然るに侯は水上より來らず陸上より駒に乗じ來りて以て廟に入るを認む、我が州民を慰撫し嘸せしめずして、以て笑はしむ。鵝州の山。柳州の水。桂樹は團圍として秀。白石は齒齒として美。春秋の遊びは如何、或は猿猶、或は鴻鶴、會て俗人を此の間に容れず。北方人は時の史官即ち都城に在る人。是非を爲すは即ち其の才の高きを忌めばなり。千秋萬歳は「イツマデモ」なり。我 即ち韓愈とは違背すること無かれ、違背すること無くんば、福壽を以て我に與へよ。厲鬼は邪毒なり。幸に我をして邪毒の病に罹ること無く、下地は濕苦し、高地は乾苦するは普通なり、願くは此れをも安排し、其の憂無からしめ、稭稌「モチヨネ」は倉に充滿し。蛇蛟の如き毒蟲は結蟠して活動の出來ざる様に守られたく、然るときは州民は其の事を報じて懈怠すること無く、千秋萬歳永く欽仰せんとす。黃と堂と韻、旗と悲と韻、廟と笑と韻、水と齒と韻、歸と飛と非と韻、我と左と韻、乾と蟠と韻、怠と世と韻なり。

琴操第三十二

琴操は韓愈が作る所。晁氏曰く愈博く羣書を學び、奇辭奧義、諸を室中の物に取るが如し、其の渉る所博を以ての故に能く約して之を爲るなり。夫れ孔子三百篇に於て皆之を弦歌す、操も亦弦歌の辭なり。其の興を取ることに幽眇にして、怨んで言はず、最も離騷に近し。騷は本古詩の衍せるもの、漢に至りて衍すること極まる。故に離騷琴操詩賦と同じく出て名を異す、蓋し衍の約に復るものなり。約なり、故に古を去ること遠からず。然らば則ち後の離騷を爲らんと欲する者は唯約猶ほ之に近し。十操中に於て其の四を取るは楚辭(離騷)に近きを以てなり。其の六首を刪るは詩なればなり。

將歸操孔子之趙聞殺鳴犢作

秋之水兮其色幽幽 我將濟兮不得其由 涉其淺兮石齧我足 乘其深兮龍入

我舟 我濟而悔兮將安歸尤 歸兮歸兮無與石鬪兮無應龍求

將歸操は孔子趙に之き、鳴犢を殺すを聞て作る。

秋の水其の色幽幽たり、我將に濟んとして其の由を得ず、其の淺を涉んとすれば石我が足を齧む、其の深に乗ば龍我が舟に入る、我濟て悔あらば將安ぞ尤を歸せん、歸めよ石と鬪ふこと無れ、龍の求に應ずること無れ。

龜山操孔子以季桓子受齊女樂諫不從望龜山而作

龜之氣兮不能雲雨 龜之杼兮不中梁柱 龜之大兮祇以奄魯 知將隳兮哀莫

余伍 周公有鬼兮嗟余歸輔

龜山操は孔子季桓子が齊の女樂を受て諫ども從はざるを以て龜山を望んで作る。



龜の氣雲雨すること能はず、龜の積なる梁柱に中ず、龜の大なる祇以て魯を奄ふ、將に墮んとするを知れども哀む余と伍する莫し、周公鬼あらば嗟余歸て輔たらん。

拘幽操 文王姜里作

目揜揜兮其凝其盲 耳肅肅兮聽不聞聲 朝不日出兮夜不見月與星 有知無知兮爲死爲生 嗚呼臣罪當誅兮天王聖明

拘幽操は文王姜里の作。

目揜揜として其れ凝り其れ盲たり、耳肅肅として聽ども聲を聞かず、朝に日出るあらず夜月と星とを見ず、知ることあるか知ること無きか死せりとせんや生りとせんや、嗚呼臣が罪誅するに當れり天王聖明なり。

殘形操 曾子夢見一狸不見其首作

有獸維狸兮我夢得之 其身孔明兮而頭不知 吉凶何爲兮覺坐而思 巫咸上

天兮識者其誰

殘形操は曾子夢に一狸を見て、其の首を見ず作る。

獸あり維狸なり我夢に之を得たり、其の身孔だ明かにして頭は知らず、吉凶何爲ぞ覺て坐に思ふ、巫咸天に上れり識る者は其れ誰ぞ。

【句解】 載る所の四首、共に寓意に出た的確に其の義を知るを得ず、文字に就て暗中摸索の解を爲すのみ。

幽幽は水色の深碧なるを言ふ。深處も我が行く所にあらず、淺處も亦我が渉る所にあらず。「語」に子陳に在て

曰く歸與歸與、吾が黨の小子狂簡にして斐然として章を成す、之を裁する所以を知らず。又曰く孔子年五十六にして魯國に在て相事を攝行し、少正卯を誅し、國政を興聞く、三月にして魯國大に治まる。齊人女樂を歸りて以て之を沮む。季桓子 之を受く、郊又膳俎を大夫に致す、孔子行て衛に適く。孔子は正樂を唱道して女樂を排斥する人なり。正樂は人の道を正しうすればなり。女樂は人の道を破ればなり。之が爲め魯國の墮れんことを怖る。風俗壞亂すれば國は亡滅するなり。女樂は風俗壞亂の本なり。若し今の世に周公が在さば余は唯其れ其の人を輔翼して以て天下を治めんとなり。有鬼の二字は軽く解すべし、周公が如き精神の王あらばと解しても亦通するなり。揜揜は音、エン、訓「オホフ」覆なり、目を覆はれて外の見えぬなり。肅肅は寂寂と少しく意義を異す、然れども今は唯耳が靜なりと解すべし。聽は注意して「キク」なり。聞は注意せざるも聲の耳に入るなり、今は注意しても聞く能はざるなり。日出も知る能はず。月星も見る能はず。我が身は死せりや、我が體は生けりや、自分で自分の生死すら疑ふ。是れ西伯即ち文王が紂王の爲め姜里の牢獄に幽囚せらるる時の氣分を文王に代て之を言ふ。而かも此の如く晝夜も分たざる牢獄生活すると言ふも、是れは畢竟我自身の罪にて、決して殷王の我を苦しむるには非ず。天王 即ち殷王紂は聖明の天子にして毫も議すべき所あらずと。西伯の心事を表明して以て此の章を作る。殘形操は曾子が一狸を夢に見て、其の狸の首を見ざるとの事を言ふ。「大周正樂記」に曾子琴を鼓す、翟子戶外に立てて之を聽く、曲終て入て曰く善なる哉琴を鼓するや。身已に成る。而して惜むらくは未だ其の首を得ず。曾子曰く吾書臥して夢に一狸を見る、但其の身を見て、其の頭を見ず、起て而して之が爲めに絃歌すと。要するに翟子の疑ふ所を以て韓子も亦之を疑ふ。此の如きことは吉なりや凶なり



りや、我の知る所にあらず。巫咸 即ち卜占の聖に問はんと欲するも其の人己に上天して去て年久し、巫咸以外に其の理を識る者は其れ果して誰ぞや。第一は幽と由と舟と尤と求と韻、第二は雨と柱と魯と輔と韻、第三は盲と聲と星と生と明と韻、第四は之と知と思と誰と韻なり。

招海賈文第三十三

招海賈文は唐の柳州の刺史柳宗元子厚が作る所 晁氏曰く昔屈原楚に遇せられず、傍徨して依る所無し、雲に乗り、龍に騎て、八極に遨遊し、以て己が志に従ふ、而かも不可なり。猶ほ怛然として其の故國を念ふ。將に死せんとするに至り、精神離散して、四方上下往かざる所なし、又衆鬼虎豹怪物の害あり、故に大に其の魂を招きて之を復す、言こころは皆楚國の樂に若すとす。招海賈の文は其の義を變すと雖も、蓋し諸を此に取るなり。言こころは賈尙ほ爲すべからず、而るを又海に浮ぶをや、大泊齋淪として八方位を易へ、魚龍神恠ありて、其の禍測す、上黨の易野出入虞り無く樂べきに孰與ぞや、上黨亦晉の地、宗元以謂らく崎嶇として利を冒し、遠くして復らず、己が故郷常産の樂に如かずと。亦以て世の士險を行つて以て幸を徼るは、易きに居て以て命を俟に如かずと諷するなり。

咨海賈兮君胡以利易生而卒離其形 大海盪泊兮顛倒日月 龍魚傾側兮神恠  
驟突 滄茫無形兮往來遽卒 陰陽開闔兮氣霧滂渤 君不返兮逝怳惚 舟航  
軒昂兮下上飄鼓 騰越嶢嶠兮萬里一靚 峯入泓坳兮視天若畝 奔螭出抃兮

翔鵬振舞 天吳九首兮夏笑迭怒 垂涎閃舌兮揮霍旁午 君不返兮終爲虜  
里齒齸齸鱗文肌 三角駢列耳離披 反斷又牙踔嶽崖 蛇首豨鬣虎豹皮 羣  
沒互出誰遨嬉 臭腥百里霧雨瀾 君不返兮以充饑 溺水蓄縮其下不極 投  
之必沈負羽無力 鯨鯢疑畏淫淫嶷嶷 君不返兮卒自賊 惟石森立涵重淵  
高下迥置滔危顛 崩濤搜疏剡戈鋌 君不返兮若沈顛 其外大泊淫淪 終  
古回薄旋天垠 八方易位夏錯陳 君不返兮亂星辰 東極傾海流不屬  
咨海賈兮君胡ぞ利を以て生を易て卒に其の形を離たる、大海盪泊として日月を顛倒す、龍魚傾側して神恠驟突す、  
滄茫として形無し往來遽かに卒なり、陰陽開闔して氣霧滂渤す、君返らずんば逝て怳惚たらん、舟航軒昂して下  
上飄鼓す、騰越嶢嶠として萬里一靚す、峯として泓坳に入て天を視るに畝の若し、奔螭出で抃て翔鵬振ひ舞ふ、  
天吳九首あつて 變る笑ひ迭に怒る、涎を垂れ舌を閃かして揮霍旁午たり、君返らずんば終に虜と爲らん、黑齒  
齸齸にして鱗肌に文ぐ、三角駢列して耳離披す、斷を反し牙を又にして嶽崖に踔る、蛇首豨鬣にして虎豹の皮あ  
り、羣り没し互に出て誰と遨嬉す、百里を臭腥して霧雨瀾たり、君返らずんば以て饑に充たん、溺水蓄縮して其  
の下極らず、之に投すれば必ず沈む羽を負ふに力無し、鯨鯢疑ひ畏れて淫淫嶷嶷たり、君返らずんば卒に自ら賊  
れん、怪石森立して重淵に涵す、高下迥置して危顛に滔る、崩濤搜疏して戈鋌を刺る、君返らずんば若として沈  
顛せん、其の外大泊淫として瀾淪たり、終古回薄して天垠に旋る、八方位を易て 變る錯陳す、君返らずんば星  
辰を亂らん、東極海を傾けて流屬せず。



【句解】 容は容嗟と成語す、發聲なり。海賈は海上を貿易する商人。利を重んずること生より甚だしきは何ぞや。離其形 形跡を離る、郷を離れて他國に往くとなり。盪泊は大海が廣大にして止め處無し。顛倒日月 海上生活は陸上生活と全然反對なるを言ふ。墮突は意外の邊に意外の怪物が現起するを言ふ、何とも彼とも名の知れざる者が往來を急速にする。陰陽が忽ち開き又忽ち闔ち、氛霧 即ち非常に深き霧が濛濛として湧き起る、忽ち晴、忽ち雨と變化するなり。君不返 早く海上生活を休めて返らずんば乃ち漸くに隨て恍惚、即ち自身で自身を忘却する如きことならん。軒昂は波の爲め舟航の高く揚がる。而して又下上して飄鼓、即ちハネ返して打つが如き狀を爲す。騰越は舟航の登騰趨跳なり。嵯嶮は本義山の危険にして高きを言ふ。今は波の爲めに舟が高く揚がるなり。「コケルカ」「クヅレルカ」の解は本義にあらす。萬里を一目に觀るを得。卒も高きなり。泓は水深なり。坳は窪む貌、天の狀が田畝の若くなりと見る。奔騰は走る「ミヅチ」。出杼 舟の覆るを待て人を并吞するの樂あり。抃する所以。抃はヨロコブ場合にのみ用ふる字なり。鵬は翱翔して海上は我が天地と頗る矯慢なり。天吳と稱する海獸は九つの首を有して交互に笑ひ、又變迭に怒る、或は涎を垂れ、或は舌を閃かし揮霍、即ちヒラヒラりと左右上下を旁午する、此の如き畏る可きは海上の常態なり。君早く返らずんば彼等の爲め終に捕虜と爲らん。黒齒は恠人の住する國名。齷齪は恠人等が笑ふにも怒るにも其の齒を露す奇恠なる貌を言ふ。鱗文肌 恠人の肌は鱗文あるなり、人なりや獸なりや、魚なりや區別すべからざる底の物なり。三角が駢列し其の上耳は大にして離披たり、人は耳を動かす能はず、獸類は耳を自由に動かす。反斷は「ハグキ」の「ソリカヘル」なり。又牙は「キバー」の「マタ」を爲すなり。此の如き狀貌奇恠なる物が巖崖に踴跳し

て狂ふ。又或は蛇首にして猊鬣、虎豹の皮を著たるあり。遨嬉は旁若無人に振る舞ふなり。海上百里の間を臆くして、霧や雨が瀰漫する。愚圖愚圖して返らざる時は彼等が饑に充るに君が五尺の身體を以てせんとなり。溺水は弱水、是の水は水力弱くして一小塵すら浮ぶ能はずと云うて此の名あり、而かも水底の深きは極むべからず。是の水に身を投ずとせば又浮ぶ瀬あるべからず、是を以て鯨鯢の如き巨大なる魚族は沈むを疑畏するが故に淫淫たり、疑疑たり。君も早く返られよ、卒に自ら身を殘賊に至らん。剷置は恠石の行列して重淵に瀰すを見る。崩濤は字の如く崩れる濤波。搜疏は其の崩れし濤の間を搜り疏して以て恠石が戈鋌、即ち「ホコシ」形状を爲して刻るなり。春は音「ケキ」皮と骨とが相離るる聲を著然と曰ふ。此の如き危険の處は早く去らざらんば、遂に君は皮と骨と分離するの悲慘を見んとなり。泊は止り息むなり、舟の岸に附くを曰ふ、又水の白き貌をも曰ふ。今は白水の訓を取る。浮は水の名。滄淪 水深くして且「ウヅ」を捲くことなり。終古は「トコシナヘニ」と訓す。「イツデモ」の俗語が此の意に當る。回薄は波がクルクル回るなり。旋天垠 海上は天と接するを以てなり。八方易位 或は南方、或は北方と波が一位を守らず、縦横に錯陳するなり。亂星辰 星辰が位を守れば安心なるが、星辰が亂れたらば人は安心出來ざるなり。何ぞや北方が南方と變り、南方が北方と變る様な事となればなり。北極も東極も定まらずして、東西南北遂に分たざるに至る。君早く返られよとなり。月と突と卒と渤と惚と韻、鼓と親と齒と舞と怒と午と虜と韻、肌と披と崖と皮と嬉と饑と韻、極と力と巖と賊と韻、淵と顛と鏡と顛と韻、淪と垠と陳と辰と韻、屬は次へ移る。

泯泯超忽紛盪沃 殆而一跌兮沸入湯谷 舳艫霏解梢若木 君不返兮魂焉薄



海若膏貨號風雷 巨鼈領首丘山頽 猖狂震號翻九垓 君不返兮藥以摧 咨  
海賈兮君胡樂出幽險而疾平夷 恟駭愁苦而以忘其歸 上黨易野恬以舒 蹈  
蹂厚土堅無虞 岐路脈布彌九區 出無入有百貨俱 周遊傲睨神自如 撞鐘  
擊鮮恣權娛 君不返兮欲誰須 膠鬲得聖捐鹽魚 范子去相安陶朱 呂氏行  
賈南面孤 弘羊心計登謀謨 煮鹽大冶九卿居 祿秩山委收國租 賢智走諾  
爭下車 逍遙縱傲世所趨 君不返兮諡爲愚 咨海賈兮賈尙不可爲而又海是  
圖 死爲險魄兮生爲貪夫 亦獨何樂哉 歸來兮寧君軀

混浪として超忽し紛として盪沃す、殆うして一跌すれば沸て湯谷に入らん、舳艫罪解して若木を梢ん、君返すんば魂焉んか薄ん、海若貨を膏つて風雷を號ばしむ、巨鼈首を領て丘山頽る、猖狂として震號し九垓を翻す、君返らざるば糜て以て摧ん。咨海賈か君胡ぞ幽險に出るを樂んで平夷を疾む、恟駭愁苦して以て其の歸るを忘れたり。上黨の易野恬として以て舒む、厚土を蹈蹂して堅うして虞り無し、岐路脈のごとく布て九區に彌る、無きに出し有るに入れて百貨俱にす、周遊傲睨して神自如たり、鐘を撞き鮮を撃て權娛を恣にす、君返らざるば誰をか須んと欲す。膠鬲聖を得て鹽魚を捐つ、范子相を去て陶朱を安す、呂氏行賈して南面孤なり、弘羊心計して謀謨を登る、煮鹽大冶九卿に居る、祿秩山のごとく委して國租を收む、賢智走諾して争うて車を下る、逍遙縱傲して世の趨る所、君返らざるば諡して愚と爲ん、咨海賈か賈すら尙爲すべからず又海是れ圍んや、死して險魄と爲り生きて貪夫と爲る、亦獨何をか樂や、歸り來れ君の軀を寧ぜよ。

【句解】 混浪は物の消滅する貌。超忽と盪沃は浪波の上となり下となる貌。紛は紛紛と二字にして見よ。殆は危殆なり。若し一跌すれば忽ち湯谷 即ち海底の鬼に化せんとなり。日出るの處を湯谷と名く。舳艫は「トモ」船後に舵を持つ處。罪解は「トモ」が木の葉微塵と成るなり。梢若木 微塵と成て若木樹の上に登らんとなり、波が高く揚げる故なり。薄は至なり、魂の至る處無きなり。膏貨海若 即ち海神は人間の貨を求めんと待つもの、此の舟人は貨を持すと知らば舟を顛覆して以て之を奪はんとして爲めに風雷を怒號せしむ。巨鼈は大龜なり。蓬萊と方丈と瀛洲との三山を戴きて居る者なり。是の龜が若しや首を領く場合は丘山は忽ち顛倒するなり。猖狂はハゲシク狂ふ。震號はフルヒオソルなり。風雷や巨鼈が猖狂すれば人間が震號するなり。九垓は九州、九州は全國の意味。糜は糜亂、「カユ」を煮つぶすこと、君も早く返らざるば非常な目に遇ふぞ。何ぞや君は幽險を樂み冒險を好み、平夷を疾むや、蓋し君が胷中を察すれば虛心平氣にはあらずして、恟駭愁苦 即ちビクビクしながら其の歸去を忘却するならん。上黨は唐代、縣河東道潞州なり。易野は平野、恬は安恬、舒は怡舒なり。蹈蹂は「フミモム」なり、多勢の人が往來するゆゑ地面が堅固なるを言ふ。岐路は東西南北皆分明にして、迷ふこと無く。又百貨は互に貿易するゆゑ備はらざるもの無し。周遊は是の厚土の中を周遊するなり。傲睨は自由の儘の意味。睨むと定めるは不可なり。神自如は恟駭の反對、精神が安舒たるを言ふ。撞鐘は音樂の歡び、擊鮮は食物の娛みなり。膠鬲は古の富豪。得聖は聖道を得て、捐は舍捐なり、商業を廢止したるなり。范子は越の范蠡、功成りて後退き以て陶朱公と稱し、身を商賈の中に隠す。呂氏も商人なり、商を去て即ち一國の王と爲り、南面以て孤と稱するを得たり、天子自稱して孤と曰ふ。弘羊も漢の富人、武帝に謁して後種種



の謀謀を獻す。煮鹽は乾物問屋の主人、大治は鍛冶屋の親方、此等の徒が盡く九卿の位に登る。祿秩は官俸を  
日ふ。年俸を一萬兩二萬兩を得。國租を收める高さも亦多し。是の如く勢力ある、世の賢知と稱さるる人も唯  
唯として命を奉じ、途にて遇へば皆車より下りて拜す。然らば一方は得意満面、逍遙縱傲して天下の豪傑をし  
て我が脚下に趨らしむ。此等の人を諡する時は文公とか、賢公とか定めあり。若し君の如く海上に烏路附て返  
らざる者には愚を以て諡するの的當なるを信ず。吞海賈分の四字は非常に力ある文字なり、嘆息の極みなり。  
是に於ける分の字は千斤の力あり、尋常一様陸上に於て鹽を賣り、魚を鬻ぐことすら不可爲。況や海上に於て  
冒險して爲すに於ては尙ほ爲さべからず。死しては險魄、乃ち終古も魂魄の安舒すること無く。生涯は貪夫  
即ち損してはならん、損してはならんとは是れ利のみ計り、ただ己が私腹を肥さんと欲するのみ、是れ貪夫なら  
ずして何ぞ。是の故に早く歸來して君の身軀を安寧にせよとなり。此の句中にて大底は始めは商後には九卿と  
爲る人のみなるが、范蠡一人は反對に始めは九卿後には商人となりし人、普通ならば列に入れざる人なり。然  
れども陶朱公として彼が稱せられしは我のみ利益を打算せし商人とは稍や其の面目を異する觀あり。柳州の作  
意も亦然らんと思ふ。屬と沃と谷と木と薄と韻、雷と頽と垓と韻、夷と歸と韻、舒と虞と區と以下軀に至  
る皆一韻なり。

徵咎賦第三十四

徵咎賦は柳宗元が作る所。晁氏曰く貞元十九年、宗元監察御史裏行と爲る、時に年三十三。王叔文、韋執誼事

を用ふ。二人其の才を奇とし、引て禁中に納て計議を與にす。禮部員外郎に擢んで、大に之を用ひんと欲す。  
俄にして叔文敗れ、宗元劉禹錫等七人と共に貶せらる。而して宗元永州の司馬と爲る。元和十年乃ち柳州の刺  
史に徙り以て卒す。初め宗元竄斥せられ、轡障の間に崎嶇たり、堙隔感鬱、一に文に寓す。離騷數十篇を爲く  
る。徵咎は志を悔るなり、其の言に曰く苟も餘齒の徵ことあらば、前烈を踏んで頗ならずと。後の君子人の美  
を成さんと欲する者、讀で之を悲しむ。

懲咎愆以本始兮孰非余心之所求 處卑汙以閱世兮固前志之爲尤 始余學而  
觀古今怪今昔之異謀 惟聰明爲可考兮追駁步而遐游 潔誠之既信直兮仁友  
諷而萃之日 施陳以繫縻兮邀堯舜與之爲師 上睢盱而混茫兮下駁詭而懷私  
旁羅列以交貫兮求大中之所宜 曰道有象兮而無其形 推變乘時兮與志相迎  
不及則殆兮過則失貞 謹守而中兮與時偕行 萬類芸芸兮率由以寧 剛柔弛  
張兮出入綸經 登能抑枉兮白黑濁清

咎愆に懲て以て始に本く孰か余が心の求むる所を非とせん、卑汙に處して以て世を閱むは固に前志の尤と爲すと  
ころなり、始め余學で古を觀る今昔の謀を異するを怪む、惟聰明考ふべしと爲し駁歩を追うて遐に遊ぶ、潔  
誠の既に信に直く仁友諷として萃の日、施陳し以て繫縻して堯舜を邀て之と師と爲ん、上睢盱として混茫下駁詭  
して私を懷く、旁く羅列して以て交貫す大中の宜き所を求む、道に象ありと曰ふも而かも其の形無し、變を推し  
時に乗じて志と相迎ふ、及ざるときは殆し過るときは貞を失ふ、謹で而中を守て時と偕に行く、萬類芸芸と



て率由以て寧す、剛柔弛張して出入綸經あり、能を登げ枉を抑て白黒濁清あり。

【句解】 叔文は憲宗の太子、之と與に謀る、單に功利のみの念にあらざるなり。叔文敗れんば柳州も亦非常の人として稱せられん。不幸叔文敗れたるを以て貶せらるる慘を見しなり。而も恨ず懲咎愆と言ふ。本始叔文と事を謀つて敗れたるも其の從來持する所の主義よりすれば、何人も余が心を非なりと否定すまじ。所求は自身の爲めならず、老母の爲めなればなり。處卑汗は下役に居ての意、関は憐愍なり。前志は從來の書物、下役人は下役人だけの事を處理して可なり。分際もあらうに世を救はんと云ふ様な大望を抱く者は、今日に至るまで皆其れは尤と爲したるなり。余學觀古 前志は即ち古なり、今日も昔日も善謀は同じき筈のものなり。然るに今日と昔日と異なるは何ぞや惟しむ所以、此の今昔の異同を判するは聰明の士のみなり。是の聰明の士に就て考ふ可しとなり。駿歩は聰明の士、愚人や鈍人は駿歩にあらず、遠方に駿歩の士を尋る故に遐遊なり。其の人に會うて見ると、潔誠なり、信直なり、仁友なり。其の人と交はる余も亦潔誠、信直、咎愆に値ふ様なことは無きなり、仁友は互に施し互に陳し、我が學ぶ所の正道に繋縻て餘の濁汗は混合せず、唯君をして堯舜たらしむる道を究明するのみ、然而して一面を見る、上は唯肝として混茫、貴族は羣民と異なるなぞと云うて道明白ならざる混茫即ちバツとしたる人間ののみ。下は駁詭 即ち純粹の反對、異分子共が人人勝手に私を懐き堯舜の民たる資格無き徒輩多し。此等が羅列して交貫して居る。自分は獨り大中の宜しき所を求めんと苦辛する、其の求めて得たる所は下の文句の如くなり。象も形も和訓「カタチ」と爲す。「樂記」に天に在て象を成す、注に曰く象は光耀なり、形は體なり容なり、圓は圓、方は方と定められたる形を言ふ。象は玄理を含み、形は

顯はれたる儘なり、是の故に道は象ありて形無きなり。忠の道、義の道、孝の道、貞の道、皆象あり。推變乘時與志相迎 是れ王叔文等と提攜せしことを敘す、道と云ふものに始めより形あるものとせば變を推し時に乗ずること能はず、窮屈にも之を守らざるを得ず、道は形無し、是を以て同志が此の道に依て事を成さんと欲すれば、余も其れと相迎へざるを得ず、而かも其の事に當る、力の及ばざるときは危殆なり。力の餘りあるときは貞を失す。乃ち不及も過も共に不可、但其の中庸を得て、變に善推し、時に善乘すれば是の人以て偕に行くべし。萬類は森羅萬象。芸芸は草の繁茂する形容、犬でも猫でも中庸に率ひ由て、以て始めて安寧、剛は剛、柔は柔、弛は弛、張は張として皆有用と爲るなり。出入綸經 出るも入るも法策あるなり。綸經は經綸の倒用とす。而して有能の士を登用し、曲枉の者を抑て、白は白、黒は黒、濁は濁、清は清と分判して亂れざらしむるなり。求と尤と謀と遊と韻、師と私と宜と韻、形と迎と貞と行と寧と經と清と韻なり。

蹈乎大方兮物莫能嬰 奉訐謨以植内兮欣余志之有獲 再徵信乎策書兮謂炯然而不惑 愚者果於自用兮惟懼夫誠之不一 不顧慮以周圖兮專茲道以爲服 讒妬構而不戒兮猶斷斷於所執 哀吾黨之不淑兮遭任遇之卒迫 勢危疑而多詐兮逢天地之否隔 欲圖退而保己兮悼乖期乎曩昔 欲操術以致忠兮衆呀然而互赫 進與退吾無歸兮甘脂潤乎鼎鑊 幸皇鑒之明宥兮纍郡印而南適 惟罪大而寵厚兮宜夫重仍乎禍譎 既明懼乎天討兮又幽慄乎鬼責 惶惶乎夜寤而晝駭兮類磨瘡之不息 凌洞庭之洋洋兮泝湘流之汙汙 飄風擊以揚波兮舟



摧抑而回遭 日霾噎以味幽兮黜雲涌而上屯 暮屑窳以淫雨兮聽嗷嗷之哀援

衆鳥萃而啾號兮沸洲渚以連山 漂遙逐其詎止兮逝莫屬余之形魂  
大方を踏で物能く嬰ること莫し、訶謨を奉じて以て内を植て余が志の獲こと有るを欣ぶ、再び信を策書に徴し  
炯然として惑はずと謂り、愚者は自用に果す惟夫の誠の一ならざることを懼る、以て周く圖るを顧慮せず茲の道  
を専らにして服するを爲す、讒妬が構も戒めず猶は執る所に斷斷たり、吾が黨の淑らざるを哀んで任遇の卒に  
迫るに遭ふ、勢危疑として許多し天地の否隔に逢へり、退を圖て己を保んと欲し期に曩昔に乖くことを憚む、術  
を操て以て忠を致さんと欲すれば衆呀然として互に赫く、進と退と吾歸こと無し脂の鼎鏝を潤さんことを甘ず、  
幸に皇靈の明に宥むる郡印を襲て南に適く、惟罪の大にして寵の厚き宜なり夫の重ねて禍譎に仍ること、既に  
明は天討を懼れ又幽は鬼責を慄る、惶惶乎として夜寤て書駭く、麤麤の息ざるに類す、洞庭の洋洋たるを凌ぎ湘  
流の汨汨たるに沂る、飄風撃て以て波を揚げ舟摧抑して回遭す、日霾噎として以て味幽なり黜雲涌て上に屯る、  
暮に屑窳として以て淫雨あり嗷嗷たるの哀援を聽く、衆鳥萃て啾號す、洲渚を沸して以て山を連ね、漂として  
遙に逐ふ其れ詎ぞ止めん逝て我が形魂を屬ること莫し。

【句解】 嬰は女の頸飾なり。貝を連ねて頸を飾る。轉じて繋る義と爲す。大方を踏むときは何物も之を束縛  
する能はずとの意。訶謨は大なる訶、聖賢の教を曰ふ、口を張て大に鳴を訶と曰ふ。植内は聖賢の教を奉じて  
以て精神を定める基礎とするなり。而して自身に獲る所有りと確信す。策書は王叔文の徴す所を指すならんか、  
或は著即ち易卜を指すか明白ならざるが恐くは作者の意易を指すならん、自分が訶謨に由て獲たる志を再

び易に依て之を正したるに己が信する所炯然として明白亦惑ふ所なしと謂へるなり。愚者は自分を指す、最早  
や仕官しても可なりと自分で許し用ふべき者と定めたるが身の誤なり。而して考は單純にして、一向に世の中  
の複雑なる事に氣が付かず、所謂周囲の事情をも顧慮せず、至誠ならば可んと事に服したるが抑も錯誤なりし  
と悟る。讒妬が隱謀を構ふるに對し、何の戒しむる所無く、自分の執る所を斷斷乎として行ひ、遂に吾黨の不  
淑なる哀を見るに至る。任遇は王叔文の爲め尙書禮部員外郎と爲りしを云ふならん。卒迫 切迫したるなり、  
進退度に迷うた目に遇ふなり。否隔は開通の反對。天地の大も我に於ては重箱の middle の自由も出來ざる様にな  
りたるなり。然りと云へ退去して自分を全うせんとすれば、曩昔 即ち當年に約したる期誓に乖くを悼む。然  
らば進んで以て獻策し、忠を致さんと欲すれば、多くの讒妬輩は呀然として面を赤くして怒ることならん。乃  
ち進退維に谷まるなり。是に於てか自分は覺悟す。身を鼎鏝の中に烹らるるも寧ろ甘んじて其の重刑を受けん  
と、幸にして天子は聖鑒吾の眞に惡徒にあらざるを知り玉ふが故に其の罪を宥免して、死罪に處せず、而かも  
一郡の長吏と爲て南方へ適くことを命ぜらる。自分は罪の大なるを知る、而かも天寵は厚し。夫重は初めは永  
州に謫せられ、後には柳州に徙されしなれば言ふ。明には天討 即ち天子の討罪を蒙り、幽には鬼責 即ち  
鬼神の責を蒙むること當然なり、余の懼れ慄く所。惶惶 即ち心身共に落ち著かず夜も安眠せず、晝も尙ほ駭  
くなり。麤麤は「クジカ」極めて柔和なる動物、猛獸に逢はるるを畏れて安心して息ふ時なし、余も今身の安寧  
を缺くは宛かも此の「クジカ」に類すとなり。洞庭は大故に洋洋湘流は小故に汨汨の文字を用ふ。飄風は突然起  
る風、是の風に出會しては舟も「グルグル」と回遭する危険あり。日色は霾噎 即ち曇り勝ちにして味幽なり。



黝雲は鼠色の雲、上空に屯集して動かす。屑傘 碎て降るが屑、驟に降るが傘なり。淫雨は「イヤナ」雨なり。嗷嗷は哀猿の鳴聲。啾啾は衆鳥の鳴聲。忽にして洲、忽にして渚と沸き出るかの如く山容を連ねるなり。漂は浮漂すなり。東西南北其の止る處無く浮漂するを言ふ。此の如くなれば余が形魂を以て何處にか寄屬せんやと水上の凄慘を言ふ。嬰は前の清と韻を續ぐ、獲と惑と一と服と執と迫と隔と昔と赫と鏤と適と諳と責と息と韻、沍と暄と屯と猿と山と魂と韻なり。

攢轡奔以紆委兮東洶湧之崩湍 畔尺進而尋退兮盪洄汨乎淪漣 際窮冬而止居兮羈纍笄以縈纏 哀吾生之孔艱兮循凱風之悲詩 罪通天而降酷兮不亟死而生爲 逾再歲之寒暑兮猶質質而自持 將沈淵而隕命兮詎蔽罪以塞禍 惟滅身而無後兮顧前志猶未可 進路呀以劃絕兮退伏匿又不果 爲孤囚以終世兮長拘繫而轉軻 曩余志之修審兮今何爲此戾也 夫豈貪食而盜名兮不混同於世也 將顯身以直遂兮衆之所宜蔽也 不擇言以危肆兮固羣禍之際也 御長轅之無撓兮行九折之峩峩 却驚棹以橫江兮泝凌天之騰波 幸余死之已緩兮完形軀之既多 苟餘齒之有懲兮蹈前烈而不頗 死蠻夷固吾所兮雖顯寵其焉加 配大中以爲偶兮諒天命之謂何

攢轡奔以紆委す洶湧の崩湍を束ぬ、畔として尺進み尋退く盪として淪漣に洄洑す、窮冬に際して止り居る羈纍笄にして以て紆纏れり、吾が生の孔だ艱ことを哀み凱風の悲詩に循ふ、罪天に通じて酷を降す亟かに死せずして

生ことを爲す、再歳の寒暑を逾て猶ほ質質として自ら持す、將に淵に沈んで命を隕んとすれば詎か罪を蔽うて以て禍を塞ん、惟身を滅して後無きは前志を顧るに猶ほ未だ可ならず、進路呀として以て劃絶す 退て伏し匿とすれど又果さず、孤囚と爲て以て世を終ふ長く拘繫して轉軻す、曩し余が志の修審なる今何ぞ此の戾ことを爲す、夫れ豈食を貪り名を盜て世に混同せざらんや、將に身を顯し直を以て遂んとすれば衆の宜しく蔽ふ所なり、言を擇ばず以て危肆なるは固に羣禍の際なり、長轅の撓こと無きに御して九折の峩峩たるに行く、驚棹を却て以て江に横へ凌凌天の騰波に泝る、幸に余が死の已に緩き形軀を完うすることの既に多き、苟も餘齒の懲ること有る前烈を蹈で頗ならず、蠻夷に死するは固に吾が所なり、顯寵すと雖も其れ焉ぞ加ん、大中以配して以て偶と爲さん諒に天命を何と謂や。

【句解】 攢轡は羣山と同じ、紆委は紆折委曲、左右にマガリクネルなり、束は一處に集ること、洶湧は水勢を形容す、崩湍は水勢が強ければ何處かに波が崩る、其の崩湍が一處に集る、畔は田界を本義とす、波の來る右も左も界あるを謂ふ、尺は寸を十、尋は尺を八、盪は波の「クダケル」なり、洄洑は「メグル」は「シヅム」なり、淪漣は小波なり、此の如き形容は實際を見て知るべきなり、以上は舟中の状態、窮冬は十二月、止居は柳州に止居して外出できざるなり、羈は羈縛、笄は笄棟「ムナギ」が本義今は笄亂の義を取る、事事が笄亂するなり、縈纏も羈縛と大意同じ、凱風は南風にて夏の風を言ふなれど、南風は草木を生長させる力あるを以て乃ち母の事と爲す、「詩」の國風に、凱風南よりし、彼の棘薪を吹く、母氏聖善、我令人無し、今の文も此の詩意と同じく、母に孝を竭くす能はざる我が不幸を悲しむなり、悲詩に循ふとは即ち「毛詩」の悲詩の如くに



我も成れりとの意。酷は殘酷、我が罪の大なる、天は是れが爲め極刑を降せるなり。恥を知らば亟かに死すべし、生くべからざるなり。而も我は再歲、即ち二年の間、柳州に止居し、質買は目不明の貌と注して烏鸛鳥驚するなり。而も淵に沈んで罪を償はんと欲するも、前志、即ち古人の蹤跡に顧るも其れも不可なり、生きてこそ進路あれ、死しては進路が呀然として劃絶す、呀は空き貌、劃絶は東と西と全く切斷すること。然りと雖も伏匿も亦不能、柳州に孤囚と爲て此の世を終るより外術無し。拘は拘執、擊は擊殺、手足が自由に爲らざる形容。轆軻は不運にして自由を得ざるを哀しむなり、修審は志の立派なりし事、昔志立派なりしに今此の戻を見るは抑も何の故ぞや。衣食の爲め、名譽の爲め世に混同したるが一因、又正直を以て顯身せんと欲して、衆人に憎まれたるが一因なり。言語を慎まらずして、危肆なりしも、又羣禍を招くの一因となりしなり。長轅は長い道中を譬ふ。九折の峩峩は今日に至るまで我が一身上に辛苦波瀾し來ることと言ふ。驚棹は前の長轅に對する文字、却是御に對して用ふ。凌天は九折に對す、行と沂と對す、陸上も水上も共に辛苦したるを言ふ。幸に一死を免れて形軀を完全にするあり。若し餘齡ありて、是の禍に懲るる心を保持すれば、前聖の芳烈に倣うて以て正しかるべしとなり。頗は偏頗、又不平なりと注す、不頗なれば則ち正直なり。是の如く決心したれば蟹夷に死すとも恨む所なし。吾所と安心立命したるなり。縱令顯寵、即ち顯榮恩寵を蒙る身となるも、其焉加今日の志と同じこと。大中と配偶して共に修審せん、是の外天命に依て起ることは何とも謂へぬとなり。湍と漣と韻、詩と爲と持と韻、禍と可と果と軻と也の四字韻、峩と波と多と頗と加と何と韻なり。

閔生賦第三十五

閔生賦は柳宗元が作る所。晁氏曰く宗元雅蕭儉と善し、江嶺の間に在て書を賂て情を言ふ云く宗元罪人と交ること十年、官是を以て進む、辱なく附會するに在り、今の天子(憲宗)邪正を定め、海内皆欣欣として怡愉す、僕四五子の者と淪陷すること此の如し、豈命にあらずや、然も治平に居て終身頑人の類たり、猶ほ少恥ありて未だ盡く忘るる能はず。此れ蓋し叔文が輩を以て罪人頑人と爲して、己が恥辱と謂へり。困事に在りては爾か云ふ者と雖も、然かも悔厲すること極れり、其の吾が生の險阨なるを閔む、紛として志を喪うて以て尤に逢ふと曰ふは、蓋し自ら生の不幸にして志を喪ふを以て此れを爲すと云ふ。

閔吾生之險阨兮紛喪志以逢尤 氣沈鬱以杳眇兮涕浪浪而常流 膏液竭而枯居兮魄離散而遠遊 言不信而莫余白兮雖遑遑欲焉求 合喙而隱志兮幽默以待盡 爲與世而斥繆兮固離披以顛隕 騏驥之棄辱兮駑駘以爲騁 玄虬蹶泥兮畏避雷電 行不容之崢嶸兮質魁壘而無所隱 鱗介稿以橫陸兮鴟嘯羣而厲吻 心沈抑以不舒兮形低摧而自慙 肆余目於湘流兮望九疑之垠垠 波淫溢以不返兮蒼梧鬱其蜚雲 重華幽而野死兮世莫得其僞眞 屈子之悵微兮抗危辭以赴淵 古固有此極憤兮矧吾生之藐艱 吾が生の險阨なるを閔む紛として志を喪うて以て尤に逢へり、氣沈鬱として以て杳眇たり涕浪浪として常に流



る。膏液竭て枯居す。魄離散して遠く遊ぶ。言信せられずして余を白にする莫し。違違たりと雖も焉んか求ることを欲せん、喙を合し志を隠し幽黙以て盡んことを待つ、世に與することを爲せば斥繆せられ固に離披して顛隕す、騏驎の棄辱せらるるときは驚駘以て騁を爲す、玄虬泥に蹶き鼈龍を畏れ避く、行て容れられざるの崢嶸たる質魁壘として隠る所無し、鱗介橋て以て陸に横ふ鷓鴣羣して物を厲す、心沈抑して以て舒す形低摧して自ら愁む、余が目を湘流に、肆にし九疑の垠垠たるを望む、波淫淫して以て返らず蒼梧鬱其として雲を垂す、重華幽せられ野に死す世其の僞眞を得ること莫し、屈子が惜微なりし危辭を抗て以て淵に赴く、古固に此の極憤あり矧や吾が生を貌艱なるをや。

【句解】膏液竭は生氣無きの謂ひ、枯居は死人と同じとの謂ひ、白は明白、如何に己が志を明白にせんと欲するも能はず、是を以て喙を合し、一言も吐かざる様にする、世に與すとすれば是れ亦排斥せられ、訛繆の人とせられて身は顛隕を免れず。騏驎と驚駘、玄虬と鼈龍と悉く地位が顛倒す、玄虬は龍、鼈龍は蝦蟆なり。崢嶸は元來山の高き形容、自分の行は世に容れられず、山の如く高ければなり。而して其の質、即ち天性は魁壘、即ち是れも崢嶸と同じく高く且大なるを以て隠る所なしとなり。鱗介の如く陸に横ふの不幸を見る。鷓鴣は鷓鴣なり。鷓鴣の羣族が物を厲くして以て好餌に有り附かんと欲す。沈抑は元氣の無きなり、低摧は倨傲の反對、俗語の肩身を狭くすること。湘流の水を涉り、九疑の山を望み、道中の凄慘に耐へざるなり。蒼梧は重華、即ち舜の死せし處、其の僞眞は今知るを得ざるも、屈子が汨羅に没したる事は實際なり。惜微は屈原が憂へて以て氣の小を言ふ。危辭は襄王を諫めし書を指す。貌艱は遠流せられての艱難を言ふ。尤と流と遊と求と韻、盡

と隕と韻、馳と韻、馳と韻、隱と韻、隱と韻、垠と雲と眞と淵と韻と韻なり。列往則以考己兮指斗極以自陳、登高崑而企踵兮瞻故邦之殷麟、山水浩以蔽虧兮路蒼勃以揚氛、空廬頽而不理兮翳丘木之榛榛、塊窮老以淪放兮匪魑魅吾誰鄰、仲尼之不惑兮有垂訓之晷言、孟軻四十乃始持心兮猶希勇乎黜賁、顧余質愚而齒減兮宜觸禍以隄身、知徙善而革非兮又何懼乎今之人、噫禹績之勤備兮曾莫理夫茲川、殷周之廓大兮南不盡夫衡山、余囚楚越之交極兮邈離絕乎中原、壤汗潦以墳洳兮蒸沸熱而恒昏、戲鳧鶴乎中庭兮兼葭生於堂筵、雄虺蓄形於木杪兮短狐伺景於深淵、仰矜危而俯慄兮弭日夜之拳擥、慮吾生之莫保兮忝代德之元醇、孰眇軀之敢愛兮竊有繼乎古先、明神之不欺余兮庶激烈而有聞、冀後害之無辱兮匪徒蓋乎曩愆。

往則を列て以て己を考へ斗極を指て以て自ら陳し、高崑に登て踵を企て故邦の殷麟たるを瞻る、山水浩として以て蔽虧す路蒼勃として以て氛を揚げ、空廬頽て理めず丘木の榛榛たるに翳る、塊として老を窮め以て淪放す魑魅に匪ずんば誰と鄰らん、仲尼が惑はざるも垂訓の晷言あり、孟軻四十にして乃ち始めて心を持ち猶ほ勇を黜賁に希ふ、顧ふに余が質の愚にして齒減る宜なり禍に觸て以て身を隄むこと、善に徙り非を革むことを知らば又何ぞ今の人を懼ん、噫禹績の勤備り曾て夫の茲川を理むると莫し、殷周の廓大なりし南のかた夫の衡山を盡さず、余楚越の交極に囚る邈として中原を離絶す、壤は汗潦にして以て墳洳たり蒸て沸熱して恒に昏し、鳧鶴を中庭に



戯れしむ蕪葭堂筵に生たり、雄虺形を木杪に蓄へ短狐景を深淵に伺ふ、仰て危を矜て俯し慄る日夜の拳攀たるを弭む、吾が生を保こと莫きを慮り代徳の元醇なるを忝つ、孰か眇軀を敢て愛んや竊に古先に繼ぐあり、明神の余を欺かずんば庶はくは激烈して聞くこと有らん、冀はくは後害の辱め無からんことを徒に曩愆を蓋ふにあらす。

【句解】 往則是往時の規則を列舉して己が事を考ふれば心に慙ること無し。斗極 即ち天の星を指して以て自陳す。北極を指して陳するは、天子が在す都は北方なればなり。企踵足を舉げたとして故邦は瞻るべくもあらず、而も瞻るが人の情なり。殷麟は衆車の轟く音、今以て故邦の繁榮なるを言ふ。山水浩と謂ひ、路翁勃と謂ふ、共に故邦と此の柳州と相遠隔するを言ふ也。空廬は故邦の邸宅を指す。不理 主人が遠隔の地に在り、修理せずして頽廢に一任す。丘木之榛榛 親の墓の木は空しく榛榛と茂るのみ。塊は塊然孤獨を言ふ。老に至るを知らずして淪放し、吾と親近する者は唯魑魅の類のみ、魑魅は寂寞の郷に住すればなり。仲尼 即ち孔子は四十にして不惑との譽言を垂れ教訓を遺せり。晷は「サケブ」聲、大に自冤を呼ぶなり。孟軻は公孫丑の問に答て我四十にして心を動かさず、勇は孟賁と北宮黈を養ふと曰へり。孔孟の二子すら然り、況んや余輩の如き愚質而も齒、孟子より少に於ては王叔文が舉に讀すも無理ならずと自信するなり。陌は音「エン」訓「アヤフシ」危なり。一旦禍に觸も其の非を覺り善に徙るに於ては、何ぞ今日の人の批議を懼れんや。夏の禹王は洪水を治めし功績、史に備て明明なれども亦其の理むる能はざる川もあるなり。殷と周とは天下を一統して廓大の國と成るも、南方の衡山までは自由にする能はざりし、殷の都の亳は今日の河南省河南府、周の都の邠も邠も岐も皆今日の陝西省なり、衡山は今日の湖南省衡州府。交極は楚と越との分界線に居るを言ふ、楚の都は郢今日の湖北省

荆州府、越の都は會稽、今日の浙江省紹興府。中原は長安即ち陝西省を指す。壤は土壤なり。汗潦は低地に於て常に濕ふ。墳洳は濕地の惡き形容。沸熱は常に百度以上の暑なり。恒昏 陰氣なるを言ふ。鳧鶴は水鳥鴻の一種。中庭に池無くとも水澤の如くなれば鳥常に遊戯す。蕪葭が堂筵に生ずるの奇觀もあり。雄虺は蛇なり。木杪は樹枝の末端なり。短狐一名を蚊「イサゴムシ」『周禮蠲氏疏』に短狐は盛暑に生るる所、其の狀魑に似たり。『埤雅』に沙を含んで人を射る、害を爲す狐と同じと。景は人影なり、人の影が深淵に移れば何うて以て害を加へんと欲す、又水狐の名もあり。此の如きの惡地、仰ぐにも、俯すにも、戰慄せざるべからず。弭は止なり忘る。拳攀は思慕するが上に思慕するなり。日夜に思慕したる念が今日は止む、何の故に止むやと言はば、吾生の永く保つ莫きを覺悟すればなり。又一面には世が變りて至醇の善代と爲ればなり。眇軀は區區たる五尺の身、敢て愛惜する必要なし。竊有繼乎古先 此の意は二様に解釋するを得、一は我自身が昔の志を立てし人に復りたい、一は古の先徳が志に繼ぎたい、竊の字よりすれば後説を以て可と信す。神は人の至誠を知る者、又人を欺かざる者、然らば激烈して以て我が本志を聞知し玉へとなり。故に冀ふ今後の禍無からむことを。蓋し此の如き事を言うて、前日の愆を蓋ふ爲なりと言ふこと莫れとなり。陳と麟と氣と榛と鄰と以下愆に至る一先と十一真と十二文とを通用して一韻とせり。

夢歸賦第三十六

夢歸賦は柳宗元が作る所。晁氏曰く宗元既に貶せられ、其の年少氣鋭にして、幾微を識らず、久幽して還らざ



ることを悔い、復其の知る所の許孟容に書を贈る、其の略に云ふ身を立ること一ひ敗れ、萬事瓦のごとく裂く、墳墓掃はず、宅三び主を易ふ、恐くは一日死なば先緒を曠墜せん。意孟容に託するに少しく北するを以てす。賦中、故都の喬木と言ひ、仲尼九夷、老子適戎、首丘鳴號と言ひ、其の舊を忘れざるを示すものなり。

擢擯斥以窘束兮余惟夢之爲歸 精氣注以凝沍兮循舊鄉而顧懷 夕余寐于荒阪兮心慊慊而莫違 質舒解以自恣兮息悒鬱而愈微 歎騰踴而上浮兮俄澗澗之無依 圓方混而不形兮顯純白之霏霏 上茫茫而無星辰兮下不見夫水陸 若有鉢余以行路兮馭擬擬以回復 浮雲縱以直度兮云濟余乎西北 風纏纏以經耳兮類行舟迅而不息 洞然於以瀾漫兮虹蜺羅列而傾側 橫衝颺以盪擊兮忽中斷而迷惑 靈幽漠以澗汨兮進悒悒而不得 白日逸其中出兮陰霾披離以泮釋 施岳瀆以定位兮互參差之白黑 騫崩忽上下以恟惶兮聊按行而自抑 指故都以委墜兮瞰鄉閭之修直 原田蕪穢兮崢嶸榛棘 喬木摧解兮垣廬不飾 山峒峒以崑立兮水汨汨以漂激 魂恍惘若有亡兮涕汪洋以隕軾 類噍黃之黥 漠兮欲周流而無所極 紛若喜而怡擬兮心廻互以壅塞

擢斥に擢つて以て窘束す余惟夢のみ歸ることを爲す、精氣注て以て凝沍たり舊郷に循つて顧み懷ふ、夕に余荒阪に寢て心慊慊として違ふこと莫し、質舒解して以て自恣にし息悒鬱して愈よ微なり、歎として騰踴して上り浮べば俄に澗澗の依ること無きあり、圓方混じて形れず顯として純白の霏霏たるあり、上茫茫として星辰無く下夫の水

陸を見ず、余を鉢て以て路に行くこと有るが若し馭擬擬として以て回復す、浮雲縱にして以て直に度る云に余を西北に濟す、風纏纏として以て耳を経行舟の迅にして息ざるに類す、洞然として以て瀾漫す虹蜺羅列して傾側す、衝颺に横て以て盪擊す忽として中斷して迷惑す、靈幽漠にして以て澗汨たり進んで悒悒するも得ず、白日逸として其の中出で陰霾披離して泮釋す、岳瀆を施して以て位を定め參差たる白黒を互にす、騫崩忽ち上下して以て恟惶す聊か按行して自ら抑ふ、故都を指て以て委墜す郷閭の修直なるを瞰る、原田蕪穢して崢嶸たる榛棘あり、喬木摧解して垣廬飾す、山峒峒として以て崑立す水汨汨として以て漂激す、魂恍惘として有るか亡きかの若し涕汪洋として以て軾に隕つ、噍黃の黥漠たるに類す、周流せんと欲すとも極むる所無し、紛として喜るが若にして怡擬す心廻互して以て壅塞す。

【句解】擢斥は忌み嫌はれること。窘束は不自由のこと。夢にのみ歸る、歸を願ふの精氣が常に此に集注するに依る。荒阪は僻地と同じ。慊慊は心に記して寸時も忘れざるなり。懐の字義は「アキタル」又「アキタラズ」と反對の両面を持つ、又「ウラム」恨と、「ココロヨシ」快の両面を持つ、解釋に依ては種種の義を生ずるに至る。莫違は専心の謂ひ、専心に故都に歸を思ふより外念がなきなり。質は形質、舒解は「ユルム」自恣は身體の「ダラリト」なるなり。悒鬱は呼吸の微くなる貌。歎騰踴は已に夢に入り、魂が上浮するを覺ゆ。澗澗は行く處の廣大にして依る所無きなり。圓とも方とも其の形を言ひ難く、顯大なる純白色の霏霏たるを覺ゆるのみ。上下水陸と判する能はず、何物とも知れず余を鉢て路案内するやの感あり。鉢は音「ジュツ」訓「ナガバリ」長針、以て引と解すなり。擬擬は未詳、或は日ふ靜かに行く貌と。回復は上下とも判知せざる中に又「メグル」感もあ



り。「カヘル」感もあり。浮雲に乗じ、縦なるが故に直度するを得。西北は常に思慕する所の都の方角。纒纒は元來冠の織を曰ふ、轉じて好き貌、飛び揚がる貌と注す。經耳 耳に入る風が何と無く氣持ち好きなり。行舟を以て其の迅速を譬ふ。洞然、於て鳴乎と同じ。瀾漫は廣大を曰ふ。虹蜺「ニジ」が羅列して傾斜し側面なり。而して衝颺 即ち突風に影を横へ、以て盪撃す。既にして蜺が中斷するを見て如何になるならんと考て迷惑するなり。靈は形無し、故に幽漠なり、幽漠なるが故に澗澗 即ち水の流るる如く迅速なり。招悵は俗語のアキレテ意を失ふ貌、唯邈として知る白日が出て、陰霾 即ち暗昧の處が洋釋 即ち無くなる。岳瀆は五岳と四瀆なり。泰と華と霍と嵩が五岳、江と河と淮と濟が四瀆、僅に此五岳と四瀆が劃然と施布して位置が亂れざる故に、白なり黒なるやを知るを得、而も參差として蹇るが如く、崩るが如く、靈が上下して以て恟惶し、按行 即ち安排、進行して自ら其の早まる心を抑ふ。而して赴く所は一概に故都に在り、郷閭に在り。委墜は天上より下る處、修直は街區の井然たること、而も原田は人が畊釋せざるを以て蕪穢し、翻て崢嶸たる榛棘が生ず。喬木 我が郷園の木は摧解して且垣廬も修飾せず、唯人の手を煩はさずして其の色を損せざる岫岫たる山あり、汨汨たる水あり、山は高く崑立し、水は低く漂激す。恍惚は「ボンヤリ」なり。有が無かを知る能はず。涕の汪浪として車に隕つ、駭漠は色の黒きこと。嚙黃は黃昏、時間は何時と分らざるが晩方に類すと思はるるなり。而も周流せんと欲する心あるも、其の極むる所無きを奈何せん、喜ぶ如くなるも亦怡儼即ち心配となるなり。是を以て心廻互して壅塞 即ち「フサガル」なり。歸と違と微と依と罪と罰、陸と塞に至る十五句は一韻なり。

鐘鼓嗶以戒旦兮陶去幽而開寤 罽罽蒙其復體兮孰云桎梏之不囿 精神之不可再兮余無蹈夫歸路 偉仲尼之聖德兮謂九夷之可居 惟道大而無所入兮猶流游乎曠野 老聃遁而適戎兮指淳茫以縱步 蒙莊之恢恠兮寓大鵬之遠去 苟遠適之若茲兮胡爲故國之爲慕 首丘之仁類兮斯君子之所譽 鳥獸之鳴號兮有動心而曲願 膠余衷之莫能捨兮雖判析而不悟 列茲夢以三復兮極明昏而告愬

鐘鼓嗶として以て且を戒め陶として幽を去て開け寤む、罽罽蒙として其れ體に復す孰か云ふ桎梏の固らすと、精神の再びすべからず余夫の歸路を蹈むこと無し、仲尼が聖德を偉して九夷が居る可しと謂り、惟道の大にして入らるる所無く猶ほ曠野に流游せり、老聃の遁て戎に適て淳茫を指て以て歩を縱にす、蒙莊が恢恠なる大鵬の遠く去るを寓す、苟も遠く適くことの茲の若くならば胡爲ぞ故國の慕ふことを爲ん、丘に首するは仁類なり斯れ君子の譽る所なり、鳥獸の鳴號する心を動して曲願みるあり、膠として余が衷の能く捨ること莫き判析すと雖も悟らず、茲の夢を列ねて以て三復す明昏を極めて告げ愬ふ。

【句解】 嗶は小兒の啼聲、今以て鐘鼓の暮しく鳴る形容とす。陶は陶然、鐘鼓の激聲の爲め夢が寤たるなり。罽は網なり。罽蒙は暗昧と同じ、夢中には廣大の天地に周遊せしが、夢覺めて見れば矢張り本の流入、即ち桎梏の人であるなり。而も同じ夢は再見する能はず、仲尼聖德 九夷可居 孔子が徳は九夷と同じく大、大なれば何處にも居らるるべき筈なり。而も孔子が徳は大に過ぎ、天下之を入るる處なし、是を以て曠野に流浪周游



するの止むを得ず。孔子が夢の事「孔子家語」を見よ。老聃は老子、周しゅうに居ること久しきも、周しゅうの衰おとろふるを見て去て戎に適く。淳じゆん茫ぼうは定め無く廣ひろきこと、廣ひろき處ところにて自由じゆうに縱じゆう歩ほする。蒙もう莊じやうは莊じやう子し、名なは周しゅう、蒙もう人じんなるを以て蒙もう莊じやうと曰ふ。恢かい惟い尋常じんじやうの語を吐く人にあらざればなり。大だい鵬ぱうが一息ひといきに九萬里きゅうばんりも十萬里じゅうばんりも飛とぶと云ふ類の言を吐て莊じやう子し一部十餘萬言じふじゆばんげんを著はす、仁じんだの義ぎだのと小理窟せうりくつを言ふを嫌きらうて、別べつに廣大くわうだいの天地てんちを求む。老莊らうじやうが言の如ごときを實行じつぎやうすとせば、故國ここくなぞと小ちひさな天地てんちを慕したはずして可かならんも、人間じんけんは人間じんけんとして此こゝの如ごとくなる能あたはず、例れいせば傍生ばうせいの狐きつねの如ごときものすら死しするときは必ず首かみを丘かみ上うへに置おく、丘かみは其そのの親おやの古穴ふるあななり。仁じん類るいなりとは孔子の嘆たん稱しやうしたる語なり。鳥類ちようるいでも、獸類じゆうるいでも、各おの鳴な號ごうして其そのの古巢ふるすを慕したはざるは無し、況いはんや人間じんけんが衷情じゆうじやうあるに於て何ぞ故都ことを背捨はいしする念ねんあらんや。雖すい判はん析せき何の故ゆゑに流人りゅうじんと爲なつて此こゝに居をるやを判析はんせきする智ちはあるなり。而しかも不悟ふぶは人間じんけんなればなり。悟さとるに於ては憂愁いうしゆうは生しやうぜざるなり。茲こゝ夢むの事ことを列舉れつぎよして是の賦ふを爲り以て三復さんふするなり。明昏めいこん即ち夢中むちゆうと夢後むごとの事ことを究極きゆうごくして以て告つげ懇こんふとなり。寤ごより懇こんに至る十二句じふにく一韻いんなり。

弔屈原文第三十七

弔屈原文は柳宗元りゆうしゆげんが作る所。晁氏せうし曰く原没して賈誼かぎし湘しやうに過ぎ、初めて賦ふを爲り以て弔てうす。揚雄やうきゆうに至り亦文またぶんを爲り、頗すこる其の辭ことばに反し、岷山みんざんより諸しよを江かうに投なじ以て之これを弔てうす。誼ぎが原げんが忠ちゆうなるも時の不祥ふしやうに逢あはれ以て鸞鳳らんほう周鼎しゆうていの寶たから棄すせらるるに比ひす、雄ゆうは則ち義ぎを以て原げんを責せめ何なんぞ必ず身みを沈しづめと、二人ふにんの者もの同じからざることも亦各またおの志こゝろに従したがふなり、宗元しゆげんは罪つみを得、昔人せきじんの讒ざんに離ありて國くにを去さる者に異ことな。太史公たいしこうが所謂いはゆる虞卿よけい窮愁きゆうしゆうにあらずん

ば亦書またしよを著かして以て自ら世よに見みるること能あたはざる者ものなり、故ゆゑに補ほ之し論ろんすらく宗元しゆげんが弔てう屈原げんは殆ほとんど困くるんで悔くむことを知る者もの其の辭ことば慙へんたり。

後先生蓋千祀兮余再逐而浮湘 求先生之汨羅兮孽衝若以薦芳 願荒忽之願  
懷兮冀陳詞而有光 先生之不從世兮惟道是就 支離搶攘兮遭世孔疚 華蟲  
薦壤兮進御羔裘 牝雞咿嚶兮孤雄束咄 哇咬環觀兮蒙耳大呂 董喙以爲羞  
兮焚棄稷黍 犴獄之不知避兮宮庭之不處 陷塗藉穢兮榮若繡黼 橫折火烈  
兮娛娛笑舞

先生に後たること蓋し千祀にして余再び逐れて湘に浮ぶ、先生を汨羅に求め衝若を撃て以て芳を薦む荒忽の願て懐ふことを願ふ冀はくは詞を陳し光あらしめよ、先生の世に従はず惟道是れ就く、支離搶攘として世の孔だ疚に遭ひ、華蟲壤に薦して羔裘を進御す、牝雞咿嚶として孤雄咄束咄、哇咬環觀して耳を大呂に蒙ふ、董喙喙以て羞を爲し稷黍を焚棄す、犴獄を避くるを知らず宮庭に處らず、塗に陥り穢に藉て榮として繡黼の若くす、横折火烈うして娛娛として笑舞す。

【句解】先生は屈原、千祀は千年、四時即ち春夏秋冬の祀一終するを以て祀を年と爲す。衝若は杜蘅と蕙若となり。此の芳を薦めて先生の靈を祭るに因て先生の靈魂は荒忽として我が陳詞する情を願懐し玉へとなり。有光は俗に云ふ靈驗あれよとなり。先生は道に従ふの心強く、俗世に従はざりし人なり、俗世は道理は支離として定まらず、萬事は搶攘として靜かならず、世俗は皆疾病の人のみなり。華蟲は天子の服、雉を繡刺せる物、



薦壤は平民共に是の服を薦めてなり。羔裘は羊の皮を以て製せる服、是れは平民共の服、是の平民の服を天子に進御する、牝雞は曉を告ぐるものにあらず然るに咿嘵として鳴く、孤雄は雄雞、雄雞は味を束ねて鳴かず、君子と小人と顛倒したるを言ふ。哇咬は鳥類の啼聲、又小聲を形容す、聽に足らざる都都逸の類の歌を讀む聲と知るべし。環觀は多勢が見るなり。大呂は雅音の根本、正しき音律、此の正樂は耳を蒙つて聞かず、反て愚劣の歌を聞く。董は毒草、喙は鳥喙、一名草鳥頭、董と同種類の毒草。此等の毒草を差めて而して稷や黍の善稻を焚棄する。犴獄は囚人を容る處、其の囚人たることを嫌はず。宮庭の如き善處に居るを好ず。塗は徑なり。大道の反對。穢は汚なり、芳香の反對。其の汚穢の物を榮として之を繡繡の若く思ふ。棖は梅核「タルキ」なり、家は「タルキ」にて支ふ。「タルキ」の折たる、猛火の烈燒する中に於て娯娯して笑舞するは世の小人共良とに憐むべしとなり。湘と光と韻、疾と襲と韻、味と呂と黍と處と繡と舞と韻なり。

讒巧之曉曉兮惑以爲咸池 優媚鞠惡兮美愈西施 謂謨言之恠誣兮反寘瑱而遠違 匿重猶以諱避兮進愈緩之不可爲 何先生之凜凜兮厲鍼石而從之 但仲尼之去舍魯兮曰吾行之遲遲 柳下惠之直道兮又焉往而可施 今夫世之議夫子兮曰胡隱忍而懷斯 惟達人之卓軌兮固僻陋之所疑 委故鄉以從利兮吾知先生之不忍 立而視其覆墜兮又非先生之所志 窮與達固不渝兮夫唯服道以守義 矧先生之悃悃兮陷大故而不貳 讒巧の曉曉たる惑て以て咸池と爲し、優媚鞠惡して美西施より愈れり、謨言を恠誣なりと謂うて反て瑱を眞て遠

く遠く、重猶を匿して以て諱避け愈緩も爲す可らざることを進む、何ぞ先生が凜凜たる鍼石を厲て從ふ、但仲尼が去て魯を捨て曰く吾が行の遲遅たる、柳下惠が道を直うし又焉くに往くとして施す可き、今夫れ世の夫子を議する曰く胡ぞ隱忍して斯を懷ける、惟達人の卓軌なる固に僻陋の疑ふ所なり、故郷を委てて以て利に従ふは吾先生の忍びざることを知る、立て其の覆墜するを視るは又先生の志所にあらず、窮と達と固に渝らず夫唯道に服て以て義を守らん、矧んや先生の悃悃大故に陥つて貳にせず。

【句解】 讒巧は楚の懷王を惑はし以て屈原の忠志を妨げし子蘭や愚婦なる鄭袖輩を指す。曉曉は惡口するの厲しきを言ふ。以爲咸池は無理な句の如くなるが、屈原が逃去に際し、「余ガ馬ヲ咸池ニ飲カヒ」の句あればなり。優媚鞠惡美愈西施 此の句は明白に鄭袖を指す、懷王は固りノロマ天子なり。愚婦の美貌西施より美なりとして寵愛し、其の媚態に魅せられ、遂に謨言 即ち訓謨微言、聖人の教を以て反て恠誣なりと謂ふに至る。瑱の如き寶玉を眞て以て燕石を拾はんと欲する類なり。重猶は重病なり、楚國は恰も重病人の如し、而も病氣にあらざる如く妝ふ、妝は乃ち諱み避る所以、病膏肓に入るときは鬼愈區の如き、和緩の如き名醫が出るも策の施爲すべき無し。而も先生 即ち屈原は凜凜として肺病の者をも畏れず、虎烈刺病の人をも怖れず、何とかして此等の病氣を治愈せしめんと針鍼、藥石を厲厲したるは聖人の謨言に従へばなり。其の屈子が從ふ所の聖人仲尼は故都の魯を去るは、去るを欲するにはあらず、止むを得ざればなり、是を以て遲遅たり。「孟子」萬章章 句下に出る文字を用ふ。柳下惠は古の清士、孟子曰く柳下惠は汗君を羞ず、小官を辭せず、進で賢を隱さず、必ず其の道を以てす、遺佚して怨ず、阨窮して憫まず、故に柳下惠の風を聞く者は鄙夫も寛なり、薄



夫も敦し。焉往可施。柳下惠の若き聖にして和なる人は、往く所として可ならざるは無し、何ぞ汗君に事ふるを爲ん、而も去らざるは其れ情と道の忍ぶべからざるものあればなり。世之議夫子。議する者は暗に揚子雲を指す、夫子は屈原なり。隱忍懷斯。此の意は反離騷に於て知るべし、子雲が屈原を議する語なり。惟達人之卓軌。是れは子厚が言ふ所、子雲が如き輩は如上の議を爲すが、其れはさうではない、達人即ち屈原が如き人が通行する卓然たる軌道は、僻陋の路を通行する輩に常に疑問と爲らるる所、常人に疑問とせられざる人は要するに達人にはあらざるなり。原は蓋し達人なり。委故郷以從利。屈原が才を展る處、楚國容れずんば他國に向ふべし、他國では必ず用ひん、何ぞ死するに及ばんやとは子雲の議なり。而も屈原は彼の如き小人が志す所は我に於て爲さざるなり。小人は利とす、我は利を問はざるなり。唯楚國を捨るに忍びざるなり。立は爲すこと無くしての意、覆墜は楚國の亡滅するを言ふ。窮と達とに於て先生が志は變渝せず、唯正道に服従して以て義を守るのみ、是を以て惴惴。即ち肺肝より出る誠意なるが故に大故。即ち死地に陥るも其の志を貳にせずとなり。池と施と違と爲と之と遲と施と疑と酌、忍と志と義と貳と酌なり。

沈璜瘞珮兮孰幽而不光 荃蕙蔽匿兮胡久而不芳 先生之貌不可得兮猶髣髴其文章 託遺編而歎喟兮渙余涕之盈眶 呵星辰而驅詭怪兮夫孰救於崩亡 何揮霍夫雷電兮苟爲是之茫茫 耀姱辭之曠朗兮世界以是之爲狂 哀余衷之坎坎兮獨蘊憤而增傷 諒先生之不言兮後之人又何望 忠誠之既內激兮抑衒忍而不長 羊爲屈之幾何兮胡獨焚其中腸 吾哀今之爲仕兮庸有慮時之否臧

食君之祿畏不厚兮悼得位之不昌 退自服以默默兮曰吾言之不行 既媮風之不可去兮懷先生之可忘

璜を沈め珮を瘞む孰か幽にして光ざる、荃蕙蔽ひ匿して胡ぞ久しく芳からず、先生の貌は得べからず猶ほ其の文章を髣髴す、遺編に託て歎喟す渙として余が涕の眶に盈る、星辰を呵して詭怪を驅る夫れ孰か崩亡を救はん、何ぞ揮霍たる夫の雷電ある苟も是の茫茫たるを爲る、姱辭の曠朗を耀やかさば世界して是を以て狂なりと爲ん、余が衷の坎坎たるを哀む獨憤を蘊んで傷を増す、諒に先生の言すんば後の人又何をか望まん、忠誠の既に内に激する抑も衒忍して長らざる、羊屈たるの幾何ぞ胡ぞ獨其の中腸を焚く、吾今の仕たるを哀む庸ぞ時の否臧を慮ることあらん、君が祿を食で厚からざらんことを畏る位を得ることの昌ならざるを悼む、退きて自ら服して默默たり曰く吾が言の行はれずと、既に媮風の去可らざる先生を懷ふの忘る可んや。

【句解】 璜は半璧なり、珮や珮の如き寶器を地中に沈瘞すとも光は遂に顯はれるとなり。荃も蕙も芳草、之を蔽匿すとも芳は遂に發すとなり。先生は今日見る可らざるも先生の風神は猶ほ其の文章に於て髣髴すとなり。遺編は離騷を曰ふ。渙は涕の流るる形容。呵星辰より以下爲狂に至る四十一字の意は明白ならざるも、「楚辭」の文を學んで其の意を寫す、天の星辰を叱呵し、地の詭怪を驅役すとも、最早楚國の崩亡を救ふに術なし。揮霍たる雷電は何に依て是の荒茫。即ち捕捉する所無きを致すや。姱辭は美文、屈原の文を指す。曠朗は明輝なり。屈原が如き立派な文章を以て世は其の至誠に出るを知らず反て以て狂と爲す。哀余は柳子が今自らを哀なり。坎坎は元來木を斫聲、鼓を撃つ聲、今以て衷心の盛に激するを譬ふ。蘊憤増傷は柳子が事を自ら言ふ、我



と境遇は稍異なるも其の情は殆ど同じ。先生不言。後人何望。先生が若し離騷と云ふものを書かずんば、後人は先生に對し、何事も望むこと無し、先生が離騷を遺せるより後人は之を讀んで彼れ此れと先生に望むなり。是の故に先生と同じく忠誠の内に激する者は黙して術忍する能はずとなり。羊は犇の誤寫、屈子が祖先の姓、幾何。犇より分家して屈と爲る已に何年を経たるや。胡獨は屈子を曰ふ。吾は柳子なり、今之爲任は柳子が今の身分を曰ふ。今の自分の仕官と、當時屈子が仕官と、時の否臧ヨシアシが非常に違ふ、屈子は君に排斥せられ流亡の身と爲りしが、今我は君の祿を食む者、然るのみならず、祿は益す多からんことを望み、位は益す高からんことを願ふ。是を思へば先生に對して慙媿する所多きなり。是の故に亦退て以て自ら正道に服従し、以て黙黙たらんと欲す。縦令ひ言ふも行れず、既に媿風。即ち媿薄の風俗、漸く盈ち遂に是の風を去る可らず。是に於てか益す以て先生が忠誠は忘る可らずとなり。光以下忘に至る一韻なり。

弔婁弘文第三十八

弔婁弘文は柳宗元が作る所。晁氏曰く婁弘字は叔、周の靈王の賢臣、劉文公が屬大夫たり、敬王十年、劉文公、弘と成周に城んと欲す、晉に告げしむ。魏獻子政に泄み、弘に説て之と諸侯を狄泉に合す、衛の彪溪曰く婁弘其れ歿せざらんか、周詩に之あり曰く天の壞る所は支ふべからず。范中行が難に及んで、周人婁弘を殺す、莊周が云ふ婁弘臍を脛る、其の血三年にして化して碧と爲る。蓋し其の忠誠然ることを語るなり。其の忠を憐んで是の文を作るなり。

有周之羸兮邦國異圖 臣乘君則兮王易爲侯 威強逆制兮鬱命轉幽 疹蠱膠密兮肝膽爲仇 姦權蒙貸兮忠勇以劉 伊時云幸兮大夫之羞 嗚呼危哉河渭潰溢兮橫軀以抑 嵩高坼侈兮舉手排直 壓溺之不慮兮堅剛以爲式 知死不<sub>レ</sub>可撓兮明章人極 夫何大夫之炳烈兮王不寤夫讒賊 卒施快於剽狡兮恒就制乎強國 松柏之斬刈兮蒼葦欣植 盜驪折足兮罷駑抗臆 鷺鳥之高翔兮襲狐喘而不食 竊畏忌以羣朋兮夫孰病百而伸一 挺寡以校衆兮古聖人之所難矧援羸以威傲兮茲固蹈殆而違安 殺身之匪予戚兮閔宗周之不完 豈成城以<sub>レ</sub>夸功兮哀清廟之將殘 嫉彪子之肆誕兮彌皇覽以爲謾

有周の羸とき邦國圖を異にし、臣君の則を乘ぎ王易て侯と爲る、威強逆制して鬱命轉た幽なり、疹蠱膠密にして肝膽仇を爲す、姦權は貸を蒙て忠勇は以て劉る、伊時云に幸するは大夫の羞なり、嗚呼危哉河渭の潰え溢ると軀を横へ以て抑ふ、嵩高坼け侈るととき手を舉げて排直す、壓溺を慮らず堅剛以て式と爲す、死すとも撓す可らざるを知て人極を明章にす、夫れ何ぞ大夫が炳烈にして王夫の讒賊を寤らず、卒に快を剽狡に施して恒として制に強國に就く、松柏の斬刈せられ蒼葦植ことを欣ぶ、盜驪の足を折る罷駑臆を抗ぐ、鷺鳥の高翔する襲狐喘て食はず、竊に畏れ忌で以て羣朋す夫れ孰か百を病んで一を伸ん、寡を挺んで以て衆に校ぶるは古の聖人の難する所、矧や羸を援けて以て傲を威す茲れ固に殆を蹈んで安に違ふ、身を殺すは予が戚に匪ず宗周の完からざるを閔む、豈城を成し以て功に夸り清廟の將に殘はんとするを哀む、彪子が誕を肆にするを嫉み皇覽を彌て以て



諷を爲す。

【句解】有周國の名に有の字を上につす、持つの義なればなり。後世有唐や有宋や有元皆是れなり、羸は衰羸、異圖は各の其の地圖を異する。臣乘王易は上下貴賤の分、顛倒したるを言ふ。逆制王が侯を制するは順、侯が王を制するは逆なり。鬱命轉幽は未詳。疹蠱は疹疾即ち熱の病と、毒蠱となり、以て災禍に譬ふ。膠密毒禍が膠の如く密にして肝膽即ち骨肉兄弟が仇敵と爲る。軒は姦に改むべし、姦權の輩は蒙貨即ち褒賞を得て、忠勇の士は反て劉る、劉は殺なり。漢禮に立秋の日獸を祭る之を獵劉と曰ふ。云幸此の如き顛倒の世に處して以て一身の幸福を計るは遂に大夫即ち 蕞弘其の人の羞とする所。河渭は渭水、是の渭水の潰溢する時、之を抑へんと軀を横ふ、溺没せざるを得んや。嵩高は嵩山、是の嵩山が坼墜する時、之を直さんと手を擧ぐ、壓死せざるを得んや、坼は坼裂、墜は墜崩なり、而も大夫は堅剛を以て己を持する者、縦令ひ死すとも人道の極致を明章にするなり。炳炳と烈烈。王は敬王、讒賊は衛彪溪が輩を指す。劉狡は惡にして恰利なる輩。強國の爲め遂に制服せらる。蒼茸は草の亂れ茂る貌。松柏が斬刈せらるれば、地上の草は自ら得意と爲る、松柏は蕞其の人、蒼茸は讒賊を指す。盜驪は古の名馬、名馬が足を折れば、驚馬は自ら頭を擡ぐ、蕞狐は妖蕞なる狐、驚鳥が高空を翔る時は身を竊て食はず、食ふを欲せざるにあらず、驚鳥が爲めに撃るる畏あればなり。此の如き時彼等は彼等の類を以て羣朋するのみ、既に百事に病む、一何ぞ伸るあらん。寡を挺するも、衆には校す可らず、而も一は伸びざるべからず、寡は挺んでざるべからず。是れ聖人も難義とする所、羸弱を援護して以て傲權に威赫せんとするは、是れ亦危殆にして平安の法に違ふ。而も以て身を殺しても己が主張を買かん

と欲するは、夸功の故にはあらず。唯宗周の威嚴を損し、清廟の殘賊せらるるを見るに忍びざればなり。彪子なる者、妄誕を肆にし、天の照覽あるを無視するは何ぞや、嫉むべきなり。侯と幽と仇と劉と羞と劉と、抑以下一に至る十句皆一韻、難以下諷に至る五句一韻なり。

姑舍道以從世兮焉用夫考古以登賢 指白日以致憤兮卒頽幽而不列 版上帝以飛精兮黷寥廓而殄絕 塌馮雲以狙愬兮終冥冥以鬱結 欲登山以號辭兮愈洋洋以超忽 心互澗其不化兮形凝冰而自慄 圖始而慮末兮非大夫之操 陷瑕委厄兮固衰世之道 知不可而愈進兮誓不偷以自好 陳誠以定命兮伴貞臣與爲友 比干之以仁義兮緬遼絕以不羣 伯夷殉潔以莫怨兮孰克軌其遺塵 苟端誠之內虧兮雖耆老其誰珍 古固有一死兮賢者樂得其所 大夫死忠兮君子所與 嗚乎哀哉兮敬弔忠甫

姑く道を捨てて以て世に從ふは焉んぞ夫の古を考へて賢を登ことを用ひん、白日を指て以て憤を致す卒に頽幽にして列ならず、上帝に版して以て精を飛せば黷として寥廓として殄絶す、塌て雲に馮て以て狙愬すれば終に冥冥として以て鬱結す、山に登て以て辭を號んと欲すれば愈洋洋として以て超忽たり、心互澗として其れ化せず形凝氷として自から慄く、始を圖て末を慮るは大夫の操にあらず、瑕に陥り厄に委するは固に衰世の道なり、不可を知て愈よ進む誓て偷うして以て自好せず、誠を陳て以て命を定む貞臣に伴うして與に友爲り、比干が仁義を以て緬として遼絶し以て羣せず、伯夷が潔に殉て以て怨莫し孰か克く其の遺塵に軌ん、苟も端誠の内に虧は耆老



と雖も其れ誰か珍とせん、古固に一死あり賢者は其の所を得ることを樂む、大夫が忠に死するは君子が與する所、嗚乎哀哉敬て忠甫を弔す。

【句解】 從世 時の風潮を逐ふ世俗と調和するに於ては、古の道も、賢人も用ふるの要なし。致憤 公憤を白日の前に致すも、白日の烈烈たる、公憤が如何に強きも列は遂に白日に及ばず、列は烈と同じ。版は「爾雅」に曰く上帝版版と、道を失ふの僻は遂に正しからず、上帝の道に背いて以て如何に精靈を飛さんと欲するも其の靈や黢黒の中に入り、殄絶するに至る。殄は盡なり滅なり。規は去と同じ、狙は飛至なり。懇は訴と同じ。雲中に入るも心は開發せず、然りとて山上にて號ぶも、眼界は洋洋たり其の號聲何處に聞えん。心も形も自由を失ひ、唯慄くのみ。始も末も幸福に生を求むるは大夫の操にあらず。進も退も、生も死も、唯誠を以てし、比干や伯夷は遠絶して世は已に遠しと雖も、其遺塵 即ち遺蹤に従ふ。得其所 君子は死するも生くるも其の道の所を得ば以て本分と爲す。大夫が生くる能はずして死に至る、其の死は道に在り、是を以て君子は君に與す、余の大夫を敬弔する所以なり。列と絶と結と忽と慄と韻、操と道と好と友と韻、羣と塵と韻、所と甫と韻なり。

弔樂毅文第三十九

弔樂毅文は柳宗元が作る所。晁氏曰く樂毅其の先は樂羊と曰ふ。燕の昭王、子之が亂にして齊大に燕を敗るを以て、昭王齊を怨み、未だ嘗て一日も其の報復を忘れず。迺先づ郭隗を禮して、而して毅往て質を委す、以

て上將軍と爲す。齊の七十餘城を下す。田單之を問す。毅誅を畏れ遂に西し趙に降る。書を以て燕の惠王に遺て曰く臣聞く聖賢の君は功立て廢せず、故に春秋に著る。蚤知の士は名成て毀れず、故に後世に稱せらる。宗元毅が功ありて而も知られず、讒を以て廢せらるるを傷む故に弔す。

大厦之驚兮風雨萃之 車亡其軸兮乘者棄之 嗚乎夫子兮不幸類之 尙何爲哉昭不可留兮道不可常 畏死疾走兮狂顧傍徨 燕復爲齊兮東海洋洋 嗟夫子之專直兮不慮後而爲防 胡去規而就矩兮卒陷滯以流亡 惜功美之不就兮俾愚昧之周章 豈夫子之不能兮無以惡是遑遑 仁夫對趙之悃款兮誠不忍其故邦 君子之容與兮彌億載而愈光 諒遭時之不然兮匪謀慮之不長 踞陳辭以隕涕兮仰視天之茫茫 苟偷世之謂何兮言余心之不臧

大厦の驚るとき風雨萃る、車其の軸を亡ぶときは乗者棄つ、嗚乎夫子不幸之に類す、尙何をか爲んや昭留るべからず道常にすべからず、死を畏れて疾走して狂顧傍徨す、燕復齊と爲て東海洋洋たり、嗟夫子の直を専らにする後を慮りて防ことを爲さず、胡ぞ規を去り矩に就き卒に陷滯して以て流亡せる、惜む功美の就ざることを愚昧をして周章せしむ、豈夫子の能くせざらんや以て是の遑遑たるを惡むこと無し、夫の趙に對するの悃款なるを仁なりとす誠に其の故邦に忍びず、君子が容與する億載に彌て愈よ光あり、諒に時の然らざるに遭ふ謀慮の長らざるにあらず、踞つて辭を陳し以て涕を隕す仰て天の茫茫たるを視る、苟も偷世何をか謂ふ余が心の臧ざるを言ふ。

【句解】

大厦建築物を大厦と言ふ。驚は種種の義あり、今虧の義、家が破れたるなり。家が破れば風雨萃、邦



が敗るれば讒者集るなり。軸を亡失する車は用を爲さず。夫子は樂毅なり。昭は昭王。不可留は昭王の死は留むべからず。道不可常。常道を守れば毅は讒者の爲め必ず殺さる。是を以て燕の惠王が國を疾走して、他國に傍徨す。毅去て後、強國なりし燕が弱國なりし齊と反對の地位と爲る。齊は遂に東海洋洋なり、專直は毅が正直に過ぎたるを言ふ。後の爲めに慮を置かざりしは正直に信を守りし故なり。始より規矩の方圖を計つて其の去就を定めなば、今日の陷滯流亡は無かりしならん。乃ち功の美なるもの有りしも表彰に遇はざりしゆゑ、愚昧の徒までも周章狼狽せしむるに至る。不能は惡事に於て毅は能くせずとなり。違違は小人の態なり。而して今毅が此の違違たる態を爲すは良に止むを得ざればなり。故に我は其の態を惡ますとなり。趙は毅を邀て之を觀津に封じ、號して望諸君と曰ふ、其の悃款。即ち深切なる情を仁なりとし、而も全く其の故邦。即ち燕を忘るるに忍びず、故に惠王が昨非を悔い、書を贈るに當り、其の答書眞實を極む。容與は從容として迫らざるなり。千億載の後も光輝あるなり。謀慮は頗る長と雖も、時代の非なるは如何とも敵すべからず。嗚乎毅は實に此の不幸の世に生れたり。之を思へば涕淚を隕して以て弔せざるを得ず。偷世。今日の常俗は何と謂ふやは知らず、余は余が心の不臧。即ち不平を言はんのみ。之の三字韻、常より以下臧に至る十二句皆一韻なり。

乞巧文第四十

乞巧文は柳宗元が作る所。晁氏曰く傳に曰く周鼎僮を鑄て其の指を吃ましむ、先王以て大巧の爲すべからざるを見すなり。故に子貢襄を抱く者に教へて桔槔を爲らしむ。力を用ふること少して功を見ること多し。襄を抱く

者之を羞づ。夫れ鳩は巢こと能はず、拙比なし。屈原曰く雄鳩の鳴き逝る、吾猶ほ其の佻巧を惡む。原誠に世の澆偽を傷む、固に拙にして以て巧を爲すを詆る、意ふに昔の然らざる者今皆然りとす甚し。柳宗元が作も亦時の奔鶩を閱て、諸を厚に歸せんことを要すと雖も、然も宗元は拙を愧づ。

柳子夜歸自外 庭有設祠者 饗餌馨香蔬果交羅 挿竹垂綏剖瓜犬牙 且拜且祈 怪而問焉 女隸進曰 今茲秋孟七夕 天女之孫 將嬪於河鼓 邀而祠者幸而與之巧 驅去蹇拙手自開利 組紆縫製將無滯於心焉 爲是禱也 柳子曰苟然歟 吾亦有所大拙 儻可因是以求去之 乃纓弁束衽促武縮氣 旁趨曲折偃僂將事 再拜稽首稱臣而進曰 下土之臣竊聞 天孫專巧于天 轆轤璇璣經緯星辰 能成文章黼黻帝躬以臨下民 欽聖靈仰光耀之日久矣 今聞天孫不樂其獨 得貞卜於玄龜 將踏石梁款天津 儷于神夫于漢之濱 兩旗開張中星曜芒 靈氣翕歛茲辰之良 幸而弭節薄遊民間 臨臣之庭曲聽

臣言 柳子夜外より歸る、庭に祠を設くる者あり、饗餌馨香蔬果交羅す 竹を挿み綏を垂れ瓜を剖こと犬牙たり、且拜し且祈る、怪で問ふ、女隸進んで曰く、今茲秋孟七夕、天女の孫、將に河鼓に嬪せんとす、邀て祠る者には幸に以て之に巧を與ふ、蹇拙を驅去して手自ら開利す、組紆縫製將に心に滯ること無からんとす、是れが爲めに禱る也、柳子曰く苟も然らんか、吾も亦大拙なる所あり、儻可ならば是れに因て以て去ことを求めん、乃ち弁に纓し衽



を束ね武を促け氣を締め、旁趨曲折僂して事を將ふ、再拜稽首して臣と稱し進んで曰く、下土の臣竊に聞く、天孫巧を天に專にして、璇璣を轉轉し星辰を經緯す、能く文章を成し帝が躬を黼黻し以下民に臨むと、聖靈を歛み光耀を仰ぐの日久し、今聞く天孫其の獨を樂まず、貞卜を玄龜に得て、將に石梁を踏で天津を款き、神夫に漢の濱に僂とす、兩旗開張して中星芒を曜す、靈氣翕歛として茲辰の良なり、幸にして節を弭して民間に薄遊す、臣が庭に臨んで曲に臣が言を聴け。

【句解】 祠は祠祭、饗は饗と同じ。饗粥即ち「カタガユ」なり。餌は餅なり。蔬果 蘿蔔、午房、甘實、鼠精の類。交羅は陳列なり。綏は冠の纓なり。犬牙は瓜を剖て陳列する貌。且拜且祈 祠者が拜祠する。之を見柳子は惟んで問ふ。女隸は小間使の類。秋孟は七月なり。天孫が河鼓 即ち牽牛星に嬪 即ち嬪嫁せんとす。邀は迎と異なる招致なり、嬪嫁せんとする途中にて招祭する、織機に巧なる法を與へらるるなり。蹇拙は俗語の不用を言ふ、其の不用なりし婦女が手自開利で器用に機織することとなる。組紆 即ち「クム」のも、縫製 即ち「ヌフ」のも自由自在に出来る、是れが爲めに禱る。苟然左様ならば、吾が大拙なる性も願くは大巧と成らんと。乃ち弁「カムリ」と枉「エリ」とを纏束し、武 即ち足を促め、氣を締め其の祠祭者の旁より趨り出で、曲折僂 身體を屈めて再拜し、稽首し臣の禮を以て進んで天帝に自す。下土之臣之の字は普通文法の上から言へば馳足なり。若し是を許すとせば河東之人も許すべし、誰か之を許さんや、今は普通文法を以て律すべからず、天に對して下土と曰ふ、專巧于天 人間には容易に與へず。輕輻は長遠の貌、又雜亂の貌、又車の多き貌と注す。今此の三義皆當らず、但璇璣とを自由自在に回らすことと知るべし。然らずんば下の經緯の

字に對を爲さず。璇璣 北斗七星の中第二を璇と曰ふ、陰刑を主る女主の位、第四を璣と曰ふ、殺害を主る。星辰は一般に擧げて言ふ。乃ち知る、輕輻日月と言うても支障無き所なり。能成文章 北斗七星二十八宿皆各の其の位に在り、經たり緯たるの道を亂さず、文章を成す所以。黼黻は天子の服の名、今以て天帝の躬を飾るを言ふ。欽は欽仰なり。光耀は一般に天の日月星辰を總括して言ふ。其獨 天孫も其の孤獨たる能はざるを婉曲の中に諷る。貞卜玄龜は「周禮」に出づ天子に係る占卜を言ふ。石梁は漢河に懸る石橋の名。款は款叩なり。天津は門の名。僂は配遇と爲ること。神夫は牽牛星。漢濱は正しく禮を行ふ處。兩旗は左旗と右旗、河鼓即ち牽牛星の左右に在り、旗は即ち星と知るべし。開張は星の名旗なれば言ふ、位に即て居ることなり。中星は北斗星なり。翕歛は靈氣が計らざりき今忽ちに見ゆ。辰之良は七月七夕、正に昏嫁の時。弭節は急行せずして暫く停玉へとなり。薄遊は一寸の間、我が民間に遊び玉へ、臣が言ふ所も聴き玉へよ。是の篇散文の體、韻を踏むも、賦の如く正確ならず、一一記せざる所以なり。變に記す河鼓は牽牛星の北、天河の東南に在る三武の事なるも、是の文として作者は牽牛に屬せしむ。普通の法を以て律せずんば可なり。

臣有大拙 智所不化醫所不攻 威不能遷寬不能容 乾坤之量包含海岳 臣身甚微無所投足 蟻適于垤蝸休于殼 龜龍螺蚌皆有所伏 臣物之靈進退唯辱 仿佯爲狂局束爲詔 吁吁爲詐坦坦爲忝 他人有身動必得宜 周旋獲笑顛倒逢嘻 己所尊昵人或怒之 變情狗勢射利抵讎 中心甚憎爲彼所奇 忍仇佯喜悅譽遷隨 胡執臣心常使不移 反人是己曾不惕疑 貶名絕命不負所



知 拊嘲似傲貴者啓齒 臣旁震驚彼且不恥 叩稽匍匐言語譎詭 令臣縮惡  
 彼則大喜 臣若效之瞋怒叢己 彼誠大巧臣拙無比 王侯之門狂吠狴狴 臣  
 到百步喉喘頭汗 睚眦逆走魄遁神叛 欣欣巧夫徐入縱誕 毛羣掉尾百怒一  
 散 世途昏險擬步如漆 左低右昂門冒衝突 鬼神恐悸聖智危慄 泯焉直透  
 所至如一 是獨何工縱橫不恤 非天所假彼智焉出 獨奮於臣恒使玷黜  
 臣大拙あり、智も化せざる所醫も攻めざる所、威も遷すこと能はず寛も容こと能はず、乾坤の量海岳を包含す、  
 臣が身甚だ微なれども足を投る所無し、蟻は埜に適き蝸は殻に休ふ、龜龜螺蚌も皆伏する所あり、臣は物の靈な  
 れども進退唯辱しめらる、佯伴すれば狂と爲し局束すれば諂と爲す、吁吁すれば詐なりと爲し坦坦すれば泰と爲  
 す、他人の身ある動ば必ず宜を得、周旋すれば笑を獲顛倒すれば、嘻に逢ふ、己が尊昵する所人或は怒れば、  
 情を變じて勢に狗て利を射て讎を抵す、中心は甚だ憎ども彼が爲め奇とせらる、仇を忍んで伴り喜び悦譽遷隨  
 す、胡ぞ臣が心を執て常に移らざらしむ、人に反して己を是とし會て惕れ疑す、名を貶し命を絶ち知る所に負  
 ず、拊嘲して傲に似たれども貴者齒を啓く、臣は旁に震驚すれど彼は且恥せず、叩稽匍匐して言語譎詭なり、臣を  
 して縮惡せしむも彼は則ち大に喜ぶ、臣若し之に效ば瞋怒己に叢らん、彼は誠に大巧にして臣が拙は比無し、王  
 侯の門は狂吠する狴狴あり、臣到ること百歩なれば喉喘ぎ顛汗す、睚眦として逆走して魄遁れ神叛く、欣欣た  
 る巧夫は徐に入て縱誕す、毛羣尾を掉し百怒一散す、世途昏險にして歩を擬すれば漆の如し、左は低れ右は  
 昂け門冒衝突す、鬼神も恐悸し聖智も危慄す、泯焉として直に透て至る所一の如し、是れ獨何ぞ工にしこ縦横に

して恤へざる、天の假す所にあらずんば彼の智焉か出ん、獨臣に嗇で恒に玷黜せしむ。  
 【句解】 大拙を如何にして大巧と爲らしめんやと問を發す。乾坤の大、海岳を包含するに我が六尺の身、足を  
 投けて休ふだに處なし。適は安心の地を曰ふ。埜は蟻冢なり。蝸は蝸牛、即ち蝸蟻なり。殼は殼と同じ、反甲  
 又兵器を盛るの具、皮にて製せる者。龜は龜の大なる者。螺は螺蚌、ハマグリなり。蚌は蚌と同じ蟹なり。佯  
 伴爲狂は「史記」殷紀に箕子、詳狂して奴と爲るの意に依る、詳は伴なり、今は佯伴は彷彿と同じ意味に見よ。  
 局束は殷勤丁寧に過ぐる事。吁吁は嘆くこと天下の爲めに嘆くなり。坦坦は寛平なる貌、以上四つの態度執  
 を執るも皆不可とせらる。進も退も唯辱らる。有身は軽く看よ、他人は動かすんば己なん。動けば必ず利に宜  
 しきなり。周旋するも、顛倒するも、獲笑逢嘻で即ち彼等が感情に適ふ。己所尊昵 茲に一人あり柳宗元を中  
 心より之を尊昵するも、若しや或る一人が宗元はイカヌ奴だと怒るときは忽ち之をイカヌ奴だと口を合  
 すに至る、是れ先きの情を變じて一方の怒る奴の勢力に狗ふなり、是れ射利に目的があればなり。抵讎は善人  
 の生活を不安ならしむるを言ふ。此等の奴は憎むべき奴と思へども如何せん、彼の勢力ある奴には奇とせらる。  
 佯喜は外部に喜を示す彼の悪人なり、此の如く大巧なる人間を一方に出しながら、胡ぞ臣 即ち宗元が心は依  
 然として大拙にして巧の方面に移らざらしむるや。反人是己 他人の意を迎へることはせず多く人に反對して  
 以て己を是とす、信する所あれば惕れ疑はず、名を貶し命を絶つも、所知に負かざるを期す、以上柳宗元が  
 自分を言ふ。拊嘲似傲 悪人の態度。貴者啓齒 勢力者の態度。震驚 悪人の態度を震驚するなり。彼の悪人  
 は恥とせざるなり。叩稽匍匐は低頭平身なり。譎詭は詐偽と同じ、心と口と反することを言ふ。縮惡 聞て旁



に在る宗元はタマラナク厭になるなり。一方の勢力者は大に喜ぶ。臣が若し此の輩の如くせば、反て彼が爲め  
瞋怒に遇はん。巧と拙との相違此の如し。狂吠は犬などの猛く吠ゆるなり。狻猊は一種動物の名、犬の類、以  
て貴人の門衛を言ふ。喉喘汗、彼の門衛が頻りに怒り狂ふ態度を言ふ。唯肝は小人喜悅の貌、又元氣、又目  
を舉げて視るの義あり、今乃ち目を舉げて視る。逆走、宗元が驚て逃去する。魄遁神叛、非常に驚駭せし貌、  
而も巧夫は王侯の門に入る縦誕自在にして、毛羣、即ち狻猊の類、尾を掉かし、容易に馴れるものの如し。擬  
歩は歩かうと足を運び出すこと。如漆、自由ならざれば言ふ。左低右昂も自由ならざればなり。門冒衝突、行  
き難きを強て行かんとす。乃ち鬼神も聖智も恐怖危懼する所以。浪蕩は以上の如き辛苦の無き人、大巧の人は  
直透、乃ち世途は昏險にあらず、縦横自在に闊歩する。是れ天が智慧を假すにあらずんば、彼れ自分としては  
決して此の如くなる能はず。喬は吝嗇、宗元には吝嗇にして恒に玷、即ち缺ることと貶黜ならしむるや、

杳杳騫騫恣口所言 逆知喜惡默測憎憐 搖唇一發徑中心原 膠加鉗夾誓死  
無遷 探心扼膽踊躍拘牽 彼雖佯退胡可得旃 獨結臣舌暗抑銜冤 孽毗流  
血一辭莫宣 胡爲賦授有此奇偏 眩耀爲文瑣碎排偶 抽黃對白唵哢飛走  
駢四儷六錦心繡口 宮沈羽振笙簧觸手 觀者舞悅誇談雷吼 獨溺臣心使甘  
老醜 鼠昏莽鹵樸鈍枯朽 不期一時以俟悠久 旁羅萬金不嚮敝帚 跪呈豪  
傑投棄不有 眉曠頰蹙喙唾胸歐 大赧而歸填恨低首 天孫司巧而竊臣若是  
卒不余昇獨何酷歟 敢願聖靈悔禍矜臣獨艱 付與姿媚易臣頑顏 鑿臣方心

規以大圓 拔去啞舌納以工言 文詞婉軟步武輕優 齒牙饒美眉睫增妍 突  
梯卷櫛爲世所賢 公侯卿士五屬十連 彼獨何人長享終天

杳杳騫騫として口の言ふ所を恣にす、逆へて喜惡を知り默して憎憐を測る、唇を搖し一たび發すれば徑に心原  
に中る、膠加はり鉗夾んで死を誓うて遷ること無し、心を探り膽を扼し踊躍拘牽す、彼佯り退くと雖も胡ぞ旃を  
得可き、獨臣が舌を結で暗抑銜冤せしむ、毗を孽き血を流して一辭宣ること莫し、胡爲ぞ賦授此の奇偏ある、眩耀  
して文を爲りて瑣碎排偶す、黃を抽て白に對して飛走を唵哢す、四を駢べ六を儷べて錦心繡口あり、宮沈羽振て  
笙簧手に觸る、觀る者舞悅して誇談雷のごとく吼ゆ、獨臣が心を溺し老醜を甘んぜしむ、鼠昏莽鹵して樸鈍枯  
朽す、一時を期せず以て悠久を俟つ、萬金を旁羅すれども敝帚を嚮す、跪て豪傑に呈すれば投棄して有れず、  
眉曠み類蹙で喙唾き胸歐く、大に赧て歸り恨を填て首を低る、天孫巧を司どる臣を竊することは是の若し、卒に余  
に昇へず獨何ぞ酷しき歟、敢て願くば聖靈禍を悔て臣が獨艱を矜め、姿媚を付與して臣が頑顏を易よ、  
臣が方心を鑿て規するに大圓を以てせよ、啞舌を抜き去て納に工言を以てせよ、文詞婉軟にして步武輕優にし、  
齒牙美を饒にして眉睫妍を増す、突梯卷櫛として世の爲に賢と所れ、公侯卿士五屬十連、彼獨何人ぞ長く享て天  
を終る。

【句解】 杳杳は重疊なり多言なり。騫騫は輕儇躁進の貌と注す、媚る時の言の形容、逆知は相手の氣を知る、  
測は測量、默して以て相手の憎と憐とを測る。而して一言發すれば徑ちに一方の中心に當る。膠は樹皮を煎て  
粘るもの「ニカハ」なり。鉗は鐵を以て物を束ぬる具。彼の大巧なる輩は人に對し、是の如く交誼が堅しと誓ふ。



口之を言ふのみならず、心膽も是の如しと相互に踊躍し、拘牽 即ち相互に引き合ふ。伴退は退去するなり。旃は何を指す、伴を指す、伴なることは知り得ずとなり。暗は暗極聲無きを曰ふ、「ナキムセブ」なり。抑は壓抑なり。一辭も満足に宣發すること能はず。賦授は天が賦授即ち配合は此の如く奇偏なるや。眩耀は人の目をクラマス文章。瑣碎は小さなこと。排偶は黄と白とを互に對すること。吟弄は徒らに生氣の無き文字を巧にすること。飛走は「淮南子」に出づ、畫の點を或は飛し、或は走らすと、今は以て文字に用ふ。四六 四字と六字と駢儷して以て文體を定む、六朝の文多く是れなり、文字ありて氣魄なきなり。錦心繡口は才人を賞讃して言ふ、宮聲は沈み、羽聲は振うて、其の文を讀めば笙簧の如く美音が響く。雷吼 雷の如く彼等の文を賞讃するなり。老醜は彼の美好に對して言ふ。闇昏莽齒樸枯朽は拙黃對白宮沈羽振と對照せしむ。悠久は千年も万年も後代を俟つ。勞維は重なるなり。敝帚は破れたる帚、自分の文章を譬ふ。豪傑は英雄豪傑にはあらず、富人とか貴人とかの類、彼等は我が文を見るの資格無し、而も呈したるが我が身の誤り、果せる哉我は眉を瞋め智を歐くの悲惨な状態を爲すに至る。天孫は司巧の智力を有する者にして我を竊せしむること何ぞ其れ醜なるや、聖靈たるもの爾の禍を悔い、我が艱辛するを哀矜せよ。而して我を妾媚ならしめよ、我が頑顔を變化せしめよ。我が三角の心をして大圓ならしめよ。咽舌を拔去して以て雄舌と代へしめよ。而して我が五體は十人以上の風采を備へしめよ。而して突梯卷鬣 即ち自由自在に圓滑にして世の爲めに賢と稱せられ、公侯卿士及び五つの屬國、十箇の連國、彼等は抑も何人ぞ長く幸福を享けて以て天年を終るを得せしむるや、天孫は其れ之を何と言ふや。

言訖又再拜稽首俯伏以俟 至夜半不得命 疲極而睡 見有青衣朱裳手持絳節而來告曰 天孫告汝 汝詞良苦凡汝之言吾所極知 汝擇而行嫉彼不爲 汝之所欲汝自可期 胡不爲之而誑我爲 汝唯知恥諂貌淫詞 寧辱不貴自適 其宜 中心已定胡妄而祈 堅汝之心密汝所持 得之爲大失不汗卑 凡吾所 有不敢汝施 致命而昇汝慎勿疑 嗚乎天之所命不可中革 泣拜欣受初悲後 釋 抱拙終身以死誰傷

言ひ訖て又再拜稽首して俯伏して以て俟つ、夜半に至るまで命を得ず、疲極して睡る、青衣朱裳して手に絳節を持ちて來告するもの有るを見る、曰く天孫汝に告げしむ、汝が詞良に苦なり、凡そ汝が言吾が極め知る所を爲る、汝唯諂貌淫詞を恥ことを知る、寧ろ貴からざることを辱や自ら其の宜に適へり、中心已に定む胡ぞ妄にして祈る、汝が心を堅うして汝が持する所を密にせよ、之を得るを大なりと爲す失ふを汗卑とせされ、凡そ吾が有する所敢て汝に施せざらん、命を致して昇らん 汝慎で疑ふこと勿れ、嗚乎天の命する所中革すべからず、泣拜欣受して初は悲み後は釋ぶ、拙を抱き身を終へて以て死すとも誰をか傷れん。

【句解】 絳節は紅色の旗印なり。天孫に事ふる所の侍女なり。其の告意は曰く汝の行は吾之を嘉す、汝が詞は眞實にして淫詞の類にあらず、汝も其の淫詞を作るを恥づ、若し此の如しとせば、貴人と爲らざるこそ反て貴きなり。汝其の宜しきを知る、知りつつ祈るは抑も何事ぞや。其の汝が心を得るを尤も大なるものとす。



位記など失ふを汗卑とせざるなり。吾が所有は必ず以て中正を持する汝に施與すべし、何ぞ之を畜まん。致命而昇 侍女が天孫の命を傳へ終て昇天し去る、是に於て自ら天の命する所は中道にして革むべからざるを悟る。天命と知らば初め悲みたるも後には憚るに至る、詩人の面目良に彰彰たるものあり。先儒曰く宗元聖賢の道を得るならば、怨を含まず、山水を詠じて、後世の爲めに書を著す筈なり。勃察なる學人は詩人の意境を知らず、怨とか恨とか言へば聖人の敵の如く論ず、迂腐到底詩を言ふべからず、憐むべきなり。

憎王孫文第四十一

憎王孫文は柳宗元が作る所 晁氏曰く離騷に虬龍鸞鳳を以て君子に託し、惡禽臭物を以て讒佞を指す、宗元之に倣ふ。

湘水之澈澈兮其上羣山 胡茲鬱而彼瘁兮善惡異居其間 惡者王孫兮善者後  
環行遂植兮止暴殘 王孫兮甚可憎 噫山之靈兮胡不賊旃 跳踉叫囂兮衝目  
宣斷 外以敗物兮內以爭羣 排開善類兮譁駭披紛 盜取民食兮私己不分  
充嗛果腹兮驕傲驩欣 嘉華美木兮碩而繁 羣披競齧兮枯株根 毀成敗實兮  
夏怒喧 居民怨苦兮號穹旻 王孫兮甚可憎 噫山之靈兮胡獨不聞 獲之仁  
兮受逐不校 退優游兮惟德是傲 廉來同兮聖囚 禹稷合兮凶誅 羣小遂兮  
君子遠 大人聚兮孽無餘 善與惡不同鄉兮 否泰既兆其盈虛 伊細大之固

然兮乃禍福之攸趨 王孫兮甚可憎 噫山之靈兮胡逸而居

湘水の澈澈たる其の上は羣山なり、胡ぞ茲は鬱として彼は瘁たる善惡居を其の間に異ればなり、惡き者は王孫善き者は後なり、環り行て植を遂しめ暴殘を止む、王孫甚だ憎む可し、噫山の靈胡ぞ旃を賊せざる、跳踉叫囂として目を衝き斷を宣し、外は以て物を敗り内は以て羣を爭ふ、善類を排開して譁駭披紛す、民の食を盜取し己に私して分たず、嗛を充て腹を果て驕傲驩欣す、嘉華美木碩にして繁し、羣披競ひ齧て株根を枯す、成を毀ち實を敗り雙に怒喧す、居民怨苦して號穹旻に號ぶ、王孫甚だ憎むべし、噫山の靈胡ぞ獨り聞ざる、獲の仁なる遂を受て校いす、退て優遊して惟德是れ傲ふ、廉來同うして聖囚れ、禹稷合して凶誅せらる、羣小遂て君子遠ふ、大人聚りて孽ひ餘無し、善と惡と郷を同じうせず否泰既に其の盈虛に兆す、伊細大の固に然る乃ち禍福の趨く攸なり、王孫甚だ憎む可し、噫山の靈胡ぞ逸じて居らしむる。

【句解】 澈澈は悠悠と同じ、水の流るる貌、茲は此方、彼は彼方、此方は鬱茂して、彼方は瘁瘦する、善と惡との相違に依て然り。乃ち惡は王孫、善は後なり、後徐に行くなり、環行は山中を回行くなり。遂植は植林を遂行して暴殘 即ち殘伐を止めしむるなり。然るに王孫は亂暴の奴なり、折角鬱茂せる山林を殘害して恥とせず、憎むべき奴なるに山靈は胡ぞ旃を賊として罰せざるや。跳踉叫囂衝目宣斷は王孫を惡媛に譬へて其の亂暴なる態度を言ふ。名を王孫に托して小人共を指すと知るべし。譁駭は喧嘩なり。披紛は紛披なり。排開は善人の類 羣を反て排斥する、不分一人で盜領して、人には分與せず、充嗛は口に一盃嚼むこと。果腹は腹に一盃食ふこと。而して驕傲 タカブリ而して驕傲 ヨロコブ。嘉華美木は悉く他人の植しもの、然るを王孫共



は勝手に之を齧み取て、株根までも枯すに至る、枯死させて其の上猶ほ怒喧す。居民は怨苦を訴へて穹旻、即ち天に向て號ぶ。天は知るや知らざるや、王孫は猶ほ亂暴を止めず。山靈も不聞に付するもの如し。猿は「サル」以て善民に比す。民は仁にして悪人に逐はるるも、之と相校酬せず、反對に退て以て我が徳を修むるに勤む。飛廉と惡來の二人の強盜が合同して聖人を牢獄に投するに至る。禹王と稷王と合同して、是の時は凶徒が誅せらる。羣小が私を遂ぐるときは君子は其の所を失す。大人が多く聚まるときは妖孽は消滅するに至る。否と泰とに因て盈と虚との別を爲す。細も大も善も惡も各の郷を同じうせざるなり。蓋し善人が福し、惡人が禍を受くるは自然の理、而して王孫の如きは惡人にして此の如く福するは何ぞ。山靈が彼等を逸居、即ち平安ならしむるは抑も恠しい哉。山と間と後と殘と韻、旻と羣と紛と分と欣と繁と根と喧と旻と聞と韻、校と傲と韻、囚と誅と違と餘と虚と趨と居と韻なり。

幽懷賦第四十二

幽懷賦は唐の山南節度使李翱が作る所。晁氏曰く翱韓愈に従て文章を爲り當時に推る、性鯁直にして議論人にする事能はず、仕て志を得ず、鬱鬱として發する所無し、宰相李逢吉を面斥し、此に坐して振はず、故に翱が自叙に云く其の交相歎く者あり、幽懷を賦して以て之に答ふ。昔歐陽文忠公嘗て云く始め余翱が復性の書を讀んで曰く此れ特に中庸の義疏のみ、作らずして可なり、意ふに翱は特に秦漢間の事を好み義を行ふの一豪のみと、最後に幽懷賦を讀むに及んで始て太息して韓愈も翱が賦に及ばずと云ふに至る。愈が羨一鳥の賦乃ち是

の賦の下に在ること知るべし。

衆囂囂而雜處兮成嗟老而羞卑 視予心之不然兮慮行道之猶非 儻中懷之自得兮終老死其何悲 昔孔門之多賢兮惟回也爲庶幾 超羣情以獨去兮指聖域之惟高 固簞食與瓢飲兮寧服輕而駕肥 望若人其何如兮慙吾徳之纖微 躬不田而飽食兮妻不織而豐衣 援聖賢而比度兮何僥倖之能希 念所懷之未展兮非悼己而陳私 自祿山之始兵兮歲周甲而未夷 何神堯之郡縣兮乃家傳而自持 稅生人而育卒兮列高城以相維 何茲世之可久兮宜永念而遐思 有二苗之逆命兮舞于羽以來之 惟刑徳之既修兮無遠邇而咸歸 當高祖之初起兮提一旅之羸師 能順天而用衆兮竟掃寇而戡隋 況天子之神明兮有烈祖之前規 割弊政而還本兮如反掌之易爲 苟廟堂之治得兮何下邑之能違 哀予生之賤遠兮包深懷而告誰 嗟此誠之不達兮惜此道而無遺 獨中夜以潛歎兮匪

吾憂之所宜

衆囂囂として雜はり處り成老を嗟し卑を羞つ、予が心を視るに然らず道を行ふことの猶ほ非なることを慮る。儻し中懷の自得せば終に老死すとも其れ何ぞ悲まん、昔孔門の賢多き惟回や庶幾と爲す、羣情を超て以て獨り去る聖域を指て惟高く追ふ、固に簞食と瓢飲とのみ寧ろ輕きを服して肥たるに駕せんや、若くは人を見望むに其れ何如ぞや吾が徳の纖微なるを慙つ、躬田らずして飽食し妻は織らずして豐衣す、聖賢を援て度を比ぶ何ぞ僥倖す



とも能く希はん、懷ふ所の未だ展ざることを念ふ己を悼んで私を陳るにあらず、祿山が兵を始めて自ら歳周甲にして未だ夷ならず、何ぞ神堯の郡縣なりし乃ち家に傳へて自ら持つ、生人を税して卒を育なひ高城を列ねて以て杆維く、何ぞ茲世の久しかる可き宜しく永く念て還に思ふべし、二苗の命に逆ふ有りしも羽を舞して以て來り、惟刑徳の既に修る遠邇無くして咸歸す、高祖の初めて起るに當て一旅の羸帥を提けて、能く天に順じて衆を用ひ竟に寇を掃て隋に載り、況や天子の神明なる烈祖の前規有るをや、弊政を刻りて本に還らば掌を反すの爲し易きが如くならん、苟も廟堂の治め得たらば何ぞ下邑の能く違はん、予が生の賤遠なるを哀む深懷を包んで誰に告ん、嗟此の誠の達せざる此の道の遺ること無きを惜む、獨中夜にして以て潛に歎く吾が憂の宜しき所にあらず。

【句解】 囂は饒舌ヤカマシキなり。老境を嗟し、卑賤を羞るなり。予の嗟する所は道を行ふ能はざるに在り。自得 聖道を實際に知るを得ば、夕死は恨む所にあらず。庶幾は近なり、回は孔子に近き人なり、凡人の羣情を超越して以て、聖人の域を高く追はんと思ふ。一簞食と一瓢飲は回の甘んずる所。輕裘肥馬は回の求むる所にあらず。若人は回を指す、回に比れば吾徳の纖微 即ち有るや無きやの小徳を慙つ、乃ち畊田せずして飽食し、細君は機織せずして豊衣を衣る、衣は名詞、衣の動詞にあらず。比度は聖賢と同格の人たらんと僥倖にも之を希ふ、我が志は茲に在るなり。念は憶念、懷は懷抱、自分が懷抱する所が發展せざることを憶念するのみ。自ら悼んで私事を陳言するにあらず。周甲は甲子が一度回周するは六十年なり。安祿山は玄宗の天寶十四年に反旗を擧げ、憲帝が元和に至るまで兵亂は止まざりしなり。神堯は唐の太祖を指す。家傳自持は祿山が河北の地を奪取して自由にするを言ふ。神堯の郡縣を彼は奪取する。税生人 百姓に租税を篤うして以て

兵卒を育ふ。世之可久生民を苦め兵卒を養ひ、以て城を列ね、劍を以て鋤に代ふ。唐の天下何ぞ久しかるべきや、爲政者は遐思せざるべけんや。二苗は三苗の誤り。楊子江や淮水の間に住して漢人種を困めたることは人の知る所。羽は戰具。嘗は唐の徳が修治せしときは三苗族の類に至るまで遠近と無く、咸唐に歸向せり。高祖は神堯なり。一旅團の弱兵即ち羸帥を以て隴西より起り、隋に載ち、遂に中原を定む、是れ天に順じ、衆を善用せし結果なり。天子は憲宗を曰ふ。烈祖は高祖、太宗等を指す。前規 好き規則が猶ほ保存して有るにあり。すや。是の故に今日の弊政 即ち悪政を剗削して改革し、本來の良政に還すことは易易として反掌の如くなり。廟堂は朝廷、今日の政府なり。下邑は今日の民衆なり。哀む予が生は賤にして政を執る身分にあらず、其の懷抱する所の旨を誰に告げんや、誠も廟堂に達する能はず、然らば則ち此の道も亦彼に遺る能はず、此の事を思へば中夜に空しく潛歎するのみ、吾が私の憂は區區たり、何ぞ憂と爲すに足らんや。卑より宜に至る一韻の作。

書山石辭第四十三

書山石辭は宋の丞相王荆公が作る所、公舒州の山谷に遊んで此の辭を澗石に書す、蓋し楚の言を學ぶ者にあらず、亦宋人の語にあらず、是を以て談する者之を尙ぶ。

水泠泠而北出 山靡靡以旁圍 欲窮原而不得 竟悵望以空歸  
水泠泠として北に出で、山靡靡として以て旁圍む、原を窮めんと欲して得ず、竟に悵望して以て空しく歸る。

【句解】 泠泠は水の流るる形容、冷は寒冷にして仄聲、泠は清冷にて平聲と知る可し。靡靡は樹木の秀美な



るを言ふ。旁圍は山が水を四周より圍むなり。水原を窮んと欲し廻り行けども竟に原に達する能はず。悵望  
残念ながら手を空うして歸る。六言の詩として上乘の作。

寄蔡氏女第四十四

寄蔡氏女は王荆公が作る所。王は文章節高を以て一世に高し、而して尤も道德經濟を以て己が任と爲し、神宗  
に遇せられ、位を宰相に致す、世方に其の爲すことあるを仰ぎ、復二帝三王の盛なるを見んことを庶幾す、而  
して王は乃ち汲汲として財利兵革を以て先務と爲して、凶邪を引用し、忠直を排擯し、躁迫強戾にして、天下  
の人をして囂然として其の生を樂の心を喪はしむ、之を卒るに羣姦虐を嗣ぎ、毒を四海に流す、崇宣の際に  
至りて禍亂極まる、王又女を以て蔡下に妻す、此れ其の予ふる所の詞なり。然れども其の言辭平澹簡遠、儵然  
として出塵の趣あり。其の平生の行事心術に視ぶるに、毫髮の肖似無し、此れ夫子の予に於て是を改むるの  
歎ある所以なるか。

建業東郭望城西堠 千嶂承宇百泉遶雷 青遙遙兮纒屬 綠宛宛兮橫逗 積  
李兮縞夜 崇桃兮炫晝 蘭馥兮衆植 竹娟兮常茂 柳蔦縣兮含姿 松偃蹇  
兮獻秀 鳥跂兮下上 魚跳兮左右 顧我兮適我 有斑兮伏獸 感時物兮念  
汝遲 汝歸兮攜幼 我營兮北渚 有懷兮歸女 石梁兮以苦蓋 綠陰陰兮承  
宇 仰有桂兮俯有蘭 嗟女歸兮路豈難 望超然之白雲 臨清流而長歎

建業の東郭より城の西堠を望めば、千嶂宇に承て百泉雷を遶る、青遙遙として纏屬し、綠宛宛として横逗す、積  
李は夜を縞うし、崇桃は晝を炫す、蘭馥たり衆く植る、竹娟たり常に茂る、柳蔦縣として姿を含み、松偃蹇とし  
て秀を獻ず、鳥は下上に跂ち、魚は左右に跳る、我を顧み我に適く、斑たる伏獸あり、時物に感じて汝が遅きこ  
とを念ふ、汝歸らば幼を攜へよ、我北渚を營む、歸女を懷ふことあり、石梁は苦を以て蓋ふ、綠陰陰として宇に  
承たり、仰て柱あり俯して蘭あり、嗟女歸らば路豈難らんや、超然たるの白雲を望み、清流に臨んで長歎す。

【句解】 建業は建康、今日の江蘇省江寧府、北宋の都は大梁とすれば、王の別墅が建業に在りしものなり。  
堠は「チカ」城の一段高くなりし處、女が其の夫と共に棲住する處。千嶂は羣山が堠宇を承け、百泉が雷 即ち  
屋水の流るる如きなり。青色は遙遙 綠色は宛宛、一方は縦に纏屬し、一方は横に重逗す。而して多くの李  
スモモは夜も縞く、高き桃は晝も炫す如く紅し。而して蘭は馥馥たり。竹は娟娟たり。柳は蔦縣たり。松は偃  
蹇たり。動物の方は鳥は下方も上方も共に跂て行き、其の悠然たる體度は愛すべし。魚は池中にて左右に跳る。  
顧我兮適我 自分で自分が太だ適するの感多し。斑は「マダラ」伏獸は何の毛物なるや知らず、犬と見ても可し。  
時物は花の開き、鳥の啼く、魚の跳る、竹の娟娟皆其の時を得たるを言ふ。汝は何故に其の歸寧するの遅きや、若  
し歸寧の時は必ず孫を攜て來よ、我は女を俟つに北渚に臨んで一亭を設く。石梁は石の橋梁なり。苦は音「セ  
ン」訓「トマ」草にて製し屋を蓋覆するもの、風雨共に防ぐが爲めなり。而して高處には桂樹あり、低處には蘭  
蕙あり。歸は女として父の安否を問ふに用ふ、彼と離れて此に歸るにはあらず。乃ち超然と登る白雲を望んで、  
以て清流に臨み、女を思つて長歎するなり。堠と雷と韻、逗と晝と茂と秀と右と獸と幼と女と宇と韻、蘭と難



と歎と韻なり。嗚乎荆公は公愛を知らずして、唯私愛を知るもの、私愛は禽獸も知る所、公愛は禽獸の知らざる所、此の禽獸の知らざる公愛を佛教に於て平等の愛と謂ふ。儒に之を博愛と謂ふ。荆公は到底禽獸に近き人にて、孔夫子の仁愛を解せざる人なり。朱子の之を稱するは表面のみ、内心は暗に之を憎むものなり。

服胡麻賦第四十五

服胡麻賦は宋の翰林學士蘇軾が作る所、蘇は所謂東坡先生なり。朱子曰く國朝文明の盛んなる、前世及ぶこと莫し、歐陽文忠公、南豐曾公鞏より公と三人相繼ぎ迭に起る、各の其の文を以て、名を當世に擅にす。然も皆傑然として自ら一代の文たり、楚人の賦に於て未だ數數然たる者あらず、獨公鞏より東するとき、道屈原が祠下に出づ、嘗て之が賦を爲て以て楊雄を詆て原が志を申ぶ。然も亦専ら楚語を用ひず、其の輯の亂に乃ち曰く君子の道は全きことを必とせず、身を全うし害に遠ざかること亦或は然らん、嗟子區區として獨其の難きことを爲す、適中ならずと雖も要するに以て賢なりと爲す、夫れ我何ぞ子が安ずる所を悲まんと。是れ原が心に發すること有りと爲す、而も其の詞氣亦冥會する者あるが若し、它の詞は則ち唯此の賦を橋の頰に近しと爲す、故に其の篇を録すと云ふ。

我夢羽人頤而長兮 惠而告我藥之良兮 喬松千尺老不僵兮 流膏入土龜虵藏兮 得而食之壽莫量兮 於此有草衆所嘗兮 狀如狗蝨其莖方兮 夜炊晝曝久乃滅兮 伏苓爲君此其相兮 我興發書若合符兮 乃淪乃烝甘且腴兮

補填骨髓流髮膚兮 是身如雲我何居兮 長生不死道之餘兮 神藥如蓬生爾廬兮 世人不信空自劬兮 搜抉異物出怪迂兮 槁死空山固其所兮 至陽赫赫發自坤兮 至陰肅肅躋於乾兮 寂然反照珠在淵兮 沃之不滅又不燔兮 長虹流電光燭天兮 嗟此區區何與於其間兮 譬之膏油火之所傳而已耶 我羽人を夢に頤として長し、惠ありて我に藥の良を告ぐ、喬松千尺にして老て僵れず、流膏土に入て龜蛇のごとく藏る、得て之を食へば壽量り莫し、此に草あり衆の嘗る所、狀狗蝨の如く其の莖方なり、夜炊晝曝し久して乃ち滅し、伏苓を君と爲せば此れ其の相なり、我興て書を發せば符を合せたるが若し、乃ち淪乃ち烝て甘して且映たり、骨髓を補填して髮膚に流る、是の身雲の如くにして我何か居ん、長生不死は道の餘、神藥蓬の如く爾が廬に生ず、世人信せず空く自ら劬む、異物を搜抉して怪迂を出す、空山に槁死すること固に其の所、至陽赫赫として坤より發す、至陰肅肅として乾に躋る、寂然として反照すれば珠淵に在り、沃けども滅せず又燔ず、長虹流電光天を燭す、嗟此の區區たる何ぞ其の間に與らん、之を膏油に譬るに火の傳ふる所のみや。

【句解】 羽人は仙人、羽化登仙なぞと云うて、飛行自在なるより來る稱。頤も長と同じ、惠は恩惠、流膏は松脂のこと、松脂が土に入て龜蛇と同じく藏る、其の松脂を發掘して食ふ者は壽が長しとの説。於此は此の地に於てなり、草即ち胡麻を生ず。衆人が嘗めんと欲する者は是れなり、而して其の草の狀は狗蝨 即ち胡麻の如く、其莖は角を有す。夜炊晝曝は胡麻を製する方法。久乃滅 滅は善、度度炊ぎ、度度曝すを以て善と爲す。伏苓は即ち松脂、伏靈、伏兔、不死麵の異名あり、之を製して飲めば人の血を増す功ありと曰ふ。此の伏苓を



君主に譬ふれば胡麻は其の宰相に譬ふ可しとなり。以上羽人が夢中に教示せし所、乃ち夢覺て起て醫書を發て  
檢すれば果して符節を合する若く誤らず、乃て之を淪煮し、之を蒸烘し、而して其の味甘腴に至る、之を食  
へば骨髓に血の足らざるを補填し、且其の髮膚を美麗にする功あり、善く服用する者は一身が雲の如く軽く何  
の處にか居らざらん。長生不死などと言ふも畢竟は此の普通なる養生法を知りし後の事なり。所謂道之餘  
前平易の養生法をすら忘れて長生不死の藥などと噪ぐ輩は良に笑ふべしとなり。試みに看よ神藥は東海に求むる  
に及ばず、蓬「ヨモギ」の如く無數に爾廬に生ずるにあらずや。然るに多くの世人は此の平易の藥あるを信ぜず  
して、空しく自効勞して海に山に異物を搜索して反對に怪迂の物を出すに至る。其の上空山を出る能はず山  
中に槁死する愚人あるを見る、其れば當然なり、唐の憲宗は怪迂の藥を一回飲ば足るに、一回に七回分を飲み、  
目を白黒して死んだ様な事は皆笑ふべきの至極なり。看よ至陽 即ち太陽は赫赫たる光輝を以て坤 即ち地よ  
り發するにあらずや。至陰 即ち太陰は肅肅たる冷容を以て乾 即ち天に躋るにあらずや。而して寂然と反照  
即ち黃昏に至れば淵に珠の散する景色あるにあらずや、千古萬古此の如し、物は自然なり、不自然を貴しとせ  
ざるなり、不滅不燔 此の如き大自然の状態は何者も之を滅燔する能はず。長虹流電 ニジなども夕陽に現出  
して其の光は天を燭して美麗なり。區區たる人間が其の天地の間に在て、何ぞ大自然の事に與からんや。譬之  
膏灼火之所傳而已 人間を以て彼の大自然に譬ふるに油で火を點する如きもののみ、油が盡きれば火も亦滅す  
る、是を以て無理をせず養生法を講じ、人間の身體に適應する彼の胡麻の油でも飲んで以て百年を保たんと意  
なり。東坡先生の面目躍如たるものあり、餘子の如く憂愁を言はざる所に 味有て存す、長より相に至る九句

一韵、符と腴と膚と韵、居と餘と廬と劬と迂と韵、坤以下皆一韵なり。

毀壁第四十六

毀壁は豫章の黃太史庭堅が作る所、庭堅は即ち山谷先生なり、山谷能詩を以て名あり、尤も楚辭を喜ぶ、然れ  
ども其の奇に意あるの甚しきを以ての故に論者は以爲らく詩に若かずと、獨此の篇其の女弟の爲めに作る、  
蓋し歸て愛を其の姑に失ひ、死して猶ほ水火を免れず、故に其の詞悲哀を極めて、爲作するに暇あらず、乃ち  
他語に賢りと爲す。

毀壁兮隕珠 執手者兮問過 愛憎兮萬世一軌 居物之患兮固常以好爲禍  
羞桃荊兮飯汝 有席兮不嬾汝坐 歸來兮逍遙 采芝英兮禦餓 淑善兮清明  
陽春兮玉冰 畸於世兮天脫其纓 愛骨人兮生冥冥 棄汝陽侯兮遇汝曾不如  
生 未可以去兮殆其雛嬰 衆雛羽翼兮故巢傾 歸來兮逍遙 西江浪波何時  
平 山涔涔兮猿鶴同社 瀑垂天兮雷霆在下 雲月爲晝兮風雨爲夜 得意山  
川兮不可繪畫 寂寥無朋兮去道如咫 彼幽坎兮可謝 歸來兮逍遙 增膠兮不

聊此暇

壁を毀ち珠を隕す、手に執る者の過を問ふ、愛憎や萬世一軌、物の患に居る固に常以て好く禍を爲す、桃荊を羞め  
て汝に飯せしむ、席あり汝を嬾して坐しめず、歸來して逍遙せよ、芝英を采て餓を禦ぐ、淑善にして清明なり、



陽春が玉氷、世に崎にして天其纒を脱す、骨人を愛して生冥冥、汝を陽侯に棄つ、汝に遇すること曾て生の如くならず、未だ以て去る可らず其の雛嬰を殆うす、衆雛羽翼ありて故巢傾く、歸來して逍遙せよ、西江の浪波何時か平かならん、山灣灣として猿鶴社を同うす、瀑天に垂て雷霆下に在り、雲月晝爲り風雨夜爲り、得意の山川繪畫すべからず、寂寥として册無し道を去ること咫尺の如し、彼の幽坎や謝す可し、歸來して逍遙せよ、増膠や此の暇を聊まざる。

【句解】 璧珠を毀隕したるときは、其の責任者を問ふは普通なり、我が愛する女は即ち璧珠にも譬ふべし。之を殺したる姑の過は問はざるべからず。愛憎は萬世一軌、人類に愛あり憎あるは自然にして何の世も變ずること無し。物之患は物質に就て患が起る、言はば財産、初めは姑も憎しと思はざりしも財産其の物を他家より來る者が自由にするを見れば、遂に之を憎むの念を生ずるに至る。此の財産の好が却て禍根と爲て殺されしに至る。桃苑は帯木なり、祭祠する時先づ桃苑を以て不淨を掃除す。有席兮不嬪汝坐、是の七字は一字一涙なり、席は設けたるも、汝は現世の人にあらす、何ぞ肉身の來りて此に坐するを得んやとなり。セメテ靈魂なりとも歸來して逍遙せよ。世英を采て以て餓を禦けよ。淑善清明は生前の女が精神的の美を言ふ。陽春玉氷は生前の女が容姿的の美を言ふ。崎於世、世に凡の物でなければ満足に生きる能はず。世に崎なる物は非業に死するの已むことを得ざるを言ふ。天、即ち自然が人間に纏ツナギ留る絲を脱ホドキたりとなり。骨人は死人、天は崎を好ず、遂に姑と稱する者を借りて人を殺さしめ、其の死するを愛する反對に生の間は冥冥たり。悲痛極まる文字とす。陽侯は水神の名、水葬なら禮にもある、恐くは死骸を水中に投棄せしものならん。不如生、生前は

憎しと思ふも、水に投ずる程度には虐待せざりしとなり。未可以去、生きて居る中に故家に歸らざりしは其の雛嬰、即ち幼児が可愛ければなりならん。己去らば幼児の身の殆を思へばなり。衆雛羽翼は幼児が生長して親の面倒が少くなりしを譬ふ、而かも是の時故巢、即ち母は死して此の世の人にあらす、請ふ魂兮歸來せよ。西江の浪波、平かなるときを俟つも其は能はず、幸に今日來れよ。山は依然として灣灣たり。猿鶴は依然として同社なり。瀑布は垂天にして雷霆は脚下にあり。雲月、風雨は晝夜を交換す。得意山川、女が生前に得意として此の山川を賞觀せしものならん。其の人無し、繪畫すべからず。寂寥無朋、道山は寂寥として册無けん、世間と汝を埋むる幽坎とは實に咫尺の如し。請ふ歸來して此に逍遙せよ。幽坎の主人公もあらば其の旨を謝して早く歸來せよ。増膠の七字に就て朱子曰く疑ふらくは誤字あらんと。後賢の發明を俟つ。過より餓に至る一韻、明より平に至る一韻、社より暇に至る一韻なり。

秋風三疊第四十七

秋風三疊は原武の邪居實が作る所、居實は怨の子、少きより逸才あり、大に蘇美諸公の爲めに稱許せらる、而して不幸蚤く死す、其の此を作る時年未だ弱冠ならず、然も其の言を味ふに、神會天出、意を経ざるが如くにして、而して一字も今人の語を作すこと無し、同時の士、號して前輩と稱して、古學を好むに名ある者、皆能く及ぶこと莫し、天をして之を壽あらしめば、則ち其の就す所、豈量るべけんや。

秋風夕起兮白露爲霜 草木樵悴兮竊獨悲此衆芳 明月皎皎兮照空房 晝日



苦短兮夜未央 有美一人兮天一方 欲往從之兮路渺茫 登山無車兮涉水無

航 願言思子兮使我心傷

秋風夕に起て白露霜と爲る、草木憔悴して竊に此の衆芳を悲む、明月皎皎として空房を照す、晝日短を苦んで夜未だ央す、美なる一人あり天の一方に、往て之に従んと欲すれば路渺茫たり、山に登らんとすれば車無し水を渉に航無し、願うて言に子を思ふ我が心を傷しむ。

秋風淅淅兮雲冥冥 鳴臯畫號兮蟋蟀夜鳴 歲月徂邁兮忽如流星 少壯幾時

兮老冉冉其相仍 展轉反側兮從夜達明 悵獨處此兮誰適爲情 長歌激烈兮

涕泣交零 願言思子兮使我心怆

秋風淅淅として雲冥冥たり、鳴臯畫號び蟋蟀夜鳴く、歲月徂邁いて忽として流星の如し、少壯幾時ぞ老冉冉として其れ相仍る、展轉反側して夜より明に達す、悵として獨此に處し誰を適として情を爲さん、長歌激烈として涕泣交も零つ、願うて言に子を思ふ我が心をして怆しむ。

秋風浩蕩兮天宇高 羣山逶迤兮溪谷寂寥 登高望遠兮不自聊 駕言適野兮

誰與遊遨 空原無人兮四顧蕭條 猿狖與伍兮麋鹿爲曹 浮雲千里兮歸路遠

遙 願言思子兮使我心勞

秋風浩蕩として天宇高し、羣山逶迤として溪谷寂寥たり、高きに登て遠きを望み自ら聊せず、駕して言に野に適きて誰と與に遊遨せん、空原人無くして四顧蕭條たり、猿狖と與に伍し麋鹿を曹と爲す、浮雲千里歸路遠く遙なり、

願うて言に子を思ふ我が心を勞せしむ。

【句解】

疊は同じやうなことを繰り返して三に及べば三疊と曰ふ、後世次韻の流行せしより十疊二十疊を註する者あり、大雅の道亡ぶに近し、宋人は其の種を詩の罪人なり、是の三首は漢魏の古風を學んで稍見るべきものあり、秋風に托して人が其の蕭條の氣に耐へざるを歌ふ。一字一句解釋を要せずして意義明白なり。

鞠歌第四十八

鞠歌は横渠張夫子が作る所、孟子没してより聖學其の傳を得ず、是に至りて蓋し千有五百年、夫子蚤に范文正公に従つて中庸の書を受け、中歳老佛諸家の説に入して采獲すること十有餘年、既に自ら以爲らく得たりと。晩に二程夫子を京師に見て、其の論説を聞き警することあり。是に於て盡く異學を棄てて醇如たり。嘗て神宗に見えて治道の要を顧問せらる、即ち漸く三代に復するを以て對ることを爲す、退て宰相と議して合はず、因て病と謝して歸る、訂頑正蒙等の書數萬言を著はす。問古樂府詞を閱して、其の語の卑を病み乃ち更に此を作て以て自ら見し、并て以て二程に寄すと云ふ。

鞠歌胡然兮邈余樂之不猶 宵耿耿其不寐兮日孜孜焉繼余乎厥修 井行惻兮王收 曷賈不售兮阻德音其幽幽 述空文以見志兮庶感通乎來古 蹇昔爲之純英兮又申其以告 鼓弗躍兮靡弗前 千五百年兮寥哉闕焉 謂天實爲兮則吾豈敢嗟 審己茲乾乾



鞠歌胡ぞ然く遼として余が樂の猶からず、宵歌歌として其れ寐す日に孜孜として焉んぞ余を厥の修に繼ん、井行して王の收るを惻む、曷ぞ賈ふもの、の售ざる德音を阻んで其れ幽幽たり、空文を述て以て志を見す庶はくは來古に感通せん、昔爲の純英を奪り又申申として其れ以て告ぐ、鼓も躍らず魔も前まず、千五百年變なる哉闕焉、謂ふに天實に爲す則ち吾豈敢て嗟せんや、己を審にするに茲乾乾たり。

【句解】鞠は陽鞠の戲、革を以て圓囊を爲り、中に實るに毛髮を以てし、蹙み踢るを以て戲と爲す、手毬と同じ、今は是の物を借り來りて道の行はれざるを慨して作る。胡然は何故に鞠歌を爲りて歌ふぞや。遼は遠遼。余が樂は普通人が鞠を踢て樂むとは猶じからず。歌歌は心目共に澄むこと、繼厥修は楚辭の前修に繼がんと同じ、前賢の善修に繼ぐ能はざるを悲しむ。井行惻王收、井水は奇麗なり、一般に世に用ふべきに、王のみ之を收むるを惻む、既に賈者あり、售者無かるべからず、今は賈はんと欲する者あるも、售る者無きなり、其れは德音即ち王の本領を阻害する人あればなり。幽幽、遂に道は幽幽と暗昧に赴きつつある。空文は此の鞠歌を言ふ。售られざるを知れども我が志は道を售らんと欲するにあり、欲するにあるも售られざれば空文なり。空文とは言へ來古の知己其の人には感通するであらう。奪は奪取なり、昔爲は昔賢の所爲。純英は正純美英極めて難套ならざるもの。申申は俗語の重ね重なり。鼓弗躍魔弗前、鼓打てば躍るもの、魔けば前むもの、然るに反對に鼓打つも躍らず、魔も前まざるは人に於て道を求むる念無ければなり、道の暗きを意とせざればなり。其の道の暗きこと今に至り千五百年、良とに寥焉なり、闕焉なり。然りと雖も此の如きは天の實爲する所、之を嗟するのみでは益なし、是を以て我は己を審明にし、乾乾として相勤むるのみ。猶と修と幽と韻、古と告と韻、

前と焉と乾と韻なり。

擬招第四十九

擬招は京兆藍田の呂大臨が作る所、大臨學を程張二子の門に受け、其の詞を爲くる、蓋し以て夫の放心を求め、常に復するの微意を寓す、特に詞賦の流たるのみに非ず、故に張子が言に附して以て是の書の卒章と爲し、藝に遊ぶ者をして歸宿する所あるを知らしむ。

上帝若曰哀我人斯 資道之微肖天之儀 神明精粹降爾德兮予無汝欺 視聽  
食息皆有則兮予何敢私 顧弱喪以流徙 返故居兮謬迷 罔豚放馳散無適歸  
蟻慕羊羶聚附弗離 予哀若時魂莫予追 乃命巫陽爲予招之 陽拜稽首敢不  
祇承上帝之耿命 退而招之以辭 辭曰 魂乎來歸魂無東 大明朝生兮啓羣  
蒙 萬物搖湯兮隱以風 遷流正性兮失厥中 魂兮來歸魂無南 離明獨照兮  
萬物瞻 文章煥發兮不可緘 夸淫侈大瞻志弗厭 魂兮來歸魂無西 日入昧  
谷兮草木萎 實落材成兮雖有時 志意彫謝兮與物衰 魂兮來歸魂無北 幽  
都闇黯兮深蔽塞 歸根獨有兮專靜默 有心獨藏兮吝爲德 魂乎來歸魂無上  
清陽朝徹兮文惚恍 絕類離羣兮入無象 杳然高舉兮極驕亢 魂兮來歸魂無  
下 素位安行兮以時舍 沉濁下流兮甘土苴 固哉成形兮不知化 魂兮來歸



反故居

上帝若曰く哀らくは我人、資道の微肖天の儀、神明精粹爾に徳を降せり予汝を欺くこと無し、視聽息皆則あり予何ぞ敢て私せん、願に弱喪にして以て流徙す、故居に返らんとすれば謬迷す、罔豚放馳すれば散じて適歸すること無し、蟻羊羶を慕うて聚附して離れず、予哀らくは若時魂予を追ふこと莫を、乃ち巫陽に命じて予が爲めに之を招かしむ。陽拜稽首して敢て祇で上帝の命を受けざらんや、退て之を招くに辭を以てす、辭に曰く、魂や來歸せよ魂東すること無かれ、大明朝に生じて羣蒙を啓く、萬物搖湯して隠以て風ふく、正性を遷流して厥の中を失ふ、魂や來歸せよ魂南すること無かれ、離明獨照して萬物瞻る、文章煥發して緘す可らず、夸淫侈大にして瞻志厭かず、魂や來歸せよ魂西すること無かれ、日は昧谷に入て草木萎む、實落材成ること時ありと雖も、志意彫謝して物と衰ふ、魂や來歸せよ魂北すること無かれ、幽都闇黯として深く蔽塞す、歸根獨有て専ら靜黙なり、獨藏するに心ありて徳を爲るに吝なり、魂や來歸せよ魂上ること無かれ、清陽朝に徹して文惚恍たり、類を絶ち羣を離れて無象に入る、杳然として高舉して極めて驕亢、魂や來歸せよ魂下すること母れ、位に素して安行し時を以て舍つ、下流に沉濁して土直を甘んず、固き哉成形は化するを知らず、魂や來歸して故居に反れ。

【句解】 上帝が巫陽に人が人たる道を踏まざるを慨して示せるもの。若日は其の言はるる所、箇様箇様なりとの意。我人は一般の人なり。斯は文の語助。資道之微、道に因て我が資とする力は極めて微弱たり。肖天は字の如く天に肖るなり、人の徳は天と異らず。天に仁義禮智の徳あれば人亦是の四徳を備ふ。天人異ならず、是を以て肖天と曰ふ。儀は儀容なり。神明精粹、雜駁ならざる純一の徳なり。爾は我人を指す。予は上帝自ら

云ふ。汝は我人なり。視も聽も食も息も皆規則整然たるものなり。私は勝手、予の勝手に爲したるものにあらず。弱喪は我人の弱喪、其の則を守るの力が弱喪にして汝等は道に返るを忘れて流徙するなり。故居は眞の徳、眞の道、道に返らんと欲するも猶謬迷するは全く力微なればなり。罔は畜を養ふの閑、牢なり、罔中に養ふ豚は無事なるが一たび放馳すれば四散して又適歸する所無し、人心の放馳して道に復らざることを譬ふ。羊羶は羊の脂なり。蟻族は臭氣の甚しき羊脂を慕うて嘗て之を離れず、人の邪徑に入て歸るを知らざるに譬ふべし。予は上帝、魂は邪徑に入て歸らざる人の魂、是の如き人は遂に上帝を追慕すること莫し、是に於てか之を哀むの餘、巫陽に天命を下し之を招致せしむ。拜は手を以て禮を表すること。稽首は首を以て禮を表すること、首地に至り稽留すること少時するなり。耿命は上帝の明命なり。敢て承諾せざらんや。招之は即ち人の放心を招き返すなり。來歸は人の人たる常性に來歸せよとなり。無東、東方に迷ふ者を第一に招く。大明は太陽日輪を指す。羣蒙は佛教の羣萌とは異なる、四方の暗黒を啓くとなり、佛教の羣萌は人を指す。搖湯は「ウゴク」なり。隠は明かに此處と定かならざれば言ふ、何處と無く風が吹くとなり。遷流正性失厥中、人の性は善にして正、其の之を遷流するに依て中庸を失ふ。離明は南方なれば言ふ。瞻は瞻視なり。萬物盡な明白なるを言ふ。緘は緘索「ナハ」名詞、動詞は「カラゲル」なり。煥發せる文章を緘す能はざるを言ふ。夸は夸奢「オゴル」なり。侈は侈泰「ユタカ」なり。弗厭は正性に背く夸淫侈大に走りて曾て厭かざるなり。昧谷は「淮南子」に出で日の入る處とす。草木萎は即ち正性が萎を譬ふ。實落は木の實が落るなり。材成は用に立つ程に成木せるなり、其れは必ず時あり。如何せん志意は彫謝して萬物と共に衰へ、亦回復の期無し。莫北、此に至りて東西南北盡な行く



こと莫かれと禁止す。幽都先輩曰く北を指すと、北方は闇闇として明開の物無し。歸根は己が心の根本を言ふ。獨有靜默、活動して力を他に與へざるを言ふ。吝爲徳、吝は慳吝、公徳を施爲するを惜む、所謂個人主義を張る人を言ふ。清陽は清澄なる太陽の意、朝旦に徹照して、文は日光の文章、惚恍は恍惚の倒用、光が徹して判然と見る能はざるを言ふ。絶類離羣入無象、杳然高舉極驕亢、是れ皆無上の注釋なり、魂が若し妄りに上すれば正性と又反對する、驕亢は正性に於て不可なるものなり。然りと雖も又母下下に行くも不可なり、上を禁するから、それなら下は可からうと言うてはいかん、下も亦いかん事が多し、下とは是の地上を言ふ、平たく言へば人間なり、上の天上たるは勿論なり。素位、素は居と同じ、宰相の位に素し、又は大臣大將の位に素し以て安行するも、以時舍、乃ち長く素する能はず、時を以て舍てざるを得ず、時に用ひられざるを言ふにあらず、其の用ひらるるの長からざるを言ふなり。土直は查滓なり、糞草なり、糟粕なり。『莊子』曰く土直以て天下を治む、一に曰く眞物ならざるなり。「カス」を以て第一義とす、正性を説く道以外は皆下流なり、沉濁なり、土直なり。固哉は不知化に係る文字、故に「マコトナルカナ」と訓まず、「カタイカナ」と訓む。成形、人は人としての形は兎に角成したるもの、而かも化するを知らずと、聖と化し、賢と化するの謂なり。是を以て早く故居、即ち本然の正性に復り、東西南北及び上下に流徙することを止めよ。斯と儀と欺と私と馳と離と追と之と辭と韻、東と蒙と風と中と韻、南と瞻と緘と厭と韻、西と萎と時と衰と韻、北と塞と默と徳と韻、上と恍と象と亢と韻、下と舍と直と化と韻、居は下の句へ移る。

盍歸休兮復吾初、範博厚以爲宮兮戴高明以爲廬、植大中以爲常産兮蘊至和

以爲厨、動震雷以鼓听兮守良山以止聒、秉離明以爲燭兮禦巽風以行車、守吾坎以禦侮兮開吾兌以進趨、資糧械器惟所用兮何物之不儲、四方上下惟所之兮何適而非塗、雖備物以致用兮廓吾府而常虛、縱奔驚以終日兮燕吾居而晏如、惟冥惟寂疑有疑無、其尊無對其大無餘、曷自苦兮一方拘、魂兮來歸返故居

盍ぞ歸休して吾が初に復らざる、博厚を範して以て宮と爲し高明を戴て以て廬と爲し、大中を植て以て常の産と爲し至和を蘊めて以て厨と爲し、震雷を動かして以て听を鼓し良山を守りて以て聒を止め、離明を秉て以て燭と爲し巽風を御して以て車を行き、吾が坎を守りて以て侮を禦ぎ吾が兌を開きて以て進み趨る、資糧械器惟用ふる所のまま何れの物か儲へざらん、四方上下惟之く所のまま何くに適として塗にあらざらん、物を備へて以て用を致すと雖も吾が府を廓にして常に虚なり、縱に奔り驚て以て日を終へ吾居を燕じて晏如たり、惟冥惟寂有と疑ひ無と疑ふ、其の尊對無く其の大餘無し、曷ぞ自ら苦んで一方に拘る、魂や來歸して故居に返れ。

【句解】 盍の字は何と不との二字を結合したるもの。吾初は本然の正性。本性の博厚は地の幅員を譬ふ。本性の高明は天の氣象を譬ふ。宮廬は字の如し。大中は小偏の反對。至和は逆戻の反對。産厨は之を養ふの本源。震と良と離と巽と坎と兌と前の乾と坤とを加て易の八卦と曰ふ。震雷は東方の活動、良山は東北の活動、離明は南方の活動、巽風は東南の活動、坎水は北方の活動、兌澤は西方の活動、要するに擬招の一文義を易に取りて毫髪も他のものを雜へず、其の放心を求むと言ひ、其の常性に復すと云ふ。爾徳と言ひ、有則と言ひ、悉く



易に由る。所謂天地ありて然して後萬物あり、萬物ありて然して後男女あり、男女ありて然して後夫婦あり、夫婦あり然して後父子あり、父子ありて然して後君臣あり、君臣ありて然して後上下あり、上下ありて然して後禮義措く所あり、此等の理想を主張して以て正を得たりと爲すが宋儒の喜ぶ所、是の擬招一篇全く是れなり。要するに義理の文としては可なり、詞賦の上から視るときは前前の多人に比して其の下ること數等、朱子は其の道を説く上より之を讀す、余は詞賦の上より之を毀つ、讚毀共に呂に於て何かあらん、一一注するの要なし。居と初と廬と厨と晒と車と趨と儲と塗と虛と如と無と餘と居と一韻なり。

楚辭何喬新序

楚辭八卷は紫陽の朱夫子が校定する所、後語六卷は則ち夫子晁氏が集録する所を以て刊補し定め著す者なり。蓋し三百篇の後、唯屈子が辭、最も古に近しと爲す。屈子人と爲り、其の志潔、其の行廉、其の夸辭逸調、駕に乗り虬に駕し、埃壘の表に浮游するが若し。宋玉、景差より以て漢唐宋に至りて作者繼ぎ起る、皆其の架鑿を宗として能く之に尙ふること莫し、眞に風雅の流にして詞賦の祖なり。漢の王逸嘗て之が章句を爲る、宋の洪興祖又之が補注を爲くる。而して晁無咎又古今詞賦の騷に近きものを取て以て之に繼ぐ、然かも王洪が注は文に隨て義を生ず、未だ能く作者の心を白にすること有らず、而して晁氏が書は辯說紛拏にして亦義理を發する所無し。朱子豪傑の才、聖賢の學を以て、宋の中葉に當て權奸に阨て、施することを得ざるに迄て、嘗屈子が楚に在るのみならず、而かも當時の士大夫、世媒を希うて進む者、從つて之を沮み之を排す、目して僞學と爲す、子蘭上官

が徒に視ぶれば殆んど焉よりも甚しきこと有り、然かも朱子方に且二三の門弟子と道を武夷に講じ、溪雲山月の間に容與す。自處する所以の者、蓋し屈子が能く及ぶ所にあらず。間嘗て屈子が辭を讀で、所謂主く者は余及ばず、來る者は吾聞かずと云ふに至り、深く之を悲しみ、迺ち王氏晁氏が書を取て刪定して以て此の書を爲る、又之が注釋を爲り、其の賦比興の體を辯じて、其の悲憂感悼の情を發す。是に繼て作者の心事天下後世に照然たり。予少時此の書を得て之を讀み、其の詞調鏗鏘、氣格高古を愛し、徐かに其の憂愁鬱邑、纏綿惻怛の意を察するときは又悵然として悲を興し、三び其の辭を復して自ら已む能はず、顧ふに書坊の舊本利缺讀むべからず。嘗て重刊以て學者に惠んと欲して而かも未だ能はず、乏を坂臺に承るに及んで、公暇僉憲吳君原明と朱子の著述を論じて、偶ま此の書に及ぶ、因て予が爲さんと欲する所の者を道ふ。吳君欣然として家藏の善本を出し、其の譌を正し、其の缺たるを補ひ、工に命じ梓に鋳て以て傳ふ。既にして書を以て余に屬して曰く書成る、子其れ之に序して、讀む者をして諸子が此の書を訓釋する所以の意を知て、敢て詞人の賦を以て之を視ざらしめよと。嗟夫大儒著述の旨、豈末學の能く窺ふ所ならんや。然れども嘗て聞けり、孔子の詩を刪る、朱子の騷を定むる、其の意一なり。詩の言たる、以て善心を感じ、逸志を懲創すべし、其の風化に裨あるなり。大なる哉騷の辭たる、皆忠愛の誠心に出て、而して所謂善外より來らず、名以て虛しかるべからず、作者又皆聖賢の格言、放臣屏子をして寂寞の濱に呻吟嘆せしめ、則ち自處する所以の者、必ず其の道あり。而して天とする所の者、幸にして之を聽ば、寧ろ凄然として興感し、其の倫紀の常に迪ざらんや、此れ聖賢刪定の大意なり。此の書を讀む者、其の辭に因て以て其の義を求め、其の義を得て、諸を身に反せば、朱子の意に庶幾して、彫蟲篆刻の末に流れざらんや、



成化十一年歲乙未在在秋八月既望、盱江何喬新書す。

讀楚辭 馮開之

世に屈原あり、迺ち離騷を見る。離騷讀易からず、其の菁華を攬れば、微雲の空を染むるが如し。手に映じて脱し去る、其の瑤實を玩べば、將に青春の主なからんとす。人を移すこと愈よ深し、婉嫺翔翔し、從容綽至す。來去風雨の從ふこと無きが如く、明晦日月の照を停るが若し。巧に注疏に沿隨せば、何ぞ學究禪を談するに異らん。或は更に執して意見を生ぜば、又是れ癡人夢を説く。唯當に地を掃ひ香を焚き、山に馮り水を帶びて、偕に人間に入らず、竟に遠く芳草に投ずべし。是に於て行潔琳琅、聲金石を振ふ、彼の湘靈は其の氷雪の肌を見難からず、何ぞ管我が芬芳の志を售のみならん。冷然として讀めば一唱三嘆其の血縷清微、激激、空中の素を掛け、膚容丹的、層凌水上の瀾を生ずることを見る。意を開けば忽ち鬼神に驚き、眞を披けば提耳に減ぜず、所謂塵滓の上薬を消し、雲天の祕典を踏むなり。王逸が注に至りて其の句を取て爾雅を制す、意調質篤、其の間實を求むること過多にして、鑿空病を取ること無んばあらず。是れ叔師が雅言にして、屈子が本趣にあらざるなり。是の時吳園に留連し、累月無事、舟を菰蒲水草の際に泊む。四窗洞開、甌香茗沸、展讀數翻、口齒清歷、諷覽之餘、稍爲めに意を下して分析す、是れ夫の西施を刻畫して、譏を才士に取ることを免れん爾。癸巳三月上浣の日、眞實居士馮夢禎。

九歌

余九歌を愛す、最も情韻と爲す。清吟細嚼、悠然として善懷なり。友人徐南山瑟を善す、國工なり。其の宮角を案じて譜す。時に一たび撫弄すれば、即ち神を三湘七澤の間に遊ばしむ。雲神を邀へ、帝子に謁し、靈均を求めて之を友とす、此れ誠に楚材の最珍、逸聖の天籟なり。若し神を以て君に喩へ、神に事ふるを以て君を愛するに比するは、意合はざるにあらず、而かも言出て優ち味無きことを覺ゆるのみ。

天問

天問は謂らく、天尊くして問ふべからず、故に問天と曰はすして天問と曰ふ、知らず屈原が胷中忽然として天あり、其の胷中の天忽然として問ふことあり、問ふこと忽然として此に在り、問ふこと忽然として彼に在り、問ふこと忽然として解すべからず、問ふこと忽然として解すべし。情見事物の限量すべきにあらず、而かも亦情見事物の外に出でず、總て雲行き水流る、即ち原も亦其の然ることを知ること莫うして然るなり。化工の點綴するが如く、天籟の瑟に附比するが如し。通篇恢奇譎恠、捉摸すべきこと莫きに似たり。而して審かに題目を視れば、優ち躍然として洞達す。奈何ぞ二字を反して顛倒の見を生ぜんや。

九辯



春女の怨、秋士の悲、以て物の化を知るべし。一たび此の章を誦すれば、人をして肌骨涼を生じ、肺腸空徹ならしむ。時九日に當つて連朝風雨晦の如し、友生鮮少、侍兒に命じて窗檻を展拭し、烏皮几を移し、古鼎を列ね香を焚き、危誦泛覽、周流禪定に入るが如し。少之、瞠目して望めば忽ち見る西山歴落として數ふべく、晴光爽氣、亂雲を激射することを。堆黛の間、便ち覺の天高く氣明にして、神志清邁なることを。忽ち戶外履聲甚厲し、則ち姜羊石、樂子晉の二君子至る。覺えず喜劇し、共に白茗數壺を啜る。今年高きに登る、閨櫺を出すして、崑崙に遊び帝庭に昇る、九を賀すること此の若し。差寂寞ならず。

招隱士

招隱を讀めば、晨に終南に躋りて千仞に獨立す。峯嶽皴磴、仄漫明暉、遶樹歷歷、煩草芊芊、禽鹿奔跂、眞に山靜に太古の意あり。儼然として王孫其の間に出没し、留連して其の處する所の所を知ること莫きがごとし、夏に復筆力驚絶、夏九鼎を鑄る、龍文漫滅して已に自然を成す、蒸變網緼、將に神恠を興んとするがごとし、八公の徒、寧ろ特り西漢の異人のみならん。焉ぞ知らん三代先秦の遺裔にあらざること。即ち諸を穆天の謠、詛楚の物に並るに、吾其の上なるを見る、未だ其の下なるを見ず、謂つべし屈子の畏友なりと。

國譯楚辭後語終

附錄

楚懷襄二王在位事蹟考

懷王

屈復

威王の太子、名は熊槐、在位三十年。  
○癸巳元年、魏、楚の喪を聞き、楚を伐て陘山を取る。張儀初めて秦の相たる四年、秦の惠王始めて王と稱す。  
○戊戌六年、楚、昭陽をして魏を攻めしめ之を襄陵に破る、八邑を取る。所謂南楚に辱しめらるるとは此。

○癸卯十一年、楚從約の長と爲り、趙魏韓燕と秦を伐て函谷關を攻む、秦兵を出して之を逆ふ、五國皆兵を引て歸る。時に屈子左徒たり、王甚だ之を任ず、國內無事、「惜往日篇」に所謂、先功を奉じて以て下を照し、法度の嫌疑を明にし、云云とは是れなり。屈子が功有る此に在り、其の



讒妬を招く亦此に在り。

戊申十六年、齊の潛王元年、秦張儀を使とし楚に約し齊と絶しむ、許すに商於の地、六百里を以てす、楚齊に絶つ、秦地を予へず、遂に秦を攻む。洪興祖曰く屈子疏んせらるること此の年に在りと。屈復案するに「史記」疏んせらるること尙ほ前に在り、疏んせるは止是れ與に國事を議せざるのみ、未だ嘗て其の左徒の位を奪はざるなり。齊に絶つ時疑ふらくは必ず諫しならん。「離騷」に云ふ反て讒を信じて齋怒す。「惜誦篇」に云ふ反て羣を離れて贅疣とせらる、當に俱に此を指すべし。則ち其の位(左徒)を奪はるること此の年に在るのみ。

己酉十七年、春秦、楚を丹陽に敗る、斬首八萬、大將屈匄、裨將逢侯丑等七十餘人を虜す。漢中郡を取る、楚悉く國中の兵を起し、秦を襲うて大に藍田に敗る、兩城を割て以て和す、韓、楚の困を聞き楚を襲うて鄧に至る、楚、兵を引て歸る。屈子廢せらると雖も猶ほ朝に在り、兵必ず敗るるを忿り、當に諫めざる無かるべし。「離騷」に云ふ既に余に替るに蕙纒を以てし、又申ぬるに攬茝を以てす、申とは既に廢せらるるを言ふ、又切に之を責むるなり、則ち前兩次拒るるを見て知るべし、惜誦は當に此の年に作るなるべし。

庚戌十八年、秦約するに漢中の半を分ち楚と和親せんと。懷王張儀を得んことを願うて、地を

得るを願はず。儀至り幣を靳尙に厚くし、鄧袖を説て之を言はしむ、王之を釋す。「屈子齊に使用て反る、諫已に及ばず。愚案するに齊に使用すは、必ず秦爲に謝し、再び前好を修するの欺むかるるを以て、獨屈子を使用する者は、齊に絶つ時を以てす。羣臣皆地を得るを賀す、陳軫獨弔す、而して軫又往て秦に仕ふ、別に使用すべき無し、故に既に紉られ用ひられざるを以てせず。則ち此より前の齊に絶つを諫むること益す知る可し。屈子未だ反らず、舉朝又一人の、王が張儀を釋すの非を諫むる無し、則ち其の靳尙に黨すること亦知る可し、之を黨人と謂ふ所以なり。

壬子二十年、齊の潛王、從約の長たらんと欲し、長を遣り楚に與ふ、楚、昭睢を以て議し、藍田の恥を雪がんと欲す、遂に齊に合し以て韓に善し。「前屈子をして齊に之かかむるは、必ず從を定め恥を雪ぐの計の爲めならん。茲に潛王書至る、而かも又未だ決せざる者は曾て從約の長と爲り、奪はるるを恥るを以てのみ。昭睢の議甚だ確。豈、「離騷」に所謂蘭椒其の人か。

丙辰二十四年、秦の昭王初めて立つ、厚く楚に賂す。楚往て婦を迎ふ、遂に齊に背きて秦に合す。「利に狗ひ信を棄つ、禍を速所以、況や秦は虎狼の國たり、婚姻を以て結ぶべきにあらず。屈子彭咸が死諫を以て法と爲す、必ず越えて諫めて遠遷せられ、其の言語を絶つ。「惜往日篇」に讒人君の聰明を蔽晦し、虚り惑ひ誤らしめ又以て欺く、遠く臣を遷して思はずとは是れなり。虚惑



は當に絶齊を言ふなるべし。誤は當に攻秦を指して言ふなるべし、又以欺は當に背齊合秦を指して言ふなるべし。

丁巳二十五年、懷王昭王と黄棘に盟約す、秦復楚に上庸を與ふ。楚婚姻を恃で往く、然かも武關の辱實に此の盟之を誤る。悲回風篇に黄棘の枉策を施すとは是れなり。屈子遠遷すと雖も、尙南行して死諫せんと欲し、終に諫むるを得ず。思美人篇に此の時に作るなるべし。

戊午二十六年、齊韓魏、楚が其の從親に負くを責め同じく楚を伐つ。楚、太子横をして入て秦に質たらしめ救を請ふ。秦兵至る三國引き去る。諸侯連兵楚を伐つ、本是れ意中の事但救を秦に請ひ、又子を質とす。則ち此れより前の婦を迎へ盟を結ぶは何を爲すや。屈子必ず一の善後の策を思ひて詞を陳せしならん、懷王惟秦の救を以て美好と爲し之に僞る。朝臣又王の怒を造すを以て、敢て其の是非を正さず、聽かざる所以。抽思篇に此の年に作るなるべし。

己未二十七年、秦の大夫楚の太子と鬪ふあり、太子之を殺し、亡げ歸る。案するに敵國の質子、大夫豈敢て私鬪をせん。當に是れ秦の昭王、正しく懷王の愚を知り、實に陰に之を遣り、兵端を醸成せしむるのみ。

庚申二十八年、秦、齊韓魏と共に楚を攻む。楚の將唐昧を殺し、重兵を取て去る。案するに懷

王此の時、當に屈子が言を思うて召回すべし。但未だ其の位に復せず。此の事本屈子と交渉無し、太史公特に敘して傳に入る者は後來武關に會するを諫むる來歴と作すのみ。洪興祖以爲らく、十八年召し用ふと、疑ふらくは字の誤ならん。

辛酉二十九年、秦復楚を攻め、大に楚の軍を破る、死者二萬人、將軍景缺を殺す、乃ち太子をして齊に質たらしめ、以て平を求む。

壬戌三十年、(周赧王十六年)秦復楚を伐て八城を取る、書を遣り楚に與へ、武關に會し結盟せんと、昭睢往く無かれと諫む。王が稚子子蘭、王を勸めて行かしむ。秦詐り一將軍をして秦王なりと號せしめ、兵を武關に伏して懷王を俟つ。至れば之を閉づ。遂に與に西の方咸陽の朝章臺に至る。

藩臣の如く、與に充禮せず、巫黔中郡を割かんと要す。懷王怒る、因て秦に留るを許さず。昭睢謀り詐り齊に計る、齊太子を歸す、遂に立て王と爲る。秦割く所を得ず怒り楚を攻む、大に楚の軍を敗る、斬首五萬、十五城を取て去る。屈子先に武關に入る勿れと諫む、昭睢と所見相同じ、聽かざるを奈何ともするなし。案するに懷王人と爲り貪にして且愚、又矜蓋を好む。貪は則ち利を以て誘ふべし、愚は則ち計を以て取るべし。矜蓋を好めば則ち諛を喜び直を惡む。齊秦の兵反覆を好む、屈子疏放せらる、皆此の三病に坐す。武關欺を受く、只昭睢が言を用ひざるを悔ゆ。



而して屈子に及ばず。則ち矜蓋を好み積怒猶ほ未だ平らかならざること知るべし。

### 頃襄王

懷王の太子名は横、在位三十六年

○癸亥二年、懷王亡逃歸る、秦に楚道を遮らる、問道より趙に走る。納す、又魏に走らんと欲す、秦兵追うて至る、遂に使者と同じく秦に入て病を發す。屈子又江南の野に讒放せらる、怒を令尹子蘭に取るを以てなり。『涉江篇』『招魂』の作當に此の年にあるべし。

甲子三年、(周赧王十九年) 懷王秦に卒す。秦其の喪を歸す、諸侯是れより秦を直とせず、秦楚絶つ。『大招』は當に此の時の作なるべし。『卜居』は四年の作なり。

丁卯六年、秦書を遣り、決戦を約す、楚之を患へ、謀て復秦と平す。秦に敵すべき無きを以ての故なり。

戊辰七年、楚婦を秦に迎ふ。『不共の讐を忘れて好を結ぶ、總て國中無人無きに因る。美政を爲す能はず、故に威勢の劫す所と爲る。』『回風』の作當に此の時にあるべし。『哀郢』は十年、『漁父』『懷沙』は十一年の作なるべし。汨羅に自沈する亦此の年なり。

乙亥十四年、秦の昭王と宛に會し、和親を結ぶ。『此れより末に至る、皆屈子身後の事。』

丁丑十六年、秦の昭王と鄢に好會す、秋復秦と穰に會す。

己卯十八年、楚人匹夫報讐の説を用ひ、使を諸侯に遣り、復從を爲す。秦、楚を伐つ、楚、齊韓と連和し秦を伐んと欲し、因て周を圖らんと欲す。周、楚の相昭子を説しめて止む。『自ら強むる能はず、已に報讐の具を失す、況や又其の主を圖らんや、誠に讒諛虚惑の見なり。』

庚辰十九年、秦楚を伐つ、楚軍敗る、上庸漢北の地を割て秦に予ふ。

辛巳二十年、秦の將白起、楚の西陵を抜く。

壬午二十一年、秦の將白起、郢を抜き、先王の墓夷陵を燒く。楚の兵散じて復戦はず、東北陳城を保つ。『屈子「哀郢篇」に云ふ夏の邱と爲る、兩東門の蕪、十年を過ぎずして即ち驗す。』天問篇に云ふ、吳光國を争ふ久しく余に是れ勝つ。吳光郢に入り平王の墓を掘り、屍に鞭を以てたり。夷陵の燒、何ぞ先見の明乃ち爾る。

癸未二十二年、秦復巫黔中郡を抜く。『前に武關に割を要し予へざる所のもの、又抜き去らる。』

甲申二十三年、襄王東地の兵を收め十餘萬を得たり。復秦の抜く所の江旁十五邑を取り、以て郡と爲し、秦を距ぐ、已に其の國たるを成さず。『天問篇』に云ふ吾堵敖の以て長からざること



告げんの説驗なり。

戊子二十七年、復秦と平す。太子を入て秦に質たらしむ。案するに懷襄兩世、屢秦と好を結び、皆卒に秦に困めらる。總て讒諛事を用ひ、婦を迎へ子を質にするを除く外別に伎倆無し。天問に所謂荆勳を師と作す夫れ何を長きや、早已に道破す。

丁酉三十六年、襄王病む。太子亡げ歸る、秋襄王卒す。太子熊元立つ、屈子著はす所の文、先後次序の考據すべき無し、茲に二君在位の事蹟を將て、年を案じ編輯す。之を『史記』の本傳に參し、凡そ明文ある者、即ち各年の下に繋ぐ。明文無きも、亦各篇の語意を以て之を推す可きが如きは、以て讀者の參考に備ふ。即ち以て屈子が年譜と爲すも可なり。

清潭曰く兩王事蹟考は清初屈復の著はす所、今鄭方坤が撰せる『本朝名家詩鈔小傳』(卷四十)に就て見る、下の如し。「弱水詩鈔小傳」屈復字は悔翁、晩に自ら金粟道人と號す、家世得て詳かにする莫し。即ち同邑人、亦之を悉す者有ること無し。其の詩篇に見る所、大率殘山剩水の思、麥秀黍離の感多し、白首狂夫、歌哭道中、輒向黃河、亂流欲渡の如き、秋を累ね戚を増し已む能はざらしむ。已に疑ふ夏肄周遺の爲作する所の若しと。又或は附鳳攀龍、前明と瓜葛ある者是れに近しと。其の少年の時より、即ち帖を弃て恬として事とせず、隻身萬里に走り、

沂郟の間に寓する最も久し。既にして吳楚に之き、閩越に之き、垂老乃ち轉徙し京師に之く。詩學を以て弟子を教授す。名公卿多く之に従て遊ぶ。武陵冢宰楊公其の才を奇とし、鴻博を以て薦む、三び徵す起す。僧廬に寓するの日、土床中に坐臥す。諸貴人、問寄を以て至る者、趾相錯る。客と約し自ら白す、迎へず送らず、寒暖の語を作さず、來遊を願ふ者は聽す、至れば則ち輿に詩文を講論し、源流派別、并に前史の善敗興亡陳迹より、以て關河扼塞兵馬漕鹽天文律歴に及ぶまで、愷切詳明、坐して言ひ、作ちて行ふべく、鑿鑿乎、藥石の以て病を伐つ可きか如し。彼の枯槁世を忘れ、牖下に老死する者の項背を望むべきにあらざるなり。其の論詩、賦比興の外に于て、端すに寄托を以て主と爲す。謂ふ陶の飲酒、郭の游仙、謝の登山、左の詠史、彼れ自ら心を傷しむる所以の故あり、而して姑らく題を借て發抒す。必ず沾沾然、是の數者を執て之を求む。是れを積を買うて珠を還し、圖を案じて駿を索むと謂ふ。今試に弱水集を取て之を讀む、繁音促節、詞多く悠謬、翁が寄托を知る、固自ら天を出て地に入るあり、而して窮詰すべき者莫し。古の傷心の人、別に懷抱あり、外人が爲め道ふに足らず。翁年七十餘、重て郟邑に至り、其の郷人王大令が署中に寓す。時に余沂州の守たり。予が詩を見、優ち輿に下秋の業を訂せんと欲す。詩集及び註する所の楚詞、義山詩箋を以て相寄す。適ま予歷亭の役わ



り、暗に及ばず。比擬を還す。而して翁已に期に先ち里に歸る。今存亡知る可らず。念ふに翁余と一日知己の言あり、爲めに其の全集を刪り、若干首を得たり、鈔胥に附すと云ふ。

屈原賦中地理考證

戴

震

屈原故宅 湘水 窮石 九疑山 流沙 涔水 河源 三危山 斟尋

羽山 蒼梧 有娥 傅巖 冀州 澧浦 黑水 崑崙山 崑崙氏之虛 南嶽

沅水 白水 有虞 昆侖山 洞庭 九河 交趾 鳴條

有扈 岐陽 郢都 屈潭 汨羅 滄浪之水

有莘 鄂渚 澍渚 夏首 嶓冢山 淮水

盟濯 枉渚 江夏 介山 於微闕

一、屈原故宅

屈原が故宅、今湖北宜昌府興山縣の北、漢南郡秭歸の北境に在り。『水經注』江水篇に云ふ縣東北數十里に屈原が舊田宅あり。畦堰糜漫すと雖も、猶ほ屈田の稱を保つ。縣北一百六十里、屈原が故宅あり、石を累ねて屋基を爲る、其の地を名けて樂平里と曰ふ。宅の東北六十里、女媧廟あり、秭歸の故城即ち今宜昌府歸州治。

二、羽山

羽山は今登州府蓬萊縣東南三十里に在り、古萊夷の地なり。



三、沅水

沅水は牂柯故の且蘭今湖南靖州の西南に出づ、水貴州黎平府より流れて州の境に入る。湘水は零陵陽海山に出づ、山は今廣西桂林府興安縣南九十里に在り、二水同じく洞庭に注ぎ、而して北江に會す。

四、蒼梧

蒼梧は南越の地、漢に郡たり。今廣西梧州平樂鄰州三府其の地を分有す。

五、白水

白水は河源を謂ふ。爾雅に河昆侖虚に出づ、色白しとは、是れなり。

六、窮石

窮石は弱水出る所、『説文』之を岫山と謂ふ。十六國春秋之を蘭門山と謂ふ。漢の張掖、刪丹西南の山なり、故に漢は縣、即ち今甘肅甘州府山丹縣治なり。

七、有娥

有娥は禹貢冀州に在り、『史記』に桀有娥の虚に敗る、漢の河東蒲反即ち其の地、今の山西蒲州府永濟縣。

八、有虞

有虞は禹貢豫州に在り、漢の梁國、虞は即ち其の地。今河南歸德府虞城縣なり。縣の東南義原郷、故の綸邑城あり、春秋傳稱する所、虞思妻すに少康の二姚を以てし諸を綸に邑する者なり。

九、九疑山

九疑山は零陵營道南今湖南永州府寧遠縣南六十里に在り、酈道元『水經注』湘水篇に云ふ、大舜其の陽に窆し、商均其の陰に葬むる、山南に舜廟あり、前に石碑あり、文字缺落、復讖可らず。

十、傅巖

傅巖は『史記』之を傅險と謂ふ。河東太陽の北、今山西解州平陸縣東北二十里に在り、『春秋傳』の顛幹なり。『水經注』河水篇に云ふ、澗水は虞山東南に出で、傅巖に逕し、傅説隱室の前に歴、俗之を名けて聖人窟と爲す。傅巖東北十餘里、即ち顛幹坂なり、東西絶澗あり、左右幽空窮深の地、壑中則ち築き以て道を成し、南北の路を指す、之を謂うて幹橋と爲すなり。傅説、備隱此に止息す、高宗求めて夢に之を得、是れなり。

十一、昆侖

昆侖唐の「吐蕃傳」之を紫山と謂ふ、蕃語之を悶摩黎山と謂ふ、今蒙古之を枯爾坤と謂ふ、譯



して昆侖と言ふ。三山あり、最西にして大なるを河源出る所と爲す者を巴顏喀喇と曰ふ、其の色紫黒、金銀を産す。蒙古之を黒喀喇と謂ふ、富貴を巴顏と謂ふ、故に巴顏喀喇山と謂ふ。東北、西寧邊外を去る千四百五十四里。

十二、流沙

流沙は敦煌の西に在り、今嘉峪關外沙州衛の地。

十三、冀州

冀州は古の帝都、因て以て王畿の通稱と爲す。「春秋傳」に云ふ鄭同姓の國なり、冀州に在るもの是れなり、又以て中土の通稱と爲す、九歌に覽冀州、今有餘とは是れなり。

十四、洞庭

洞庭は「春秋傳」に所謂江南夢、「韓非」に所謂五湖、「戰國策」に所謂五渚、湘水、資水、沅水、微水、澧水の五水會する所故に五と稱す。或は之を巴丘湖と謂ひ、或は之を重湖と謂ふ、長沙下雋西北に在り、今湖南岳州府巴陵縣西南に在り。

十五、潞水

潞水は胡昭明、以爲らく即ち岐江の南派澧水に會す。注に洞庭禹の時、南派盛大、江の經流と

爲る、故に禹貢江を導き又東して澧に至る、戰國の時、則ち南流帶の如し、之を潞水と謂ふ。而して北派を目けて大江と爲す、此れ潞陽大江を横ふ是れなり。北派は禹貢に於て荊州の沱と爲す。

十六、澧浦

澧浦、「水經注」に云ふ澧水洞庭湖に注ぐ、俗之を澧江口と謂ふ。是れ其の地、今湖南岳州府華容縣の南、漢の長沙下雋の西北境に在り、蓋し此に至りて、澧水武陵充西歷山に出づ、山は今湖南澧州安福縣の西に在り。「水經注」又云ふ澧水東南して沅水に注ぐを澧口と謂ふ。蓋し其の枝瀆のみ。

十七、九河

九河は禹貢、沈州と青州との分界に在り。「爾雅」に據れば、徒駭、太史、馬頰、覆鬴、胡蘇、簡、絜、鈎盤、鬲津、是を九河と爲す。「漢書」溝洫志に云ふ、許商以爲らく古説九河の名、徒駭、胡蘇、鬲津あり。今見に成平東光に在り。鬲、中を界す、鬲より已北徒駭に至る間相去る二百餘里、漢の成平故城、今德州の北に在り、山東の濟南府に屬す。閻百詩云ふ、某嘗て燕齊に往來し、西河間に道し、東清滄を履む、孰九河の故道を訪ふ、蓋し昔し北衡漳を流れて之を河に注ぐ、既に東漳に徙りて自から海に入る、安ぞ北流の漳、古の徒駭河にあらざるを知らんや。漳を踰て



南清滄二州の間、古河あり、隄岸數重、地皆沮洳沙鹵、太史等の河當に其の地に在るべし。滄州の南、大連澗あり、西東光を踰え、東海澗に至り、南西無棣縣に至る。百餘里間、大河と曰ふあり、沙河と曰ふあり、皆古隄縣北に瀕す。地を八會口と名く。縣城南無棣溝、東無棣縣に枕す。北に陷河あり、闊數里、西德棣に通じ、東海濱州に至る。北土傷河あり、西德棣を踰え、東海に至る、土傷河最南なり、他河に比すれば差や狭し、是を鬲津と爲すこと疑ひ無きなり。今平原の北、清滄の間、樹蕪を爲すと雖も、城邑相望んで、地形河勢、高隱曲折、往往尋ぬべし、但し禹初九爲り、厥の後或は三、或は五、遷變多寡同じからず、必ず名を案じて索んと欲す、故に後儒紛紛の論を致す。

十八、河源

河源は二泉同じく巴顏喀喇山の東麓に出で、行くこと數里にして合し、東北流三百餘里にして星宿海に至る。蒙古星を鄂敦と謂ひ、水を灘他拉と謂ふ。故に星宿海と名け、鄂敦他拉と曰ふ。東北、西寧邊外を去る千一百一十四里、河又東北に流れ、屈して東南、查靈、鄂靈の二澤を貫ぬく、澤の相去る五十餘里、鄂靈已上蒙古阿爾坦河と曰ひ、已下歸德堡に至るを喀屯河と呼ぶ、河東流し、南北屈折して、積石を過ぎ、南回遠行、七八百里、復其の東北を遶る。唐の魏王泰言ふ

所、大積石山、吐谷渾の界に在るものなり、西寧邊外の西南五百三十餘里に當つて山九峯あり、緜亙三百餘里、禹循行嘗て此に及ぶ、是を以て禹貢を導河積石、昆命積石と曰ふ、昔儒多く惑ふ。

十九、黑水、玄趾、三危山

禹貢二黑水あり、梁の黑水、帝繫之を若水と謂ふ。或は之を瀘水と謂ふ。今の金沙江なり。梁州の南を界す。導川の黑水、則ち雍州の西を界する者、此れ黑水三危並稱、是れ雍の黑水明なり、玄趾未だ聞かず。或は云ふ黑水出る所、禹貢、黑水を導て三危に至る、則ち三危は黑水經る所なり、今山あり而して其の水以て之に當る無し、山は嘉峪關外沙州衛の東南に在り、漢敦煌の故城、即ち今の衛治、「春秋傳」の瓜州の地。

二十、崑山氏之墟

崑山氏が墟、漢の當塗九江なり、山あり崑山と曰ふ。今江南鳳陽府懷遠縣東南八里、淮の東岸にあり。

二十一、斟尋南嶽

斟尋は「漢志」北海の斟京、相璠云ふ故の斟尋國は禹後是れなり。後省き平壽に入る、應仲遠稱する所、平壽の埧城なり、今の山東萊州府濰縣東廢斟縣是れ。衡山を南嶽と爲す。其の北則ち



楚、其の東則ち吳、『漢志』長沙湘南禹貢衡山東南に在り、今湖南衡州府衡山縣の西なり。

二十二、鳴條

鳴條は漢の河東安邑に古鳴條陌あり、今鳴條岡と曰ふ、是れ山西解州夏縣の西にあり。

二十三、有扈

有扈は漢の右扶風鄂なり、漢の故城今縣の北二里に在り、陝西西安府に屬す。

二十四、有莘

有莘國は陳留に在り、今縣東北莘城是れなり、河南開封府に屬す。

二十五、盟

盟は孟たり、語の轉なり、其の地津あり之を盟津と謂ふ。『春秋傳』王鄭に田を與ふ盟其の一なり、後晉に屬す、河陽の盟津と爲す、南漢に在て河内に屬す、今河南懷慶府孟津縣、縣の南十八里に在り。

二十六、岐山

岐山は今陝西鳳翔府岐山縣東北十里に在り。『漢志』右扶風美陽、禹貢岐山は西北中水郷に在り、周の太王邑とする所。

鄂渚は今湖北武昌府江夏縣の西、江中黃鶴磯上三百歩に在り、漢の江夏沙羨界、楚の東鄂遠からず、劉子政が『說苑』稱する所、昔鄂君、青翰の舟に乗り、鄂渚に下り洞庭に浮ぶと即ち是れなり。

二十七、枉渚

枉渚は今湖南常德府武陵縣の南にあり、『水經注』云ふ沅水東して臨沅縣の南を逕り、又東して小灣を歴、之を枉渚と謂ふ是れなり。

二十八、辰陽

辰陽は枉渚より西沅に遡る。『水經注』云ふ沅水東辰陽縣を逕り、南東辰水に合す、水は縣の

三山谷に出で、東南に流れて其の縣北に逕る。舊治辰水の陽に在り、故に即ち名く。楚辭所謂夕

宿辰陽是れなり。右沅水に會す、之を名けて辰溪口と爲す。武陵五溪あり、雄溪、櫛溪、無溪、

酉溪、辰溪を謂ふ。溪を夾んで悉く是れ蠻、左右居る所、故に此の蠻を謂うて五溪蠻と謂ふなり。

二十九、辰溪

三十、激渚



激湫は辰溪縣の南に在り。『漢志』義陵鄧梁山序水出所、西沅山に入る、今辰州府激浦縣東南百五十里に在り、臨沅、辰陽、義陵、漢皆武陵に屬す。

三十一、夏水

夏水首め江を受け沔に入り沔に合し、以て江に會す。其の經る所の地、皆楚紀郢以東に在り、漢高帝江夏郡を置く、今湖北の漢陽、武昌、黃州及び安陸、德安の東南の境是れなり。

三十二、郢

郢は『說文』云ふ故の楚都、南郡江陵の北十里に在り。杜元凱が注、『左氏春秋』云ふ今南郡江陵縣北紀南城是れ江陵、今湖北荊州府故の江陵城に屬す、即ち府治縣附郭なり。『水經注』江水篇に云ふ楚の船宮の地なり、春秋の渚宮なり、渚宮は今城内西隅に在り、城北十里、偃ち紀山を得、故に紀南を以て城に名く。又紀郢の稱あるなり。江水は江陵故城の南を巡り、又東して郢城の南を巡り、又東して豫章口を得。此れ郢城なり。『漢志』云ふ楚の別邑故の郢。

三十三、夏首

夏首は今江陵縣の東南に在り。『水經注』夏水篇云ふ江津豫章口の東中夏口有り、是れ夏水的首、江の汜なり、屈原が所謂過夏首而西浮、顧龍門而不見なり。龍門は即ち郢城の東門なり。

三十四、夏浦

夏水沔水合流して魯山の東南を巡り、江に注ぐを夏浦と爲す。『春秋傳』之を夏洎と謂ふ、或は夏口、或は沔口、或は魯江と曰ふ。今湖北漢陽府漢陽縣東漢口是れ魯山、亦之を翼際山と謂ふ、禹貢の大別山なり。縣の東北百許歩に在り、夏水沔に入り江夏雲杜東に在り、是を堵口と謂ふ。『水經注』夏水篇云ふ、堵口より沔水に下り夏目を通兼して江に會す、之を夏洎と謂ふ。今湖北安陸府沔陽州西北に雲杜故城あり。

三十五、屈潭

『水經注』湘水篇云ふ沔水西羅縣の北本羅子國を巡るなり、又西王筍山を巡る、又西して屈潭と爲る、即ち羅淵なり。屈原懷沙自ら此に沈む、故に淵潭屈を以て名と爲す。淵北に屈原廟あり、廟前碑あり、沔水又西汨羅を巡る、南西流れて湘に注ぐ、春秋の羅洎なり。世に汨羅口と謂ふ。顏師古曰く、『漢書地理志』長沙羅、盛弘が荊州記を引て云ふ、汨に沿うて西北、縣を去る三十里、名けて屈潭と爲す。屈原自ら沈む處、羅の故城今湖南長沙府湘陰縣東北に在り、縣北七十里汨羅山、水中に孤峙す。其の上に屈原墓あり。

三十六、嶓冢山



驩冢山は漢水出る所、今陝西漢中府寧羌州の北九十里に在り。

三十七、介山

介山は今山西汾州府介休縣南四十里に在り、漢の太原界休なり。介子推賞を縣上の山に逃る、晉の文公之を求めて獲ず、乃ち縣上山中を環りて之を封す。以て介子推斯の山に田すと爲す。是を以て介山と名く。

三十八、岐山

岐山は江水導く所の源なり。今四川龍安府松潘衛西北に在り、『漢志』蜀郡湔氐道、禹貢嶓山、西徼外に在る是れなり。『水經注』云ふ益州記曰く大江泉源即ち今聞所始め羊膊嶺を發し、緣崖に下り、散漫小大百數殆んど未だ濫觴せず。閻百詩云ふ、漢漣氏道唐に在て松州と爲す、廣徳の初め、吐蕃に陥つ、宋亦吐蕃の地たり、今松潘衛と爲す。成都府西北七百六十里に在り、岷山又衛の西北二百二十里に在り、大分水嶺と曰ふ、江源出づ。

三十九、淮水

淮水は桐柏山に出で淮浦に至り海山に入る。今河南南陽府桐柏縣西南三十里に在り、漢の南陽平氏なり、故城、縣の西北四十里に在り、淮浦の故城今淮安府安東縣西に在り、漢、臨淮に屬す。

四十、於微閭

於微閭山は今盛京錦州府廣寧縣西十里に在り、周官職方氏東北を幽州と曰ふ、其の山鎮を醫無閭と曰ふ、是れなり。漢の遼東、語轉じ字殊り、地名類ね然り。

四十一、滄浪之水

漢水武當の東北を過ぎ、其の故城今湖北襄陽府均州の北に在り、漢、南陽に屬す。『水經注』云ふ縣西北四十里、漢水の中洲あり。滄浪洲と名く。予案するに尙書禹貢言ふ漾水を導き東流漢と爲る。又東滄浪の水と爲る。過と言はずして爲と言ふは明かに他水決入にあらざるなり、蓋し漢の河水より下滄浪の通稱あるのみ。

草木鳥獸考證

江離	蘼蕪	芷	葳蕤	秋蘭
木蘭	申椒	蘭	菌桂	菑夷
蕙	杜衡	菊		
揭車				



楸しゅう 蒼鳥そうてう 菴くわん 鴟しゅう 三秀さんしゅう 翠すい 紫貝しはい 白頰はくけつ 蕭せう 艾がい 鳳鳥ほうてう 菴か 荷か 薜へい 薜へい 胡繩こじよう  
 鴛うん 白雉はくち 鵠こく 和黍わと 狢たう 螭ち 麻ま 蘋ひん 椴さう 鵝てい 鵝けつ 鴟うん 鸞らん 蕢し 胡繩こじよう  
 篇へん 薇び 玄鳥げんてう 莆ふ 犀さい 女蘿ぢよら 孔雀くじやく 麋び 杜若とじやく 荃せん 雄鳩ゆうきう 皇わう 菴り 菴り 芟き

茶ちや 鳧ふ 薺さい 駒こま  
 蟬せん

**一、江 離**  
 江離、大葉は芎藭なり、芎藭は藁本に似たり。『春秋傳』之を山鞠藭と謂ふ、其の苗之を江離と謂ふ、小葉は之を蘼蕪と謂ふ、蛇牀に似たり。

**二、芷**  
 芷、白芷なり。或は之を菑と謂ふ、或は之を芳香と謂ふ、其の葉之を葯と謂ふ。『九章』云ふ葯房是れなり。

**三、秋 蘭**  
 秋蘭、今の澤蘭なり。『廣雅』之を虎蘭と謂ふ、或は之を虎蒲と謂ふ。『儀禮』既夕篇云ふ綏澤を實たすと。鄭康成云ふ綏は廉薑、澤は澤蘭なり、皆其の香を取り、且溼を御ぐと。廉薑は今の山蘭。『説文』云ふ蔞薑の屬、香を以て口にすべしと、此を謂ふ。

**四、木 蘭**  
 木蘭、高さ數仞、皮桂に似て香あり。『廣雅』に之を桂蘭と謂ふ、或は之を林蘭と謂ふ、椒實多



くして菜たり、故に之を申椒と謂ふ、詩に稱する所、椒聊の實、蕃衍、躬に盈つ。或は以ふ「涉江篇」の露申、辛夷は連文、露申即ち申椒、狀繁露の若し故に名くと。未だ其の審なるを聞かず。

五、菌 桂

菌桂、或は之を筒桂と謂ふ、或は之を小桂菌と謂ふ、禹貢、菌簠の菌の如し。

六、蕙

蕙、「春秋傳」之を薰と謂ふ、薰蕙、語の轉、今所謂零陵香なり。

七、蘭

蘭、詩に之を蘭と謂ふ、或は之を大澤蘭と謂ふ、今の都梁香なり。「夏小正」に、五月蘭を蓄へ沐浴を爲すと。

八、雷 夷

雷夷、詩に之を勻藥と謂ふ。「廣雅」之を擊夷と謂ふ、雷と擊、語の轉、世俗音譌、字を殊にし、稱を異にす、大致然り。

九、揭 車

揭車、「爾雅」之を芘輿と謂ふ。「廣志」云ふ黄葉にして白華と。

十、杜 衡

杜衡、細辛に似て、俗呼ぶ所の馬蹏香なり、蓋し其の狀類を以て之に名く。「爾雅」之を土鹵と謂ひ、「廣雅」之を楚衡と謂ふ。

十一、菊

菊、「爾雅」之を治臙と謂ふ、或は之を日精と謂ふ、或は之を節華と謂ふ、「夏小正」に、九月鞠榮して麥を樹うと。

十二、薜 荔

薜荔、蔓生、木石牆垣に縁る、大なる者、之を木蓮と謂ふ、小なる者、之を絡石と謂ふ。

十三、胡 繩

胡繩、蔓生地に布く、或は之を結縷と謂ふ。「爾雅」之を傅と謂ひ、亦之を横目と謂ふ。

十四、芰

芰、菱なり、楚之を芰と謂ひ、「爾雅」之を蕝擻と謂ふ。

十五、荷

荷、「爾雅」之を芙蓉と謂ひ、其の秀之を菌苞と謂ふ、其の華之を芙蓉と謂ふ。



十六、蕒、蕒、蕒の合聲なり。

十七、蕒

蕒、『爾雅』之を王芻と謂ひ、或は之を蓋草と謂ひ、或は之を蕒莎と謂ふ、染黄草なり。

十八、蕒

蕒、今の蒼耳、周南之を卷耳と謂ふ。『爾雅』之を蒼耳と謂ふ、或は之を泉耳と謂ふ。(清潭曰く蕒するは句會の誤、謬を蕒ふなり)

十九、鸞、皇、鳳鳥

鸞、鳳の次ぎなり、皇は雌鳳、『爾雅』鳳を謂て鸞と曰ふ、凡そ鳳の屬、五色備さに擧ぐ、後漢の太史令蔡衡、光武に對て曰く赤色多き者は鳳、青色多き者は鸞。

二十、鳩

鳩、紫黑色、蝮を食ふ、羽を以て酒に畫せば人と殺す、故に鳩毒と曰ふ、雄を運日と名け、雌を陰諧と名く。

二十一、雄鳩

雄鳩、桑甚を食ふの鳩を謂ふ、仙鶴に似て短尾多聲、『小雅』之を鳴鳩と謂ふ、魯頌陳風之を鳴と謂ふ、司馬彪云ふ鴝は小鳩炙る可き者は是れなり。『春秋傳』之を鴝鳩と謂ふ。『爾雅』之を鴝鳩と謂ふ、或は之を鴝鳩と謂ふ。

二十二、艾

艾、『爾雅』之を冰臺と謂ひ、或は之を醫草と謂ふ。

二十三、鳩

鳩、『春秋傳』之を伯趙と謂ふ、『爾雅』之を伯勞と謂ふ、『夏小正』之を百鷓と謂ふ、『禮注』之を博勞と謂ふ、字、語に隨て轉ず、類ね是の如し。『夏小正』五月鳩則ち鳴く、爾詩、七月鳴鳩、鄭康成が箋に云ふ、爾地晚寒鳥物の候其の氣に従ふ。

二十四、莖

莖、或は之を白昌と謂ふ、昌蒲の劍脊無きもの、昌蒲或は之を節と謂ふ、『廣雅』之を昌陽と謂ふ、或は之を堯韭と謂ふ、其の根之を切る四寸、菹と爲し昌蕒と曰ふ、禮の昌本なり。

二十五、蕭

蕭、『爾雅』之を萩と謂ふ、『禮注』之を薤蒿と謂ふ。



二十六、楸さつ、菜萸さいゆなり、「内則」之を藪きと謂ひ、「廣雅」之を櫟たうし子と謂ひ、亦之を越椒あつせうと謂ふ。

二十七、杜若とじやく、今の高良かうりやう蓋み其の實之を紅豆蔻こうとうこうと謂ふ。

二十八、白蘋はくひん、蘋ひん、莎さに似て大、白しろき者之を白蘋はくひんと謂ひ、青あをき者之を青蘋せいひんと謂ふ。

二十九、蘋ひん、或は之を茱萸あまひと謂ふ、其の葉四衢よぐ、故に又四葉菜えんさいと呼ぶ、五月白華びつはくわあり。

三十、麋び、青色牝多せいしよくひんおほし、澤獸たくじうなり、麋子びし之を麋まうと謂ふ。

三十一、紫貝しはい、紫質ししつ黒文こくぶん、日南にちなんより出づ。

三十二、麻ま、之を泉いと謂ふ、古雅こがの通語つうごなり。「禮」牡麻はまを以て泉麻しまと爲し、黃麻ふんまを苴麻しよまと爲す。洪興祖こうこうそ

曰く瑤華えうくわは麻華まくわなり、其の色白しろし、故に瑤たまに比ひす。

三十三、孔雀くじやく、或は之を孔雉こうちと謂ふ。

三十四、翠すゐ、「春秋傳」所謂いはずる鸛かほなり、赤色せきしよくを翡ひと謂ひ、青色せいしよくを翠すゐと謂ふ。

三十五、螭ち、龍りゆうの若ごとくにして黄き、角無つくなし。

三十六、女蘿にょら、今いまの松蘿しょうら、色青いろあをく松上しょうじやうに延しく。

三十七、三秀ししう、芝しは一歳さい三たび華はなく、故に之を三秀ししうと謂ふ。「爾雅」之を茵いんと謂ふ。

三十八、狢い、狢い、印鼻長尾いんびちやうび、「禮」之を蟬せみと謂ふ。

三十九、犀さい



犀、沈牛に似て、豕首庫足、足に三蹠あり。

四十、鴟

鴟、今の鴝なり、詩之を鴟と謂ふ、鴟と鴝、語の轉なり。

四十一、柀

柀、今之柀と謂ふ、以て酒を爲る、所謂柀鬯、其の分香調暢を言ふ、故に酒を名けて鬯と曰ふ、祭に及んで鬱金草を築き以て酒に和す、之を鬱鬯と謂ふ。

四十二、菹

菹、莞類なり、始め水中に生ず、色白きもの取て以て菹を爲る。『禮』の深蒲なり。

四十三、藿

藿、今の荻なり、『夏小正』、曰く藿の未だ秀ならざるを菘と爲し、菘の未だ秀ならざるを蘆と爲す、菘は、『爾雅』之を藨と謂ひ、亦之を藨と謂ふ、藨は其の色なり、藿の小なるものを兼と謂ひ、吳人之を藨と謂ふ、蘆は詩に之を葭と謂ふ。

四十四、鵠

鵠、鴻の類、或は之を天鵠と謂ふ。

四十五、玄鳥

玄鳥、燕燕之を玄鳥と謂ふ、齊魯の間、之を乙と謂ふ、或は之を鷦鷯と謂ふ、『夏小正』、二月來降燕乃ち睇る、九月玄鳥蟄すと。

四十六、蒼鳥

蒼鳥、鷹なり、『春秋傳』之を爽鳩と謂ふ。

四十七、白雉

白雉、翰雉なり、亦之を朝雉と謂ふ。

四十八、薇

薇、藿に似たり、蜀人之を巢菜と謂ふ。

四十九、楸

楸、赤梓之を楸と謂ふ。

五十、鷺

鷺、今の鴨なり、『内則』之を舒鳧と謂ふ、鷺鴨語の轉なり。

五十一、菴